

WORLDTRIGGER THE
ORIGIN

taipho

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もう彼女は悲しませたくない。

その為に彼は戦う。

※第1話は2月3日午前0時に投稿、2話から4話は1週間事に投稿、5話以降はジャンプSQ発売日に合わせて投稿の予定でしたが思いのほか筆が進んで皆さんあんま興味なさげなので思い切って今まで書きあげた分を5日から10日まで連続投稿します

※多分あらずじ詐欺みたくなる可能性大(てか、それっぽいこと書いただけ)

※R-15、残酷な描写、アンチヘイトタグはあんまよくわかってないけど一応付けてなかって消されることがないようにつけときます。

※クロスオーバーではキャラは出さずキャラの設定をかりたり能力をワートリに当てはめてたりします

※単行本未収録の原作ネタバレありなのでご注意ください。

※単行本に収録されてはいますがクロスオーバー作品のネタバレもあります。

※タグに乗っていない作品からアイデアとしていくつかパクってますけどあ全くお

なじってわけじゃなくちゃんといじってます

※F a t e Z E R O にハマって衛宮切嗣のスタイルが二ノさんスタイルに近いことに気がついてワートリで再現したら強そうとおもっただけ。

ただしあるご都合主義的な物があるため相性のいい戦いが多くなりチートっぽく見えますが負ける時は負けません。

目次

プロローグ＋最上達也	1
近界民との出会い編	
原作開始	20
原因説明	37
黒トリガー	62
空閑遊真	87
黒トリガー②	107
迅悠一＋最上達也②	128
幕間①	146
空閑遊真②	159
三雲修	174

空閑遊真③	198
レプリカ＋最上達也③	221
大規模侵攻編	
大規模侵攻	241
大規模侵攻②	266
大規模侵攻③	290
大規模侵攻④	312
大規模侵攻⑤	332
B級ランク戦編	
最上達也④	356
最上達也⑤	371
玉狛第二	391

プロローグ十最上達也

「ん……………敵襲……………」

この辺り一带に敵襲を告げる警報が鳴り響く

「報告員：敵は『角付き』である事から『神の国』だと推測されます！中には少なくとも3体の『黒角』を確認しました!!」

敵戦力を確認した兵士が泡をくった様子で騒ぎ立てる。どうやら襲撃してきたのはこの世界では最大級の規模の軍事力を持つ『神の国』。白の『角付き』とは何度か戦闘した事があるが、黒の『角付き』と戦うのは初めてだ。今使えるトリガーでは戦えば死ぬのは免れないだろう。

———この国はあとどれくらい保つのか

大国からの侵略に抗い続け、恐ろしい速度で死んでいく兵士を補充するために、ただでさえ貴重なトリオン兵を投入して絶え間なく他の国から奴隷を確保する。

ボクはタダの傭兵だが、部下は全員そうして連れてこられた奴隷だ。しかし、どうやらその無茶な戦線維持もここまでらしい。

「何をしている、クズどもが！さっさと時間を稼げ!!」

本国の将官がなりたてる。どうやらこの国のお偉いさん方は傭兵であるボクも含めた奴隷たちを捨て駒に退却するらしい。

「我らの為に死ぬるのだ、光栄だろうが！一匹でも多く敵を殺せ!!…貴様も高い金払って雇ったんだ！キツチリ払った分の仕事をしろよ!!」

「チツ……………了解…」

コチラにも目的がある。こんなところで命を捨てる訳には行かない。幸い例の物は昨日のうちに確保出来ている。だが、元々はタダの民間人だった彼らを見捨てたくはない……………姫様……………ボクは……………どうすればいいのでしょうか…

——いや、決まっている！彼らを1人でも多く故郷へ帰してやるんだ！元同盟国の者としてボクにはそれを果たす義務がある！

だがどうあっても、圧倒的な戦力差は覆せない。1人、また1人とその命を散らしていく。だが、その戦場の中で1つだけ気がついた事があった。それは命を散らして行っ

た彼らは皆、この国の者たちの肉壁として敵の本来死ぬ事を意図せずした攻撃により死んでいつているのだ。

この国の民は自らの故郷を自らで守らず、彼らの言う『クス』に国の命運を預けたのだ。

命を脅かす敵から目を背け、振るうべき剣をすてたのだ。

その結果としてこの戦場で戦える兵士は瞬く間にボク1人となった。

◆ WORLD TRIGGER ◆

私はこの遠征に参加しなければよかったと初めて思った。何故なら人が人を盾にし

て逃げ惑い、牽制するための攻撃ですらその盾を棄てても躲さず命中させてしまう。そしてその殆どが致命傷だ。彼らの発言からするにその盾はどこかの『国』から攫ってきたのだろう。殺すつもりが無い攻撃で人が死んでいく様を見てまだ戦場の経験が浅かった私は魔界だと思った。

「ミラ。1人、面白い者を見つけた。」

私の『国』のトップの1人であるベルデイストン家当主であるハイレイン。——
今回の遠征の指揮を執る隊長——が、私にある者の戦闘を見せてきた。

そこに映って居たのは大国である我が国ですら13本しかない貴重な戦力のうちの1つ『泥の王』を持つ青年とそれを圧倒する少年だった。

「隊長……コレは……」

「ミラ、彼を捕らえたい。『窓の影』で私をサポートして欲しい。」

「了解しました。ゲートを開きます。」

彼は何故ここまで抗えるのだろうか。その疑問を胸に私はゲートを開いた。

結局ボクは誰一人生き残らせる事が出来無かった。そしてタダの八つ当たりだと知りながらも、目の前の『黒角』に対して引き金を引かずには居られなかった。

「ぐお……………!!」

何なんだ彼は…確かに俺たちは彼から見れば敵だが、なるべく殺さないようにしていた！元々捕獲の命令が出ていたし、この国の主だった兵士が違う国から連れてこられた『奴隸』である事も彼らの喚きから悟っている!!彼らが死んだのは明らかにこの国の連中の所為だろう！なのに何故奴らに向けた憎悪をコチラにも向けてくる!?

「くっ……………!!」

気圧されて何時もの動きが出来ていない！向こうはタダの射撃トリガー。しかもノーガードで常に攻撃の手を緩めず攻撃してくる。なのに何故かコチラの攻撃が一切通用していない！もう既に30発程本命の弱点カバーに当てられているというのに一

切割れる気がしない。その程度のトリガーしか無いのに何故こんなにも押されているんだ！気圧されていたとしてもありえない！

既にこの『黒角』と戦い初めてから20分は経つただろうか？ここまでタダ我武者羅に撃ちまくっていたせいでもうトリオンが残り少ない。だがボクは死ぬ訳には行かないことを思い出した。『彼女』との約束を果たさなければいけない。その為ならどんな事をしてでも生き抜こう。その為にもこの残り少ないトリオンは少しでも温存しなくてはいけない。幸い相手はコチラを警戒して今はお互い姿を隠している。

そしてボクがこの場を離脱しようと後ろを振り向いた瞬間、ボクの後ろにはゲートとそこから出てくる2体の『黒角』が居た。

私がゲートを開くと同時に隊長は『魚』を彼に向けて放った。が、彼の持つ射撃トリガーによって全て迎撃されてしまった。隊長は動揺しすぐ様追撃するが、私は彼の戦いに見惚れてしまった。

この撃ち合いが3回ほど行われた後、余裕を取り戻した隊長が彼に話しかけた。「素晴らしい腕だ。この国に置いておくには惜しいな。我々と共に来い。」

この言葉に彼は目の色を変えて反応した。

「俺は傭兵だ俺のこの場での命の保証と永久的な今持っている持ち物の保証さえされれば何時でも雇われてやる」

私には信じられなかった。何故なら彼はタダの雇われた傭兵に過ぎなかったのに『隷』達にあそこまで情を持っていたのだから。

「いいだろう。タダの傭兵であると言うのなら我々としても扱いが楽でいい。それに意図せずとは言え『彼ら』の死に様は我々としても無下に出来ない。一応の責任として君への待遇は良いものであることを私の名にかけて約束しよう。」

ああ、助けられた。ボクは助けられなかったというのに……………。

本当に感謝してもしきれない。この救われた命は君達と同じ境遇の人をもう『彼処』から出さないようにするために使うと誓おう。その為にも……………ボクは……………。

「今まで色々ありがとう。ミラ」

「いえ、大した事では無いわ。タダどうやって隊長を説得したの?」

「2年前にあの国の黒トリガーを1つパクってね(ホントは2つだけ)。それ使って交渉をしただけさ」

「なるほど。だから奴らあんな真似を……………」

「いや、それは関係ないよ。どの道適合者ゼロで誰も使えなかったシロモノだからネ。」

「使えるかどうかわからないもので交渉するなんて……………流石ね。」

◇2年後◇

「ありがとう」

「ええ」

ボクは敵だったハイレインと交渉した結果、『神の国』と呼ばれる大国『アフトラトル』を統治する四大領主の一角にして最大派閥を率いるベルティストン家に傭兵として雇われ、2年間の間に戦った。そして、ボクの目的は2年前に達成しており、あとは『玄界』と呼ばれる世界に戻るだけである。『玄界』に行く為には『アフトラトル』の軌道が『玄界』に近くなってはならないが、何十年かに1度、『アフトラトル』と『玄界』の間にある名も無き乱星国家が通るのだと言う。実際のところ乱星国家と言っても軌道は決まっているらしく、軌道が複雑で一周するのにとてつもない年月がかかるため軌道が近くなるのは乱星国家とそう変わらない頻度らしい。そして運のいい事にそれがもう来ているのだ。ボクはそれを知っていたからこそこの2年の間傭兵として敵国となるであろう『アフトラトル』で過ごして来たのだから。

「もう行かないと……………」

「そう……………。行先は聞かないでいいわ。そして、また会いましょう？その時は…………その…………ひ、秘密にしてた事を教えてあげるわ：／／／／／」

「……………そっか。そうだね、なら次会うときは敵同士じゃないことを祈っておくよ。」

「ええ。さようなら。」

「ああ、また……………ネ。」

こうしてボクは小型の遠征艇に乗り込み乱星国家を經由して『玄界』へと帰還した。

◆ WORLD TRIGGER ◆

『反応アリ…誤差7.28 『門(ゲート)』開きます!』

「了解した!」

通信から聞こえる綾辻の報告に答え、ゲート発生場所へ向かう。

「俺は充と援護する!前衛は頼むぞ木虎!」

「了解!」

「了解です!」

ゲートの端が小さな雷のようにチリチリと迸り、暗闇から浮かび上がるかのように白

い装甲のトリオン兵たちが姿を現した。

全部蜂の巣にされた状態で

「な……………っ!?!」

『何、これ』

俺達が混乱する間にも、ゲートからは絶え間なくトリオン兵の残骸があふれ出てくる。

原型をギリギリで保ったバムスターの頭が出てきた所で残骸は止まった。

「こんなの初めてだ……………」

「何が起こっているの……………?」

突然の事態に沈黙が降りるなか、辺りを警戒していた充が何かに気が付いた。

「まだ何か来ますよ」

収縮を始めるゲートが空に消える直前、トリオン兵に比べるとかなり小さな影を吐き出した。

ちようど人間くらいの大きさの——

「ひ、人だ!!」

「なんですって!?!」

「まさか、人型近界民!?!」

混乱した状況にあってもA級である俺達はすぐ様戦闘態勢に入った。すると、5秒も経たないうちに戦闘服のような格好の、おそらく同年代の青年が出てきた。

「ああ、帰ってきた……………ん？」

その人型近界民はコチラに気が付いたようだ。だが、俺は彼をどこかで見たことがあるような気がする。

「あ！准じゃないか2年半振りくらいだね！」

彼は俺を見て確かに准と言った。2年半振り……………思い出した！

「もしかして…達也さん！帰ってきたんですね！」

「ああ！ちよつと時間はかかってしまったけど……………ネ」

「あ、あの！嵐山さん、コチラの方は？」

「そうか、木虎は知らないんだつたな。この人は『最上達也』さんと言って旧ボーダー時代から居た人なんだけど、2年半前くらいからある事情で近界に単独で遠征に行っていたんだ！」

「っ!?……………た、単独で……………ですか!？」

「ああ、それで城戸さん達に報告に行きたいんだが、連れて行ってもらえるか？」

「了解です！」

◆WORLD TRIGGER◆

「失礼します！最上達也、ただいま帰還致しました！」

「ああ！久しぶりだね、よく戻ってきてくれた！」

「それで……例の物は回収できたのかね？」

「ええもちろん！コチラに……」

ボクは司令部の会議室に入るなり、帰還の報告をする。するとそれに忍田本部長が激励してくれる。だが、すぐ様城戸司令が本題に入った。ボクが近界に回収しに行っていた目標物、それは約5年前の戦いの折に産み出された『旧ボーダー隊員の黒トリガー』だ。

「御苦労。……君は玉狛に戻るのかね？」

「ええ、まあ。その前に本部で知ってる隊員達に挨拶回りと今のボーダーのトリガーの基本的な使い方を教えてもらったりするつもりですけど」

「そうか、だが今は遠征中で太刀川、冬島、風間、出水隊員が居ない事は覚えておきたまえ」

「了解です。では失礼します」

そう言つてボクは会議室を後にする。……………そうだな、まずは東さんのところ行つてみるか…

◇◇3時間後◇◇

やっと挨拶回り終わった。姫様には泣きながら怒られてしまったが……………。ログのお陰でなかなか面白そうなの思い付いたし、エンジンルーム行つてトリガーも新調したし。後は試すだけだな。まあそれは玉狛でやればいい。

◇ 玉狛支部 ◇

「最上達也、ただいま帰還致しました！」

「おう！おかえり達也。元気そうで何よりだよ」

「林藤さんこそお元気そうで何よりです。」

「面白いや小南達には会ったのか？」

「あ、ハイ。桐江には泣かれましたけど……………」

「まあそれだけ心配してたんだな。」

「そうですね……………後は知らないメガネの子が居て挨拶したのと、若には忘れられてました……………」

「あ……………面白いやお前が遠征行った時ついていやまだ2歳だからなあ。無理もないわ」

「そうなんですけどやっぱりシヨックなのはシヨックですネ……………」

「それと桐江と模擬戦もやりました」

「お！そうかそうか！で、結果は？」

「一応8対2で勝ちましたけど」

「そりやすげえな！」

「まあ今は合成弾なんて便利な物とかあるんですネ。後は銃を改造できたりとか」
「出水がなんとなくで作ったんだよ。」

「なんですかそれチートじゃないですか」

「まあお前もなかなかチートだろ」

「否定はしませんがボクのは単純な戦闘経験です！」

そう言うのと林藤さんは豪快に笑い飛ばして部屋から出て行ってしまった。すると入れ違いのように自称実力派エリート、他称セクハラエリートが入ってくる。

「なんか失礼な事考えなかった？俺のサイドエフェクトがそう言ってるんだけど」

「いえ、そんな事ないヨ。自称実力派エリート、他称セクハラエリートだなんて微塵も」

「普通に口に出しといてよく言うよ。全く………とりあえず久しぶり達也さん」

「ああ、やつと取り返したよ。まあ使える奴が居るかどうかわからないけどね」

「それでもアレはボーダーにあるべきだと思うよ。」

「そうだな。よし、久しぶりに飯食いに行こうか。迅」

「いいね、あ、もちろん今日は俺が奢るよ」

「さすが太っ腹」

この後キッチリとラーメンを奢ってもらい、やはり玄界の料理はいい物だとしみじみ思った。そして、主役はもう揃いつつある。もうすぐ一人の近界民と黒トリガーを巡った物語が始まりを迎える。

近界民との出会い編

原作開始

三門市

人口28万人

ある日この街に異世界への『門（ゲート）』が開いた

『近界民（ネイバー）』

後にそう呼ばれる異次元からの侵略者が『門』付近の地域を蹂躪

街は恐怖に包まれた

こちらの世界とは異なるテクノロジーを持つ『近界民』には

地球上の兵器は効果が薄く

誰もが都市の壊滅は時間の問題だと思い始めた

その時

突如現れた謎の一団が『近界民』を撃退しこう言った

「こいつらの事は任せて欲しい」

「我々はこの日の為にずっと備えてきた」

『近界民』のテクノロジを独自に研究し、『こちら側』の世界を守るために戦う組織
界境防衛機関『ボーダー』

彼らは僅かな期間で巨大な基地を作り上げ、『ネイバー』に対する防衛体制を整えた
それから4年

門は依然として開いているにもかかわらず三門市を出て行く人間は驚くほど少なく
ボーダーへの信頼に因るものか多くの住人は

時折聞こえてくる爆音や閃光に慣れてしまっていた……………

◆WORLD TRIGGER◆

ピリリリリ〜♪〜♪〜♪

達也「もしもし？どうかしたのか？」

嵐山『達也さん、今三門市立第三中学校の近くですよね？』

達也「そうだけども……もしかしてアレ？最近多いつていうイレギュラーゲート？」

嵐山『そうです、俺達より近いと思うので先に行つて対処お願いします！』

達也「了解、了解。避難優先でよかった？」

嵐山『はい！よろしくお願いします！』

達也「OK。じゃあね〜」

達也「トリガー、オン」

ボクは嵐山隊長嵐山准からの連絡を受け三門市立第三中学校へと向かうためにト

リガーを起動し駆け出す。

遊真「もう一匹」

2体現れたモールモッドの内の1体を見事真つ二つにした遊真は外から登ってきた2体目のモールモッドの攻撃をシールドで防ぎ、弱点である目を一撃で切り捨て撃退した。

遊真「登ってきてくれたおかげで下まで行かずに済んだ。任務完了だな」

修「……………」(訓練用トリガーでこんなにあっさり……………!)

遊真「ほい、オサム」

修は遊真から渡された自分のトリガーを懷疑そうに見つめる

修「僕が使った時と全然違う……………。なんでだ……………!」

???『それは「トリオン」の差だ』

いきなりでてきた炊飯器状の物体に修は驚く

修「しゃ……、しゃべった!?なんだ!?そいつは!!」

遊真「珍しいなレプリカ、俺以外としゃべるとか」

レプリカ『うむ、はじめましてオサム、私の名はレプリカ。ユーマのお目付け役だ』

修「お目付け役……!?」

レプリカ『以後よろしく』

遊真「だいいじよぶだつて嘸み付きやしないから」

修はレプリカを懷疑そうに観察する

修（生き物……? ロボット……? コレもトリガーの1種なのか……?）

レプリカ『オサムにはユーマが世話になっている。お返しに私がオサムの疑問に答えよう。「トリガー」と「トリオン」の関係についてだ』

レプリカが修に『トリオン』の説明をしようとするが乱入者が現れる

達也「……話してるとこ悪いが一旦そこまでだ。ボクは最上達也。……悪いんだけどボクは一方的に君の事知つててネ。君の父親にはちよつとした恩があるからなるべく力になるつもりでいる。たとえ君が『近界民』であつたとしても……ネ」

遊真には『嘘を見抜く』サイドエフェクトがあるため乱入者、最上達也の言っていることが嘘では無いと見抜くがなぜ自分の事を知つてるのか疑問に思う

遊真「親父は俺が死んだら日本に行け。そこに俺の知り合いが居るはずだつて言つて

ただけど」

達也「ああ知ってる。君が探している最上宗一はボクの義父に当たる方でネ。詳しい事は多分1日、2日経てば訊つて人が接触してくると思うからそちらに聞いてくれ。手順を色々踏む必要があるんだ。」

遊真「嘘じゃないっぽいけどなにかあるね」

達也「悪いがボクのサイドエフェクトが迅に任せろって言ってるんだ」

遊真「なるほど。それなら納得だ」

達也「この状況もサイドエフェクトで把握している。今から少々面倒な奴が来るからここは任せてくれ」

話の流れに着いていけてなかった修がトリオン兵に付いて弁明をしようとす。

修「あの……………！」

達也「大丈夫。君が訓練生でその訓練用トリガーを白髪君が倒したのも知ってる。悪い様にはしないから安心してくれ」

修「は……………、はい！ありがとうございます！」

達也「うん。そろそろ出た方がいいな。ボクは一応現場検証するからメガネ君が白髪君を支える形でみんなの所へ行くといい」

修「りよ、了解です！」

2人が外に出て遊真が周りの生徒達に修の武勇伝を話してる時に漸く後続の嵐山隊が現着する

嵐山「嵐山隊現着しました」

達也「もう終わってるよ。ボク達が来るのが遅かったせいとその白髪の子が危なくなつたみたいで隣のメガネ君がC級トリガーで撃退したようだ」

嵐山「了解です！………えつと…メガネ君名前は？」

修「み、三雲修です」

嵐山「そうか！三雲君！良くやつてくれた！君が居なかつたら犠牲者が出ていたかもしれない！うちの弟と妹もこの学校の生徒なんだ！」

後続として来た嵐山がキョロキョロと周りを見渡しながら言い弟と妹を見つけるとすぐさま抱きつきに行つた

嵐山「うお~~~~~っ！副！佐補！」

副「うわっ！兄ちゃん！」

嵐山「心配したぞ~~~~！！」グリグリグリ

佐補「ぎや~~~~！やめろ~~~~！」

周りは皆唐突な事に呆然としているなか、一通り撫で終えた嵐山がモールモッドの方へと向き直る

嵐山「いや、しかしすごいな！ほとんど一撃じゃないか！しかもC級トリガーで……。こんなの正隊員でもなかなかできないぞ！」

修「いえ、そんな……」

嵐山「お前ならできるか？木虎」

すると、修が褒められていることが気に食わない木虎はモールモッドをスコープオンで細切れにする

木虎「できませんけど、私はC級トリガーで戦うような馬鹿な真似はしません。そもそもC級隊員は訓練生。訓練以外でのトリガーの使用は許可されていません。彼がした事は明確なルール違反です嵐山先輩。違反者を褒めるような事はしないでください」

木虎の余計な一言で学生達の間にとよめきが走る

達也「それについてはボクが上に持っていく。この場で余計な事はしないでくれ」

木虎はぼつと出の達也の事が気に食わないのか突っかかる

木虎「そもそも貴方の方が大分距離が近かったハズです！なぜそんなヘラヘラとしてられるんですか！」

達也「そもそも人的被害が出てないのと、サイドエフェクトで見た感じこうする方が良いと思ったから」

木虎「なっ………！」

達也「正直な話メガネ君に任せても人的被害が出ないのがわかってたし、それで仮に人的被害が出そうになってもそれを防げるだけの腕がボクにはある。それでも不満なら後で個人戦でいくらでも潰してあげるけど？」

木虎（……………なんなの……………!?この人……………!）

時枝「ハイハイ、そこまで。現場調査終わったから回収班呼んで撤収するよ」

木虎「時枝先輩……………でも……………」

時枝「さつき最上さんが言ったようにこの案件は上に持っていくべき事案だ。ですよね?嵐山さん」

嵐山「なるほど!充の言うとおりだ!今回の事は達也さんが報告してくれると言ってくれているので三雲君は今日中に本部に出頭する様に!」

修「は……………はい!」

こうして三門市立第三中学校でのイレギュラーゲート事件は終息した

迅「迅悠一、お召により参上しました」

城戸「御苦勞」

ビシツと敬礼をしながら自称実力派エリートが会議室に入室する

入ってきた実力派エリートを見て修は以前『トリオン兵』から助けられたときを思い出す

迅「お、キミは？」

修「あ……………三雲です」

迅「ミクモくんね。おれ、迅。よろしく」

修（さすがに覚えられてないか…………）

城戸「揃ったな。本題に入ろう」

自己紹介が終わったところでボーター本部司令の城戸が本題を切り出す

城戸「昨日から市内に開いているイレギュラー門の対応策についてだ」

忍田「待つてください。まだ三雲くんの処分に結論が出ていない」

鬼怒田「結論？そんなもの決まっとうクビだよクビ。重大な隊務規定違反、それを

1日に2度だぞ？」

根付「他のC級隊員にマネされても問題ですし、市民に『ボーダーは緩い』と思われるたら困りますしねえ」

鬼怒田「そもそもコイツのようなルールを守れんやつを炙り出すためにC級にもトリガーを持たせとるんだ。バカが見つかった、処分する。それだけの話だ」

迅「おお、すごい言われようだな」

修「……………」

忍田「私は処分には反対だ。三雲くんは市民の命を救っている」

根付「近界民を倒したのは木虎くんでしょう？」

忍田「その木虎が三雲くんの救助活動の功績が大きいと報告している」

修「……………！」

迅「へえ、あの木虎が」

忍田「さらに嵐山隊の報告によれば三門第三中学校を襲った近界民は三雲くんが単独で撃退している。隊務規定違反とはいえ緊急時にこれだけの働きができる人間は貴重だ。彼を処分するより、B級に昇格させてその能力を發揮してもらおう方が有意義だと思うが？」

城戸「本部長の言うことには一理ある……………が、ボーダーのルールを守れない人間は私の組織には必要ない」

忍田「……………」

一通り問答を終え、城戸司令が出した結論に対して全員が押し黙る

城戸「三雲くん、今日と同じようなことがまた起きたらきみはどうするね？」

修「……………」それは……………目の前で人が襲われてたら……………やっぱり助けに行くと思います」

鬼怒田「ほれ見ろまるで反省しとらん。クビで決まりだ」

唐沢（馬鹿正直なヒーローだな……………これでクビとはもつたいたい……………）

修の返答を聞いた鬼怒田開発室長はそれ見た事かと責め立て、唐沢外務・営業部長は内心で修を惜しむ

根付「三雲くんの話はもういいでしょう。今はとにかくイレギュラー門をどうするかです！」

根付メディア対策室長が急務であるイレギュラー門の対策を優先すべきと進言する

根付「先程の爆撃でわかっているだけでも18名が死亡、重軽傷者100名以上、建物への被害は数知れず、第1次近界民侵攻以来の大惨事ですよ！このままでは三門市を去る人間も増えるでしょう。被害者への補償も大変な額になりますよ。ねえ唐沢さん」

唐沢「いや、金集めは私の仕事ですから。言ってもらえれば必要なだけ引つ張つてきますよ。しかし今日みたいな被害が続くとさすがにスポンサーも手を引くかもしれません」

せんね、開発室長」

鬼怒田「……………それは言われんでもわかっとする。しかし開発部総出でもイレギュラー門の原因がつかめんのだ。今はトリオン障壁で門を強制封鎖しとるが……それもあと46時間しかもたん。それまでにどうにかせんと……」

迅「ふむふむ」

林藤「……………で、お前が呼ばれたわけだ。やれるか？迅」

迅「もちろんです。実力派エリートですから」

鬼怒田・根付「……………!?!」

根付「どうにかなるのかね!?!」

迅「任せてください。イレギュラー門の原因を突き止めればいいんでしょう？そのかわりと言っちゃなんですけど、彼の処分はおれに任せて貰えませんか？」

鬼怒田「!?どういうことだ……………!?!」

城戸「……………彼が関わっているというのか？」

迅「はい、おれのサイドエフェクトがそう言ってます」

忍田・???「……………!?!」

達也「それに関してはボクも同意で。さらに言えば彼がいないとこの先予想される大規模侵攻で第1次以上の被害を産むことになる」

今まで口を挟まず静観していた達也がここで決定的な発言をする

忍田「……………それは……！」

城戸「……………いいだろう好きにやれ」

鬼怒田「城戸司令……………！」

城戸「解散だ。次回の会議は明日21時よりとする」

達也「あ、もう1つ」

城戸「……………なんだ」

達也「三輪あたりは薄々察してると思いますが、今この街にはあなた方の言う人型近界民がいます」

城戸「!?……………なんだと!？」

達也「彼の正体についてはまたおいおい話しますが、彼をこちら側に引き込めるかどうかが大規模侵攻での被害の増大に直結する。コレはボクのサイドエフェクトの結論です」

城戸「……………なるほど、つまりはその近界民の扱いをお前に一任しろと言うことか……………最上」

達也「話が早くて助かりますけど、ボクにじやなく玉狛に一任して貰います」

忍田「……………!……………その被害規模の差はどのくらいになる?」

達也「ボーダー本部の壊滅と第1次侵攻の倍の被害が出るか、ボーダー本部健在と第1次侵攻の40分の1になるかですな」

城戸「……………よかろう。我々の敵は近界民だが、市民の安全が最優先だ」

達也「城戸さんならそう言ってくれると思つてましたよ」

迅「さて、ではよろしく頼むぞ『メガネくん』」

修「(覚えて…………)は、はい!」

交渉が終了したところで迅が動く

迅「おれが原因見つけてくるからそのあとはよろしくね鬼怒田さん」

鬼怒田「わかつとるわい!」

迅「根付さん、根付さん。これ見てこれ」

『ガレキに埋まって出られなくなつたんだ』

『それをボーダーが助けてくれて……………』

『そうそう、あのメガネの子』

『メガネをかけた男の子が助けてくれたんです。ボーダーの』

『かつこよかつた』

『避難所ではメガネのボーダー隊員に助けられたと言う人が多く……………』

迅「これ三雲くんのごとでしょ、根付さんの味付けで上手いことすれば……………」

根付「ふーむ……！ボーダーの株を回復させられるかもしれないねえ……！」

迅「唐沢さん……は、何も言わなくても大丈夫か」

唐沢「ハッ」

鬼怒田「おいコラ、そりやど言う意味だ迅！」

迅「H A H A H A H A H A」

達也「すごいだろ？迅は」

修「最上さん」

達也「うん。さっきぶりだね」

修「はい！」

達也「多分もうそろそろ原因わかると思うから早く迅を追うといい」

修「はい！ありがとうございます！」

三輪「城戸司令、うちの隊で例の近界民と交戦する許可をください。大規模侵攻の被

害があそこまで変わるとなれば恐らく黒トリガーです」

城戸「なるほど、玉狛に置けばパワーバランスが一転する………か」

城戸「よかろう、好きにしたまえ。私は『近界民』の扱いは玉狛に一任したが『黒トリガー』の扱いについては一任していない」

三輪「ありがとうございます」

アレだけ忠告したにもかかわらず達也がいない所で遊真襲撃が行われようとしていた

原因説明

修「迅さんはもう目星が付いてるんですか？その……イレギュラー門の原因」

迅「いや、全然」

修「え!？」

迅「でも大丈夫。おれのサイドエフェクトがそう言ってるから」

修（サイドエフェクト……!）

サイドエフェクトという言葉に聞き覚えのない修は自宅で深夜に遊真から渡された
ちびレプリカを通してサイドエフェクトの事を聞いていた

レプリカ『高いトリオン能力を持つ人間はトリオンが脳や感覚器官に影響を及ぼして
稀に超感覚を発現する場合がある。それらの超感覚を総称してサイドエフェクトと言
う。意味は「副作用」』

修『『副作用』……超能力みたいなものなのか？』

レプリカ『炎を出したり空を飛んだりといった超常的なものではない。あくまで人間の能力の延長線上のものだ』

遊真『目閉じてる間だけめちやくちや耳が良くなるやつとかいたな。何百メートル先の会話とかも聞こえるんだと』

修「なるほど……迅さんがやたら余裕な感じなのはよっぽどすごいサイドエフェクトを持つてるってことなのか……?」

遊真『そんな凄いサイドエフェクトあるかなあ? まあ明日も会えるんだろ? そんなとき聞いてみればいいじゃん』ゴトゴト

修「(……? 何の音だ?) 空閑、お前今どこにいる?」

遊真『え? 今? 学校』

修「学校!? こんな時間に!」

遊真『レプリカがイレギュラー門の原因に心当たりあるって言うからちよつと調べてまわってる』

修「お前『ボーダーに任せる』とか言ってたか?」

遊真『なんか見つかつたらオサムにも教えてやるよ。じゃ、また明日』

修「こいついつ寝てるんだ……? でも、強制封鎖が解けるまであと42時間……」

ぼくはのんきに寝てていいのか……?

翌日の朝、修が家を三輪隊の三輪と米屋が監視していた

??? 「あのメガネボーイが近界民と繋がってんの？マジで？」

三輪 「ああ、最上さんからそう聞いている」

??? 「うへえく見かけによらねえ。って事はその近界民人型？おれ人型近界民初めてなんだよな。やベーテンション上がってきた！」

三輪 「だが、話を聞いた限りかなり厄介な相手だぞ。気を抜くなよ陽介」

迅 「ぼんち揚げ食う？」

三輪 「……………!?!」

陽介 「うおっ迅さん!?!」

迅 「うはははは、びつくりした？おまえらさ今日の午後から大仕事あるから基地戻つとけよ。ほいこれ命令書ね。じゃあなよろしく」

陽介「このタイミング……………なんか『読まれてる』っぽいなー」
三輪「迅……………!」

一方で監視されていると気が付いていない修は迅と待ち合わせをしていた

迅「ようメガネくんおまたせ」

修「あ、おはようございます」

迅「さあこの先にイレギュラー門の原因を知る人間がいる」

修「!迅さんの知ってる人ですか!」

迅「いや、全然」

修「……………え!」

迅「でも多分メガネくんの知り合いだと思うよ」

修「ぼくの……………!?どういう意味ですか!……………! (ここは……………)」

その場所は以前遊真に助けて貰い遊真が近界民であると告げた場所

遊真「ん？」

修「空閑……!!？」

迅「おっやっぱり知り合い？」

遊真「おうオサム……と、どちらさま？」

迅「おれは迅悠一！よろしく！」

遊真「ふむ？そうかあんたがウワサの迅さんか」

迅「おまえチビっこいな！何歳だ？」

遊真「おれは空閑遊真。背は低いけど15歳だよ」

迅「空閑遊真……遊真ね」

遊真と目を合わせた瞬間迅のサイドエフェクトが発動する

迅「ほう。おまえが達也さんの言っていた近界民か」

遊真「……なんでわかんのか？」

迅「それはおれのサイドエフェクトがそう言ったからだな」

遊真「ほう……？」

修「迅さんのサイドエフェクトって……!!？」

迅「おれには未来が見えるんだ。目の前の人間の少し先の未来が」

修「未来……!!？」

迅「昨日基地でメガネくんを見たとき今日この場所で誰かと会ってる映像が見えたんだ。その『誰か』がイレギュラー門の原因を教えてくれるって未来のイメージだな。それが多分こいつの事だ」わしやわしや

修「!じゃあ空閑おまえ……突き止めたのか!原因を!」

遊真「うん。ついさつき」

そう言つて遊真は1体のトリオン兵の死骸を持ち上げる

遊真「犯人はこいつだった」

修「……!?!なんだこいつは……!?!トリオン兵……!?!」

レプリカ『詳しくは私が説明しよう。はじめましてジン、私はレプリカ。ユーマのお目付け役だ』

迅「おお、これはどうもはじめまして」

レプリカ『これは隠密偵察用の小型トリオン兵「ラッド」。ただし門発生装置を備えた改造型のような。昨日と一昨日の現場を調べたところバムスターの腹部に格納されていたらしい。1体掘り出して行動プログラムを解析してみた。ラッドはバムスターから分離したあと地中に隠れ、周囲に人がいなくなつてから移動を始め散らばっていく。人間の多い場所付近で門の起動準備に入り、近くを通る人間から少しずつトリオンを集めて門を開く。木虎の言っていたボーダー隊員の近くで門が開くのが多いのは高いト

リオン能力を持つものからは大量のトリオンを得られるからだろう』

修「じゃあつまりそのラッドを全部倒せば……………」

遊真「いや〜きついと思うぞ」

レプリカ『ラッドは攻撃力を持たないいわゆる雑魚だがその数は膨大だ。今探知できるだけでも数千体が街に潜伏している』

修「数千……………！」

遊真「全部殺そうと思つたら何十日もかかりそうだな」

迅「いや、めちやくちや助かった。こつからはボーダーの仕事だな」？

迅「実力派エリートただいま戻りました！」

ボーダー本部に帰還した迅は真つ先に遊真から受けとつたラッドを鬼怒田開発室長の元へ持つていく

迅「鬼怒田さん、はいこれ。2時間以内に解析してレーダーに映るようにして」
次は広報部等のメディア対策を総括する根付メディア対策室長の元へ記者会見の要請

迅「根付さん緊急放送の準備。ドイツの写真もってつてよろしく」
全ての根回しが終了した迅はボーダー全隊員の出勤を要請する

迅「忍田さん全部隊に出勤かけてください。害虫駆除します」

忍田「わかった」

その頃根付はメディアを通してイレギュラー門の原因の説明と市民への協力要請を行った

根付『市街地に開く門の原因が判明致しました。この小型近界民がそうです。ただいまよりボーダーによる一斉駆除を行います。発見された方はボーダーまでご一報を！』

迅「さーて、いくぞみんな」

迅の指揮のもとC級隊員まで動員した小型トリオン兵の一斉駆除作戦が昼夜を徹して行われた

レプリカ『反応は全て消えた。ラッドはこれで最後のハズだ』

迅「よし作戦完了だ。みんなよくやってくれた、おつかれさん！」

修「これでもうイレギュラー門は開かないんですよね？」

迅「うん。今日からまた平常運転だ」

修「よかった……………」

遊真「しかし本当にまにあうとは。やっぱ数の力は偉大だな」

迅「何言ってるんだ、まにあったのはおまえとレプリカ先生のおかげだよ。おまえがボーダー隊員じゃないのが残念だ。表彰もののお手柄だぞ」

遊真「ほう、じゃあその手柄はオサムにツケといてよ。そのうち返してもらおうから」

修「……………え？」

迅「あーそれいいかもな。メガネくんの手柄にすればクビ取り消しとB級昇進は間違いない」

修「ま、待ってください。ぼくほとんど何もしてないですよ!」

迅「メガネくんがいなかったら遊真たちに会えてないし地味に重要人物なんじゃない?」

修「そんな無理やりな……………」

遊真「いいじゃんもらつとけよ。おれの手柄がナシになっちゃうじゃん」

修「……………」

迅「B級に上がれば正隊員だ。基地の外で戦っても怒られないし、トリガーも戦闘用のが使える。おれの経験から言って……………パワーアップはできる時にしとかないと、い

ざって時に後悔するぞ。それにたしかメガネくんは……………助けたい子がいるからボーダーに入ったんじゃないかなかったつけ？」

修「……………!」

遊真「……………ふむ？」

◆WORLD TRIGGER◆

少女（ちよつと早く着きすぎたかな……………）

ガシヤン

少女「!」ビクッ

待ち合わせ場所に来ていた少女は自身の後ろから聞こえた大きな音に驚いて振り返ると頭が真つ白な少年が自転車でコケていた

遊真「うーむ……………手強い」

少女「だ、大丈夫!？」

遊真「ふむ？平気平気ぜんぜん平気。ケガなんかしてないよ」

少女「（私と同じくらいの背……………小学生かな……………）自転車の練習してるの？」

遊真「友達を待つてんだ。その間ヒマだから練習してるだけ」

少女「そうなんだ。わたしもここで待ち合わせしてるの」

遊真「ほう、奇遇ですな……………おまえ自転車乗れる？」

少女「え？うん一応……………」

遊真「……………やるね」？

少女「そ、そうかな」

遊真「こんな絶対転びそうな乗り物がどんなしかけでまっすぐ走ってるのかと思つたら別になんのかしかけもなかった！驚愕の事実……………！これで倒れずに走れるのがふしぎだ……………日本人が特別に訓練されているのか？」

少女（外国の子なのかな……………？）

ピロリロロ

少女「あ、もしもし……………うん、うん、わかった、待つてる、じゃあね」

少女が待ち合わせ相手と思われる人物と電話をしている間に遊真が再び自転車に乗ろうとチャレンジするが

ガシャン

また失敗してしまう

少女「わっ！大丈夫!？」

遊真「大丈夫大丈夫」

それから遊真は少女に自転車を押してもらいながら練習する

遊真「おっ？おおっ!?!これは!?!走ってる！ちゃんと走ってる！これはつかんできた！

だんだんコツつかんできたぞ!!」

遊真が調子に乗ってスピードをあげてしまったため少女は着いて行けずつい手を離してしまう

遊真「つかん……………どうわー」

ドボン

少女「わあ!？」

調子に乗った遊真はそのまま自転車と共に川へ落ちてしまう

遊真「いやー危なかった。せっかく買った自転車が川の藻屑になるとこだった。でも
確実になにかつかめたな。おまえのおかげで。えーと……………名前まだ聞いてないか」

千佳「わたしは……………千佳。雨取千佳」

遊真「そうか、チカか。おれは遊真。空閑遊真……………チカの服ずぶ濡れじゃん。カ
ゼひくぞ」

千佳「遊真くんの方がずぶ濡れだよ」

遊真「そうか？」

千佳「そうだよ」

ピクッ

千佳「……………!」

ウ……………

遊真「お、警報。けっこう近いな。でも警戒区域の中か……………」

サイレンを聞いた千佳が急に走り出す

遊真「ん？」

千佳「ごめん!わたし行くね!」

千佳はそう告げると走り去ってしまった

遊真「おいおいそっちは警戒区域……………近界民がいる方だぞ？」

レプリカ『彼女……………警報が鳴る前に襲撃に気づいていたように見えたが……………』

遊真「……………!?!」

千佳（ここまで来れば街の方には行かないよね……………）

ズシン、ズシン

千佳「……………！」

ズシン、ズシン、ズシン

その頃修が待ち合わせ場所に行くと1台の自転車だけがポツンと取り残されていた

修「あいつ……………なんでいないんだ……………！」

そうやって修は待ち合わせ相手に電話をかけた

千佳（大丈夫わたしは見つからない。落ちついて……………自分を空っぽにするの……………自分を空っぽに……………）

ピロリロリロリロリロ

千佳の携帯が突然鳴り響きその音にトリオン兵が機敏に反応し千佳を捕獲しようとする。突進してくる

が、その瞬間に遊真が千佳をお姫様抱っこで救いだす

千佳「……………!!……………遊真くん!?!」

遊真「レプリカ、トリガー使って大丈夫か?」

レプリカ『……………待て、付近でバンダーが戦闘を開始している。トリガーを使うのはまずい。今、オサムがこちらに向かっている』

遊真「おつ、じゃあオサムに任せるか」

千佳「『オサム』……………?」

修「トリオン兵……………!」

レプリカ『中型トリオン兵バンダーだ。ユーマはあの付近にいる。バンダーは捕獲用兼砲撃用のトリオン兵だ。砲撃直後の眼を狙え』

修「わかった！トリガー起動!!」

修の言葉に反応してトリガーが起動しトリオン体に換装される

修「こつちだ近界民!!」

バンダーは修に気が付くといきなり砲撃を放つが修には当たらない

修「アステロイド」

修はその隙を逃さず射手・銃手用トリガーの『アステロイド』を8つに分割しトリオン兵の弱点である『眼』に向けて放つ

修の放った『アステロイド』のうちの1発がバンダーの『眼』にあたりバンダーは沈黙するとすかさず修は追撃に出る

修「スラストーON」

修の持つ攻撃手用トリガー『レイガスト』の専用オプショントリガーである『スラストー』を使い修は一気に距離を詰め、その勢いのままバンダーの『眼』を切り裂く

ドンッ

弱点である『眼』が破壊された事で残っていたトリオンの漏出を防げず溢れ出すトリオンでバンダーは破裂した

修「うー……」

遊真「おーやるじゃん。さすがB級隊員」

千佳「あ……………」

修「千佳!!」

遊真「……………へ？」

修「なんでもおまえが警戒区域に入ってるんだ! バカな事はやめろ!」

千佳「ごめん。街のほうにいたらあぶないと思って……………」

遊真「なんだおまえら知り合いか？」

修「……………ああ、今日は千佳と会わせたくておまえたちを呼んだんだ。……………空閑、

レプリカ、2人の知恵を貸してくれ。こいつは近界民を引き寄せる人間なんだ」

遊真「ふむ……………?」

◆ WORLD TRIGGER ◆

遊真「近界民を引き寄せる……………?」

レプリカ『話をするから場所を変えようオサム。付近に他のボーダーがいる』

修「……………そうだな、移動しよう」

遊真「こいつはラッド出てないか？見逃すとまたイレギュラー門が出るぞ」
レプリカ『大丈夫だ。ラッドの反応はない』

◇旧弓手町駅◇

修「……………とゆうかそもそもなんでおまえたちが一緒にいたんだ？」

千佳「えつと……………待ち合わせの橋の下で知り合つて…………」

遊真「自転車を押ししてもらつて川に落ちた」

修「さっぱりわからん。まあいいひとまずお互いを紹介しておこうこっちは雨取千佳。うちの学校の二年生。ぼくが世話になつた先輩の妹だ」

千佳「……………よろしく」

修「こいつは空閑遊真。最近うちのクラスに転校してきた。外国育ちで日本についてはまだよく知らない」

遊真「どもども」

千佳「えっ修くんと同級生!?じゃあ年上!?ごめんなさいわたししてつきり年下だと

……」

遊真「いいよ別に年の差なんて」

修「空閑は近界民で……じゃない、近界民について詳しいんだ。千佳が近界民に狙われる理由も知ってるかもしれない」

千佳「そつか遊真くんもボーダーの人なんだ」

遊真「う……まあ大体そんなもんだ」

遊真「そんなものようです……しかし近界民に狙われる理由なんて「十中八九トリオンだろうな」……!?!」

修「も……最上さん!?!」

達也「達也でいいよ。そっちの子は初めまして、ボーダー隊員の最上達也です」

千佳「は、はいどうも初めまして雨取千佳です」

達也「うん。で、雨取ちゃんが狙われる理由だけど、トリオン能力が高いからなんだよネ」

修「トリオン……?!?トリオンがなにか関係あるんですか?」

達也「まあそれは遊真くんに説明してもらおうか」

遊真「ええ、人のセリフ取つといて丸投げすんの?」

達也「H A H A H A、いやごめんネ。出ていくタイミング失いかけてたから」

遊真「まあいいや。とにかく関係あるも何もこつちの世界に来る近界民は大体トリオンが目的だよ。トリオン能力が高いやつは生け捕りに、トリオン能力が低いやつはトリオン機関だけとっていく。そうやって集めた兵隊とトリオンを『むこう』の戦争で使うわけだ」

修「な………なんでわざわざこつちの人間を……!？」

達也『『むこう』の世界はこちらよりもはるかにトリガー技術が高いし自分たちもトリオン兵使うからトリオン兵に関する知識も誰もが知ってるから捉えにくい。だからトリガー技術が低レベルで第一次侵攻まではトリオン兵の存在すら認知されていなかった』『こちら』の世界を狙ってたんだ。捕まえやすいから」

遊真「確かにそれもあるし、チカがしつこく狙われてるならそれだけトリオン能力が高いつてことかもな」

千佳「トリオン能力?………って?」

修「近界民の武器を使うための特殊な力のことだ」

遊真「なんなら試しに測ってみるか?なあレプリカ」

レプリカ『『そうだな、そうすればはつきりする』』

千佳「わっ」

レプリカ『初めましてチカ、私はレプリカ。ユーマのお目付け役だ』

千佳「は、はじめまして」

挨拶を済ませたレプリカは人間で言う舌の様なものを出した
レプリカ『この測定策でトリオン能力が測れる』

遊真「どうぞご利用ください」

千佳「う、うん……でもちよつとこわいな……」

千佳が怖がっているのを見た修は自分が先に試すことにした
修「レプリカ、ぼくが先に測っていいか？」

千佳「……………！」

レプリカ『了解だ』

レプリカはそういうとスグに計測を始めた

レプリカ『計測完了』

計測を終えるとレプリカの頭上に立方体が表示される

修「……………！」

レプリカ『この立方体はオサムのトリオン能力を視覚化したものだ。立方体の大小が
トリオン能力のレベルを表している』

修「このサイズはどのくらいのレベルなんだ？」

達也「三雲くんのトリオン能力はボーダーの基準で数値にすれば2だ。ボーダーの平

均が約6〜7くらいだからまあ低いネ」

遊真「近界民に狙われるにはその平均位はほしいな」

修「……別に狙われたいわけじゃない。千佳、おまえも測ってもらえ。大丈夫だ」

千佳「……うん。修くんがそういうなら……」

レプリカ『少々時間がかかりそうだ。楽にしてくれ』

千佳「うん」

遊真「オサムとチカって付き合ってるの？」ボソツ

修「!?ばっ……ち、ちがう!全然そんなじゃない!!」

遊真「なんだそうなのか」

達也「遊真くんのサイドエフェクトは恋バナにはもってこいだな」

修「さ、サイドエフェクト!」

遊真「!?なんでわかんの?おれ言ったっけ?」

達也「ボクも迅と似たようなサイドエフェクト持つてるからね。戦闘中はあまり活か

せないけど事前の対策とかは迅のサイドエフェクトよりも有能だよ」

遊真「なるほど、だから学校であんなこと言ったんだな。それにしても、そんなはっ

きり近界民に狙われてるならボーダーに言って助けてもらえばいいじゃん」

修「……それは………千佳は他の人間を巻き込みたくないらしい。昔それで

友達を近界民に攫われてるらしいから、たぶんそれで」

遊真「ふーむ？………それなら俺は巻き込まれていいの？」

修「おまえは近界民だし巻き込んだのはぼくだからいいんだ」

遊真「ほう、ならいいな。しかしチカはよく一人で逃げられるな。トリガーも無いのに」

修「あいつは自分を狙う近界民の居場所がわかるらしいんだ。今まで半信半疑だったけど………」

遊真「あ、サイドエフェクトか」

修「………たぶん」

遊真「なるほどね、それでオサムは千佳を助けたくてボーダーに入ったわけか」

修「別にあいつを助けたいわけじゃ………ぼくは街を守るために………」

遊真「おまえつまんないウソつくねー。ごまかす必要ないだろ、誰かを助けたいってのは立派な理由じゃん」

修「………そんな立派な理由じゃない。ぼくがボーダーに入ろうと思ったのは………何も出来ない自分に腹が立ったからだ」

と、そこで解析が終了し話が止まる

レプリカ『計測、完了だ』

そこには千佳の体よりも大きな立方体があった

修「……………!?!」

遊真「うおお……………!でっけー!オサムの何倍だ?これ!」

修「……………!」

レプリカ『尋常ではないな。これ程のトリオン器官はあまり記憶にない。素晴らしい素質だ』

遊真「すげーな、近界民に狙われるわけだ」

修「感心してる場合じゃない!千佳が狙われる理由はわかった。問題はそれをどう解決するかだ!」

レプリカ『最も現実的なのはボーダーに保護を求めることだと思うが』

遊真「でもチカはそれ嫌なんだろ?」

千佳「……………うん。あんまり他の人に面倒かけたくない……………」

達也「面倒かけたくないなら尚のことボーダーを頼れ」

千佳「……………!?!」

達也がさらに口を挟もうとするがそれはさらなる介入者の到来で出来なかった

三輪「動くな。ボーダーだ」

学ランを着た2人組がボーダーと名乗り現場を抑えようとする

三輪「間違いない現場を押さえた。ボーダーの管理下でないトリガーだ」
レプリカ『……………!』

三輪「近界民との接触を確認。処理を開始する。トリガー起動」

黒トリガー

三輪「近界民との接触を確認。処理を開始する。トリガー起動」

修（この人は……城戸司令の横にいたA級隊員の……!!）

2人の学ランを着たボーダー隊員がトリオン体への換装を終える

陽介「さて、近界民はどいつだ？」

達也「待ってもらおうか、三輪隊」

三輪「!?」

陽介「あれ!?最上さんじゃん!なんで居んの？」

達也「近界民はこいつだ。が、殺らせるわけには行かないんだなあ」

三輪「何故だ!なぜ貴方が近界民をかばう!」

達也「違うな、庇ってるのはおまえをだよ。三輪」

三輪「なに!?!」

達也「こいつ自身は近界生まれだがこいつの父親は旧ボーダーとランク戦の仕組みそのものを作った人だ。そしてその実力は忍田さんすらも凌駕していた。その人に6年間鍛えられ、さらに戦場での戦闘経験なども合わせてこいつの実戦経験は9年にもな

る。そんな相手だ、おまえたちでは勝てないよ。手を抜かれたとしてもな」

陽介「え!?マジで!?でもオレは余計やりたくなつた!」

達也「まあ今のは忠告だやりたきややれ結果は見えてる。遊真くん、穩便に済ませる必要は無い。全力でやるんだ」

遊真「OKOK、トリガー起動」

遊真は自身のトリガーを起動し戦闘体に換装する

遊真「わるいな千佳、巻き込んで」

千佳「……………!」

陽介「うひょー強そうじゃん!なあ秀次こいつオレに一对一でやらせてくれよ!」

三輪「ふざけるな遊びじゃない。こいつは2人掛りで確実に始末する」

遊真『2人掛り』……………?おまえおもしろいウソつくね」

三輪「……………!!」

◇◇旧弓手町駅周辺のビル◇◇

古寺「勘づかれた……………!?ウソだ、この距離で……………!」

奈良坂『落ちて着け章平。やつは1度もこちらを見ていない。探知を受けた反応もない。ハツタリで「かま」をかけてるだけだ』

◇ 旧弓手町駅 ◇

陽介「へえー……やつぱただもんじやないな。ここはひとつ『全員』でじつくりかかるか」

三輪隊のカチューシャを付けた槍使いが遊真に向けてノールックで突きを繰り出す
が、もちろん遊真は余裕を持ってかわす

遊真「不意打ちがミエミエだよ」

陽介「……………と、思うじゃん？」

遊真「……………？」

遊真の戦闘体の首にいきなり切れ目が入りそこからトリオンが漏れ出す

遊真「！（なんだ……………？今のは絶対かわしたはず）」

陽介「浅いなくいきなり首は欲張りすぎたかくやつぱ狙うなら足からかな？」

遊真「どういう仕掛けだ？」

修「空閑が手傷を負った……………!?こんなの初めて見たぞ……………！）達也さん！いくら空閑

でもやつぱりA級が相手じゃ……」

達也「大丈夫だ。なんなら賭けてもいい。あいつらじゃ遊真くんには勝てない」
修が遊真を心配する間も戦闘は続く

三輪「1発を警戒しろ大型近界民をバラバラにした相手だ」

陽介「そんなでかいのくらわないって」

遊真『『鎖』印!!』

遊真は槍使いの突きに対してカウンターで鎖を付ける

陽介「なんだこれ！」

遊真『『強』印!・四重!・せーの!!』

遊真は付けた鎖を振り回して強化した筋力で槍使いを遠くへ飛ばし戦線を離脱させる

三輪「陽介！」

陽介『飛ばされただけだ!大丈夫』

三輪「チツ」

遊真「これで形成逆転だな」

三輪「黙れ近界民！」

三輪は持っているハンドガンのマガジンを入れ替え、入れ替えた弾を遊真に向けて放

つ

遊真「『盾』印！」

三輪が放った弾丸は遊真のシールドをすり抜けて戦闘体に当たり重石に変わる

遊真「重つ……なんだこりゃ」

レプリカ『トリオンを重石に変えて相手を拘束するトリガーだ。直接的な破壊力がない代わりにシールドと干渉しない仕組みのようだ』

遊真「ふむ」

三輪「終わりだ近界民!!」

修「空閑!!!」

遊真「『弾』印！」

遊真はこちらを動けないとみて距離を詰めてくる三輪に対して『弾』印を使い距離を詰める

遊真「『強』印！二重！」

動けないと思いつ込んだ三輪の不意を突いて強化した戦闘体で三輪を殴り三輪の戦闘体を破壊する

『戦闘体活動限界ベイルアウト』

三輪の戦闘体が破壊され緊急脱出が発動する

陽介「まだ終わってねえぞっと」

先程投げ飛ばした槍使いが後ろから突きで右腕を切り落とされる

そしてさらに追撃をしてくる

レプリカ『解析は完了している。印は「錨」と「射」にした』

遊真「OK。『錨』印+『射』印。四重」

陽介「!?」

レプリカが重石を解析し新たな印として遊真が槍使いに対して四重にして放つ

槍使いが攻撃中の為躲すことができずにくらい、動けなくなる

陽介「これは……！秀次の！」

遊真「いいなこれ、かなり便利だ」

陽介「………やっべー」

遊真は立ち上がって槍使いが使っていた槍を調べる

遊真「おおー、穂先が自由に変形できるのか。だからギリギリで避けてもくらったん

だな。なるほどなるほど」

奈良坂（三輪と陽介がやられた。奴は危険だ。ここで始末する……!!）

迅「よう奈良坂。ぼんち揚げ食う？」

奈良坂「……………！迅さん!？」

迅「もうやめとけ。あいつを敵に回すと達也さんまで敵に回すぞ」

◇旧弓手町駅◇

迅「おー派手にやってんなー」

修「!?迅さん!」

迅「どもども。ビルの屋上でレプリカ先生とばったり会っちゃってさ、せつかくだから来てみた」

迅はそう言うのと周りを見渡す

迅「おっなんかかわい子がいるな。はじめまして」

千佳「えっ、は、はじめまして」

達也「通報されるぞセクハラエリート」

迅「これはこれは達也さん。いつも通り手厳しい」

達也「沢村さんから愚痴を聞かされれば手厳しくもなる」

迅「あははは……と、遊真たちはあつちか？」

達也「話逸らしやがって……」

修「あの後ろの2人は？」

レプリカ『三輪隊の狙撃手だ。私が対処するつもりだったがジンのおかげで戦わずに済んだ』

迅「おーなんだ遊真けっこうやられてるじゃんか」

遊真「おつ迅さん」

迅「油断したのか？」

遊真「いや、普通に手強かったよ」

古寺「派手にやられましたね。先輩……」

陽介「やーばいこれ超はずかしい」

迅「まあおまえたちがやられるのも無理ないよ。なんせこいつのトリガーは『黒トリガー』だからな」

陽介「マジで!？」

修（『黒トリガー』……?）

迅「むしろおまえらは善戦した方だな。こいつにそこまで殺す気が無かったとはいえ……さすがA級三輪隊だ」

修「……………レプリカ。『黒トリガー』ってなんだ?」

レプリカ『ふむ、「黒トリガー」とは優れたトリオン能力を持った使い手が死後も己の力を世に残すため「自分の命と全トリオンを注ぎ込んで作った」特別なトリガーだ。「黒トリガー」には作った人間の人格や感性が強く反映されるため使用者と相性が合わなければ起動できないという難点があるがその性能は通常のトリガーとは桁違いだ』

修「自分の命と全トリオンを……（形見と言うのはそういう事か）」

達也「まあとりあえずボクが遊真くんが今襲ってきてる奴らの仲間じゃないってのは保証するから奈良坂くんたちはボーダー本部に帰って『こいつを追い回しても何の得もない』って城戸さんに言っというて」

迅「さてと、多分三輪もこの会話通信で聞いてたから報告が偏るだろうしおれも本部に行かなきゃな。メガネくんはどうする?どっちにしろ呼び出しはかかると思うけど……………」

修「……………じゃあぼくも行きます。空閑と千佳はどこかで待っていてくれ」

千佳「うん」

遊真「OK」

達也「ボクも本部に行くよ。色々言うことあるし」

修「はい……………千佳、空閑はまだ日本のことよく知らないから面倒見てやってくれ」

千佳「うん、わかった」

修「じゃあ2人ともまた後で」

◇◇ ボーダー本部会議室 ◇◇

城戸「……………なるほど、報告御苦労」

鬼怒田「まったく……………前回に続いてまたおまえか、いちいち面倒を持つてくるヤツだ」

根付「しかし『黒トリガー』とは……………そんな重要なことをなぜ今まで隠していたのかね。ボーダーの信用にも関わることだよ」

達也「お言葉ですけど、そもそも三雲くんは『黒トリガー』の存在すら知らなかったのにどうして隠せるんです？あなたの方が教えていないことを隠していたと言われてもそれは理不尽でしょう」

忍田「確かにそうだ。それに迅の話によれば結果的に三雲くんは今まで『黒トリガー』

を抑えている」

達也「それと、さつきから報告中に近界民、近界民とおっしゃってましたけどあなたが言う近界民は正確には近界民では無いと言う考え方ができる人物だ」

城戸「……………なに？」

達也「彼の名前『空閑遊真』」

林藤「……………『空閑』……………!?!」

忍田「『空閑』……………!?!」

城戸「『空閑』……………だと……………!?!……………『空閑』……………『空閑有吾』か……………!?!」

達也「その通り、あなた方が言う近界民は有吾さんの息子です。そして彼の持つ『黒トリガー』は有吾さんが作った物だ」

鬼怒田「クガ……………?何者ですかそのクガとやらは?」

根付「我々にもご説明願いたいですねえ」

忍田「空閑有吾…有吾さんは……………4年半前にボーダーの存在が公なる以前から活動していた言わば『旧』ボーダーの創設に関わった人間。ボーダー初期のメンバーの1人だ。私と林道にとつては先輩にあたり、城戸さんにとつては同輩にあたる」

達也「さらにいうならランク戦のシステムを構築したのは鬼怒田さんと忍田さんだけ

ど、仕組みそのものを考案したのは有吾さんだ。だから今ボーダーが戦えているのは有吾さんのおかげでもある。親がこちらの世界の人間なのだから彼はこちらの人間でもあると言えるでしょう」

忍田「そうか、そういうことならこれ以上有吾さんの子と争う理由などない。迅、三雲くん、『つなぎ』をよろしく頼むぞ」

修「……………はい！」

迅「そのつもりです忍田さん」

城戸「……………では解散とする進展があれば報告するように」

城戸司令のこの一言をきっかけに達也、修、迅、忍田本部長、林道玉狛支部支部長が退室する

鬼怒田「……………このままでよいのですかな？城戸司令。クガとやらのことはようわからんが……………」

根付「そうですねこのまま玉狛が『黒トリガー』と手を結べばボーダー内のバランスが……………」

城戸「わかっている、空閑の息子かどうかは別問題として……………『黒トリガー』は必ず我々が手に入れる」

◇◇ボーダー本部通路◇◇

修「空閑の親父さんが上層部の人たちと知り合いなら空閑ももう大丈夫ですよね？」

迅「うーんどうかな」

修「えっ……………いや、だってさつき忍田本部長が……………」

迅「うんまあそうなんだけど。メガネくんも何となく気づいてると思うけど今ボーダーは大きくわけて3つの派閥に割れてんだよね」

修「『派閥』……………?」

迅「そう、近界民に恨みのある人間が多く集まった『近界民は絶対に許さないぞ主義』の城戸さん派、近界民に恨みはないけど街を守るため戦う『街の平和が第一だよね主義』の忍田さん派、そして…………『近界民にもいいヤツいるから仲良くしようぜ主義』の我が玉狛支部」

修「……………!!」

迅「で……………まあ玉狛と城戸さんとは考え方が正反対だからあんまり仲が宜しくな
いわけ」

修「……………なるほど」

迅「まあ城戸さん派は1番でかい派閥だからウチが何かやっても王者の余裕で見逃して貰えてたけど、もし遊真が玉狛と手を組んだら多分そのパワーバランスがひっくり返る」

修「……………!?空閑1人にそこまで……………!?!」

迅『黒トリガー』つてのはそういうもんなの。城戸さん派的にはそれは避けたいだろうからどうにかして『黒トリガー』を横取りしようとするだろうな」

◇ボーダー本部会議室◇

迅の予想通り遊真の『黒トリガー』を奪取するべく城戸派上層部による会議が行われていた

鬼怒田「問題はどうかやって捕らえるかだ!先の会議で最上のやつとした約束があるせいで大きく動く訳にはいかん!」

城戸「唐沢くん。君の意見を聞かせてくれ」

唐沢「私は兵隊の運用は専門外なので……………」

城戸「かまわん」

唐沢「そうですね……今は特に何もしなくていいのでは？」

鬼怒田「なにイ!？」

唐沢『黒トリガー』は玉狛支部に任せておいて問題無いでしょう。むしろ居場所がわかって好都合だ。この件に大規模侵攻や最上くんが絡んでくる以上私ならまず玉狛との交渉を考えますが……『奪い取る』という方向で考えた場合、今はただ条件が整うのを待つべきでしょう。勝算が低い時は衝突を避けるのがセオリーです」

鬼怒田『条件が整うの』……手をつまねいて何が整うと言うのかね」

城戸「……なるほど、あと数日待てば遠征中のトップ部隊が帰還する」

鬼怒田「!!」

根付「おおー!」

城戸「……いいだろう、遠征組の帰還を待ち三輪隊と合流させて……4部隊合同で『黒トリガー』を確保する」

遊真「おつ来た来た。オサムと迅さん」

会議が終わって本部を後にした達也、修、迅と近くの神社で待っていた遊真、千佳が合流する

遊真「オサムえらい人に叱られた？」

修「達也さんが庇ってくれたから全然だった」

遊真「おーそりやよかったー安心だな」

修「まだ安心じゃない。ボーダーがおまえのトリガーを狙って来る可能性があるんだ」

遊真「ほう」

修「……………これからどうすればいいですか？迅さん」

迅「うーんそうだな。色々考えたけどこういう場合はやっぱシンプルなやり方が一番だな」

遊真「シンプルな……………」

修「やり方……………」

迅「うん遊真おまえ……………ボーダーに入んない？」

修「……………!？」

遊真「おれが……………!？」

◆ WORLD TRIGGER ◆

修「空閑をボーダーに入れる……!?!」

迅「おつと別に本部に連れていく訳じゃないぞ。ウチの支部に来ないかって話だよ。ウチの隊員は近界民の世界に行ったことあるやつが多いからおまえが『むこう』出身でも騒いだりはしないぞ。とりあえずお試しで来てみたらどうだ?」

遊真「ふむ……オサムとチカも一緒ならいいよ」

修・千佳「ー」

迅「よし決まりだな」

◇ 玉狛支部 ◇

迅「さあ着いたここが我らがボーダー玉狛支部だ」

修「川の真ん中に建物が……!」

迅「ここは元々川の何かを調査する施設で使わなくなったのを買い取って基地を建てたらしい。いいだろ。隊員は出払ってるっぽいけど何人かは基地にいるかな？」

修（玉狛支部の隊員……迅さんの同僚……やっぱりみんな腕利きなのか……？）

迅「ただいま」

迅が支部の入口のドアを開けるとそこにはヘルメットを被りカピバラに乗った幼児がいた

修「!？」

迅「おつ陽太郎、今誰かいる？」

陽太郎「………しんいりか………」？

質問に答えない陽太郎に対して迅がチョップを入れる

陽太郎「おぶっ」

迅『『新入りか』じゃなくて』

達也「若、人の質問にはしつかりと答えるようになさってください」

???'「迅さんおかえり〜あれっえ？なに？もしかしてお客さん!?!やばい！お菓子ないかも！まって、まって！ちよつと待って！」

修「………」

メガネをかけた少女が迅を出迎えるが一緒にいた修たちを見て慌ててパタパタと来客用のお菓子を探しに行った

宇佐美「どら焼きしか無かったけど……でもこのどら焼きいいやつだから食べて食べて。アタシ宇佐美栞、よろしくね!」?

遊真「これはこれははりっぱなものを……………」

修「いただきます」

遊真が頭を下げ修が受け取った瞬間、遊真のどら焼きに魔の手が伸びる
宇佐美「あつ陽太郎! あんたはもう自分の食べたじゃん!」

陽太郎「あまいなしおりちゃん。ひとつでまんぞくするおれではない」
が、もちろん遊真から制裁が下る

陽太郎「おぶっ」

遊真「わるいなチビ助。おれはこのどらやきと言うやつに興味がある」

陽太郎「……………ふぐぐ……………おれのどらやき……………」

千佳「よかつたら……………わたしのあげるよ」

陽太郎「……………!……………きみかわいいね。けっこんしてあげてもいいよ」

千佳「えっ!?結婚……………!?!」

陽太郎「おれとけっこんすればらいじん丸のおなかさわりほうだいだよ。けっこうきもちいい。こう、ゴロンってやって……………」

そういつた陽太郎がらいじん丸を何度も転ばそうと押すがらいじん丸は一向に転ばない

陽太郎「……………けっこんしたらさわりほうだいだよ」ぐすり

達也「若、食べ物につられて将来の約束をするものではありません。第一姫様がお許しにならなければ怒られてしまいますよ?」

陽太郎「ふつるかねーちゃんはそのことでおこつたりはしないのだ!」?

達也「いや、じゅーぶん怒ると思いますよ。ボクは」

陽太郎「それよりもあれいすたあはむかしのおれおれいつたときのほうがかつこよかつたとおもうぞ!るかねーちゃんがあればいすたあはかわつたつていつた」

達也「あはは……………そ、それを今言いますか。若」

達也は陽太郎を注意したつもりが逆に弱味を突かれてしまう

修「なんていうかここは本部とは全然雰囲気違いますね……」

宇佐美「そう？まあウチはスタッフ全員で10人しか居ないちっちゃい基地だからねー。でもはつきりいつて強いよ」？

修「！」

宇佐美「ウチの防衛隊員は達也さんが本部に行っちゃったから迅さん以外に3人しかいないけどみんなA級レベルのデキる人だよ。玉狛支部は少数精鋭の実力派集団なのだ！」

達也「まあそのかわり変人数人いるけど」

宇佐美「キミもウチに入る？メガネ人口増やそうぜ」？

千佳「あの……さつき、あの、迅さん………が言ってたんですけど、宇佐美さんも『むこう』の世界に行ったことがあるんですか？」

宇佐美「うん、あるよ。1回だけけど」

千佳「じゃあ……その『むこう』の世界に行く人間ってどういう風に決めてるんですか？」

修「……………!？」

宇佐美「それはねーA級隊員の中から選抜試験で選ぶんだよね。だいたいは部隊単位で選ばれるからアタシもくっついて行ったんだけど」

千佳「A級隊員……………つてやっぱりすごいですよね…………」
宇佐美「400人のC級、100人のB級のさらに上だからね。そりやツワモノ揃いだよ」

修（千佳のやつ……………まさか『むこう』の世界に……………?）

迅「よう3人とも。親御さんに連絡して今日は玉狛に泊まってけ。ここなら本部の人たちも追ってこないし空き部屋も沢山ある。宇佐美面倒見てやって」

宇佐美「了解」

迅「遊真、メガネくん、来てくれ。ウチのボスが会いたいって」

◇◇玉狛支部支部長室◇◇

迅「失礼します。2人を連れてきました」

林藤「おつ来たな。おまえが空閑さんの息子か、はじめまして?」

遊真「どうも?」

林藤「おまえのことは達也たちから聞いてるウチはおまえを捕まえる気は無いよ。ただ1つ教えてくれ、おまえ親父さんの知り合いに会いに来たんだろ?その相手の名前は

わかるか？」

遊真「モガミソウイチ。親父が言ってた知り合いの名前はモガミソウイチだよ」

林藤「そうか……やっぱり最上さんか……最上宗一はボーダー創設メンバーの1人で達也の義理の父親、おまえの親父さんとはライバル関係だった。そして、迅の師匠でもあった」

修（師匠でもあった……？）

林藤「この迅の『黒トリガー』が最上さんだ」

遊真・修「……!?」

修「じゃあその人は……」

林藤「最上さんは5年前に『黒トリガー』を残して死んだ」

遊真「……そうか……このトリガーが……」

修（空閑……）

林藤「最上さんが生きてたらきつと本部からおまえのことを庇っただろう。俺は新人の頃空閑さんに世話になった恩もある。その恩を返したいし達也だって上層部に色々進言して手を回してる。おまえがウチに入れば俺も大つぴらにおまえを庇える本部とも正面切つてやりあえる……どうだ？玉狛支部に入んないか？」

遊真「……それは……」

◇ 玉狛支部空き部屋 ◇

修「空閑にとつてもいい話だと思ったのにな……どうして断ったんだろう……」

レプリカ『……………』

◇ 玉狛支部屋上 ◇

遊真「悪いね迅さん。せっかく誘ってくれたのに」

迅「別にいいさ、決めるのは本人だ。おまえが後悔しないようにやればいい
……………そうだ、それよりもおまえの話聞かせてくれよ。今までのおまえと親父さん
との話」

◇ 玉狛支部空き部屋 ◇

レプリカ『……………オサムには話しておこうと思う』

修「……………」
レプリカ『ユーマが「こちら」の世界に来た理由を』

空閑遊真

修「空閑がこつちの世界に来た理由……!? 親父さんの知り合いと会うためじゃないのか……!?」

レプリカ『……今から四年ほど前、ユーマとその父ユーゴは近界民の戦争に参加していた……この国の防衛団長とユーゴは旧知の仲でありかつて世話になった縁と恩からユーゴたちは防衛に力を貸していた』

◇ 玉狛支部屋上 ◇

遊真「おれは親父にそこそこ鍛えられてたから戦闘でもまあまあ役に立ったし、半人前なりに上手くやってたよ」

達也「だが、最後まで上手いかなかったんだろ？」

遊真「タツヤさん……うん。親父が死んだ日、親父は戦闘には参加せずに砦の中に居るように言った。もちろんそれなりに上手くやってたからおれは不満で親父の

言いつけを破って戦線にこつそりー人で参加した……でもめっちゃ強い『黒トリガー』使いがいておれは何もできずに死ぬハズだった……でも親父はそんなおれを助けるために『黒トリガー』を作った」

◇ 玉狛支部空き部屋 ◇

レプリカ『死にゆくユーマの肉体をトリガーの内部に封印し、それに代わる新たな体をトリオンで作ってユーマの命をつなぎ止めた。そして全ての力を使い切ったユーゴは塵となって崩れて死んだ。ユーマとユーゴが味方した国の上層部はユーマが生き残ったことよりユーゴの死を嘆いたがユーマが「黒トリガー」を持っていると知った途端にユーマを嘘も方便で懐柔しようとした。だが彼らには知る由もなかった。ユーマが「黒トリガー」と共に「嘘を見抜く」というサイドエフェクトを受け継いでいたことを』

修「……………!（『嘘を見抜く』……………）」

レプリカ『幸いその国の防衛団長はユーマを気遣い、戦わなくていいと言ったがユーマは自分と親父で始めたことだから最後まで戦うことに決めた。それからおよそ3

年の間ユーマは父親の代わりに戦い続けた。その3年間でユーマを強くした。粘り強い抵抗により敵国は侵攻を断念し後に講和によって戦争は集結した。味方の勝利だ。しかしユーマに達成感はなかった。そこで私がユーゴが言っていたモガミソウイチに会いに行こうと提案した。そうしてユーマはいくつかの国を渡って「こちら」の世界にやって来た』

修「じゃあ……………あいつが歳の割に小柄なのは……………」

レプリカ『そう、トリオンの肉体に成長する機能はない。ユーマの体は11歳のときから変化していない』

修「成長しない……………ってことは、じゃあつまり不老不死……………!?!」

レプリカ『いや、ユーゴのすべての力を持つてしてもそれは不可能だ。指輪の中に封印されたユーマの本当の体は今もゆっくりと死に向かっている。ユーマの肉体が完全に死を迎えたとき、トリオンの身体も消滅するだろう』

修「……………そうか……………それをどうにかするためボーダーに……………」

レプリカ『私の目的はそうだった。しかしユーマの目的は違う』

修「……………!?!」

レプリカ『ユーマはユーゴがすべてを注ぎ込んだ「黒トリガー」から「父親を甦らせる」ことができないかと考えていた。しかし先程のモガミソウイチの件でボーダーでも

それは不可能だということがわかってしまった。ユーマにはもう生きる上での目的はない。願わくばオサム、ユーマに「目的」を与えてやって欲しい。ユーマにはそれが必要だ』

◆ WORLD TRIGGER ◆

修はレプリカから遊真に生きる目的を与えて欲しいと頼まれた

修が生きる目的を模索する中千佳がボーダーに入り、遠征部隊を屈指したいと宣言

修は説得を試みるも頑なに入隊しようとする千佳を見て自分も手伝うことを決意する

だが、自分たちの実力が低いことを自覚している修は実力のあるリーダーを求めて遊真を部隊に誘った

遊真は修に戦う理由を質問しその答えを聞いた事で誘いに乗ることを決めた

遊真「オサムに誘われたから一緒にやるよ、ヒマだし。チカにはまだ自転車の乗り方教えてもらわなきゃいけないしな」

千佳「ありがとう……………」

遊真「……………ただし、リーダーはオサムだ」

修「……………!?!」

遊真「そうじゃなきゃ部隊は組まん」

修「な……………何言ってるんだ！リーダーはおまえだろ！おまえの方が実力も知識も経験もずつと上だ！ぼくが勝つてるところなんかひとつもない！なんでぼくがリーダーになるんだ!?!」

達也「いや、案外理にかなってると思うよ」

修「!?達也さんまで!」

達也「ボーダーの部隊ってのは基本的に相当実力があるやつでも部隊のリーダーをやるのは少数だ。なぜならリーダーとエースを兼任するのがしんどいから」

修「……………エース…」

達也「そうだ。君たちが部隊を組むってなるとどうしてもエースは遊真くんになると思う。3人の中で一番戦い慣れてるし、だいたいどのチームも攻撃手がエースだ。遊真くんは近接向きだろうし間違いないくエース向きだ。だから戦局を見る余裕が無い時が

多くなる。そうなるとメガネくんが1番リーダーに向いてるって訳だ」

千佳「わたしも、リーダーは修くんがいいと思う」

修「……………」

遊真「決まりだな。じゃあさつそく林藤さんのところ行くか。さつき断つたばつかだからなんか恥ずかしいな」

◇◇玉粕支部支部長室◇◇

林藤「おう、遅かったな。3人分の入隊・転属用の書類だ」

修「……………!?!」

遊真「迅さん……………この未来が見えてたの?」

迅「まあね、これから楽しいことは沢山あるよ」

林藤「……………よし、正式な入隊は保護者の書類が揃ってからだ、支部長としてポーター玉粕支部への参加を歓迎する。たった今からおまえたちはチームだ。このチームでA級昇格そして遠征部隊選抜を目指す!」

◆ WORLD TRIGGER ◆

◇ 次の日 ◇

宇佐美「さて諸君！諸君はこれからA級を目指す！そのためには……遊真さんと千佳ちゃんにB級に上がって貰う必要がある！なぜなら……」

達也「B級に上がらないとA級に上がるためにチームで戦う『ランク戦』に参加出来ないから」

宇佐美「そう！で、B級に上がるためにはC級を蹴散らして行かなきゃいけない。でもまだボーダー本部の正式入隊日じゃないから2人はまだ賛成できない」

遊真「え〜」

迅「慌てんなよ遊真。おまえはウチのトリガーに慣れる時間が必要だろ。ランク戦にはおまえの『黒トリガー』は使えないぞ」

遊真「ふむ……？なんで？本部の人に狙われるから？」

迅「それもあるけど『黒トリガー』は強すぎるから自動的に『S級扱い』になってランク戦から外されるんだ。メガネくんや千佳ちゃんと組めなくて寂しくなるぞ」

遊真 「ふむ……そうなのか、じゃあ使わんどこ」

宇佐美 「千佳ちゃんはどうしよっか。戦闘員かオペレーターか……」

遊真 「そりやもちろん戦闘員でしょ。あんだけトリオンすごいんだから。それにこの先近界民に狙われた時のためにもチ力は戦えるようになっていた方がいいだろ」

千佳 「……………」

宇佐美 「千佳ちゃんってそんなに凄いの？」

遊真 「みたらびびるよ」

千佳 「わたしも……自分で戦えるようになりたいです」

宇佐美 「なら戦闘員で決まりだね！じゃあ次はポジション決めよっか」

千佳 「ポジション……？」

達也 「昨日ボクがちよこっただけ言ったけど、ボーダーのトリガーには大まかに3種類
のトリガーがある。ブレードで近接戦闘する『攻撃手』、弾丸で中距離戦闘がメインの
『銃手』もしくは『射手』、そして遠距離戦闘の『狙撃手』の4つポジションがある」

宇佐美 「……………」で、どれが千佳ちゃんに合ってるかなんだけど」

達也 「雨取さんは『狙撃手』兼『射手』の一択だ」

宇佐美 「根拠は？」

達也「そりやボーダーでぶっちぎりのトリオン量があるから『射手』は確定。でも近界民は雨取さんのトリオン量を狙ってくると予想されるなら普段身を隠す『狙撃手』。これが一番理にかなったポジションだ」

宇佐美「なるほど」

達也が理論攻めで千佳のポジションを半場強引に決めたととき修の後ろのドアが勢いよく開け放たれ一人の少女が入ってくる

???「あたしのどら焼きがない!!!誰が食べたの!!!」

半泣きで入ってきた少女は陽太郎を見つけると足を挿んで逆さ吊りにする

???「さてはまたおまえか!?おまえが食べたのか!？」

陽太郎「むにやむにや………たしかなまんぞく………」

???「おまえだなー!!!」

宇佐美「ごめーんこなみ。昨日お客さん用のお菓子に使っちゃった」

小南「はあ!？」

宇佐美「また今度買ってくるから」

小南「あたしは今食べたいの!!」

達也「おや、久しぶりだね桐絵」

小南「た、たたた、達也さん!?!なんで!?!」

達也「今日はこの子たちの付き添いだよ。それよりレデイがそんなに大声で怒るものじゃないよ」

小南「ち、違うのよ！あ、ああアレはそのお……………」

少女こと小南桐絵が忙しなく慌てる中再びドアから人が入って来る

木崎「なんだなんだ騒がしいな小南」

烏丸「いつも通りじゃないっすか？」

修（……………この人たちが玉狛支部の……………？）

烏丸「……………おっ、この3人迅さんが言ってた新人っすか？」

小南「新人……………!?あたしそんな話聞いてないけど？なんでウチに新人が来るわけ？」

迅「まだ言ってなかったけど実は……………この3人おれの弟と妹なんだ」？

修「……………!?」

遊真・千佳「?」

小南「えっそうなの？」

迅の明らかな嘘を信じた小南に修と千佳は驚き遊真は面白がり、達也は苦笑いする

小南「とりまる、あんた知ってた!？」

烏丸「もちろんですよ。小南先輩知らなかったんですか？」？

とりまると呼ばれた青年は迅の嘘に乗っかりさりりを嘘を重ねる

小南「言われてみれば迅に似てるような……レイジさんも知ってたの!」

木崎「よく知ってるよ。迅が一人っ子だってことを」

小南「……………!?!?!」

宇佐美「このスグに騙されちゃう子が小南桐絵17歳」

小南「騙したの!?!」

迅「いやーまさか信じるとはさすが小南」

宇佐美「こつちのもさもさした男前が烏丸京介16歳」

烏丸「もさもさした男前です、よろしく」?

宇佐美「こつちの落ち着いた筋肉が木崎レイジ21歳」

木崎「落ち着いた筋肉……?それ人間か?」

迅「さて、3人が来たところで本題だ。次の正式入隊日は3週間後の1月8日だ。3

人はA級目指してるからその3週間を使って新人3人を鍛えようと思う。具体的には

……………レイジさんたち3人にはそれぞれメガネくんたち3人の師匠になってマンツ―

マンで指導してもらう」

小南「はあ?!ちよつと勝手に決めないでよ!あたしまだこの子たちの入隊を認めて

……………」

達也「桐絵。これは僕からのお願いでもあるんだよ。事情が複雑でね、本当は僕がマ
ンツーマンで見たいけど人でも足らないし本部所属にできないから桐絵たちに
お願いしに来たんだ」

小南「な、なら仕方ないわね！その代わりこのシロカミは私が貰うから！見た感じあ
んたが1番強いんでしょ？あたし弱いやつはキライなの」

遊真「ほほうお目が高い」

宇佐美「じゃあ千佳ちゃんはレイジさんだね。狙撃手の経験あるのレイジさんだけだ
から」

千佳「よ、よろしくお願いします……」

木崎「よろしく」

烏丸「……となると俺は必然的に……」

修「……よろしくお願いします」

達也「ボクは3人のスタイルをサイドエフェクト使って導いていく」

迅「よーしそれじゃあ3人も師匠の指導をよく聞いて3週間しつかりと腕を磨くよ
うに！」

宇佐美「そういえば迅さんはコーチやらないの？」

迅「ん？おれ？おれは今回抜けさせてもらおうよ。いろいろやることがあるからな」

↳ ◆ボーダー本部最高司令室◆↳

オペレーター『城戸司令、遠征部隊より通信が入っております「メノエイデスを無事
出立、およそ68時間後に本部基地に到着の予定」以上です』

城戸「御苦勞……………あと3日、か……………」

◆ WORLD TRIGGER ◆

↳ ◆玉狛支部トレーニングルーム001号室◆↳

修「どうなってるんですか？これ……………基地の地下にこんな広い部屋があるなんて

………

烏丸「トリガーで空間を創ってるんだ。レイジさんたち狙撃手組の方に容量使ってるからこっちは殺風景だけだな」

修「トリガーで空間を……!?!」

烏丸「トリガーは単なる武器じゃない。近界民文明の根幹を支える『テクノロジー』なんだ……って昔林藤支部長が言ってた」

修「はあ………」

烏丸「……さて、じゃあとりあえずどのくらいやれるのかを見せてもらおうか。本気でかかってこい」

修「………はい!」

◇◇玉狛支部トレーニングルーム003号室◇◇

パンツ

3号室ではレイジが千佳にライフルの撃ち方を教えていた

木崎「よし、的には当たるようになってきたな」

千佳「はい！」

木崎「ボーダーの狙撃用トリガーはよくできてる、ちゃんと狙えばちゃんと当たる。まずは止まつてる的に確実に当てられるようになれ」

千佳「はい！」

木崎「悪いが俺はこれから夕方まで防衛任務だ。今の調子で撃ち続ければたぶん2〜3時間でおまえのトリオンが足りなくなつて弾切れになる。そうなつたら今日の訓練は終わつていいぞ」

千佳「わかりました！」

木崎「……………（素直だしやる気があるのはいいんだが…………正直戦闘に向いてるとは思えねーな…………）」

◇◆玉狛支部トレーニングルーム002号室◇◆

小南「はつきりいつてあたし感覚派だから他人を鍛えるのつて苦手なの」

達也「大丈夫だよ桐絵、実戦経験で言えば君よりも長いことトリガーで戦つてる子だ。ボーダーのトリガーに慣れれば即マスタークラスの实力はあるよ」

小南「へえ面白いじゃない好きなトリガーを選びなさい。ポコポコにしてあげるか

ら。なんで負けたのか後でゆっくり考えるといいわ」

遊真「ほう、見分けがつかん。けど普通に思いつきり戦っていいの？」

宇佐美『いいよ〜001号室と002号室は仮想戦闘モードにしてあるからガンガン戦ってOKだよ』

遊真「かそう戦闘モード？」

達也「トリオンが減らない訓練モードって事さ」

遊真「なるほど」

小南「要するにあんたは安心して何回でも負けられるって事よ、おチビ」

遊真「おチビじゃないよ、空閑遊真だよ。よろしくなこなみ」

小南「なっ………なんで呼び捨てなのよ！あたしの方が先輩なのよ!？」

遊真「ほう先輩。じゃあおれに勝てたら『先輩』って呼んであげるよ、こなみ」

小南「………!？」

宇佐美『おおく言うね〜？』

小南「ボーダーのトリガーであたしに勝てるつもり………？言つとくけどあたしは迅より前からボーダーにいるのよ？………いいわ、じゃああたしもあんたがあたしに勝てたらちゃんと名前で呼んであげるわ」

◇ 玉狛支部オペレータールーム ◇

烏丸「三雲おまえ、弱いな。ホントにB級か？」

宇佐美「おつかれ〜ほい修くん水分」

修「あ……………ありがとうございます」

ゴウーン

トレーニングルーム002号室の扉が開き、小南がフラフラしながら出てくる

烏丸「小南先輩」

小南「ありえない……………あたしが……………」

修「……………」

再びトレーニングルーム002号室の扉が開き中から達也と頭から煙を出した遊真が出てくる

遊真「……………勝った」

修「……………!?!」

烏丸「小南先輩負けたんですか!?!」

小南「まっ負けてないわよ!!」

遊真「10回勝負して最後に1回勝っただけだよ。トータル9対1」

小南「そうよ9対1!!あたしの方が全然上なんだからね!!」

遊真「今のところはね」

修（空閑が9対1……!?まだボーダーのトリガーに慣れてないとはいえ……先輩はそんなに強いのか……!?）

遊真「でも小南先輩の戦い方は掴んできた。次はもっと勝てるな」

小南「調子に乗らないでよね遊真。さっきのがあんたの最初で最後の白星だから!ほら次行くわよ次!!」

遊真「はいよ」

攻撃手組はそう行ってまたトレーニングルームに入っていった

烏丸「おーやる気満々だな」

修「……………」

烏丸「おまえはどうする?まだやれるか?」

修「やれます!」

◇ 8時間半後 ◇

木崎「なんだ、まだやってるのか」

宇佐美「レイジさんお疲れ様」

木崎「雨取はどこ行った？もう家に帰ったのか？」

宇佐美「千佳ちゃんですか？そういうええばまだ出てきてないですけど」

木崎「……………!!？」

◇ 玉狛支部トレーニングルーム003号室 ◇

ゴウーン

2〜3時間で撃てなくなると予測していたレイジは慌てて様子を見に行く

木崎「おい雨取……………!!……………!!」

レイジが訓練室に入るとそこには数え切れないほどの人型の的と平然と新たな的を

撃つ千佳がいた

千佳「あつ……………木崎さん。もしかしてもうここ閉める時間ですか？」

木崎（朝からずっと撃ち続けてたのか……………!!?こいつ……………一体どんなトリオン量し

てやがんだ……………!?)

千佳「？」

◇◇ボーダー本部◇◇

オペレーター『門発生、門発生。遠征艇が着艇します。付近の隊員は注意してください』

た　ボーダー本部の遠征艇発着場では城戸派の上層部がトップ部隊の帰還を出迎えてい

鬼怒田「待ちくたびれましたな。遠征部隊の帰還です」

黒トリガー②

◇◇ボーダー本部会議室◇◇

風間 「これが今回の遠征の成果です。お納めください城戸司令」

城戸 「御苦労。無事の帰還なによりだ、ボーダー最精鋭部隊よ」

机の上に置かれた4本のトリガーホルダーを見た鬼怒田開発室長が興奮を顕にする

鬼怒田 「おお！素晴らしい！未知の世界のトリガー！これでボーダーのトリガー技術はさらなる進化を遂げるぞ！」

当真 「鬼怒田さんさゝ遠征艇もうちよいでつかつくれねえ？オレ足なつげーから窮屈で死にそうだったぜ」

鬼怒田 「バカ言え！あれよりでつかいのを飛ばそうと思つたらトリオンがいくらあつても足らんわい！」

当真 「ありやそーなの？」

城戸 「……………さて、帰還早々で悪いがおまえたちには新しい任務がある。現在玉狛支部にある『黒トリガー』の確保だ」

風間 「『黒トリガー』……………」

太刀川 「玉狛？」

城戸 「三輪隊、説得を」

奈良坂 「はい、12月14日午前追跡任務により近界民を発見。交戦したところ『黒トリガー』の発動を確認、その能力は『相手の攻撃を学習して自分のものにする』

風間 「……………!!」

奈良坂 「その後玉狛支部の迅隊員が戦闘に介入、迅隊員とその場に居合わせたかっただ最上隊員とその近界民に面識があったため一時停戦、その近界民は迅の手引きで玉狛支部に入隊した模様——そして現在に至ります」

当真 「近界民がボーダーに入隊!?なんだそりや！」

風間 「いや、それよりも最上だと!?やつが戻ってきていたのか!？」

城戸 「そうだ、そしてその近界民の扱いを玉狛支部に一任するといった契約も交わしているが、『黒トリガー』だけはなんとしても我々の手元に置かねばならん」

太刀川 「でも、達也が戻ってきてんなら例の『黒トリガー』も回収できたんじゃない性
の？」

城戸 「現在『黒トリガー』自体は本部と玉狛で合わせて2本ずつの4本あるが、最上
が持ち帰った『黒トリガー』についてはまだ解析と起動実験が終わっておらずどんな性

能かもわかっていない。実質本部には現在一本しか無いと言える」

風間「なるほど、それは早急に回収する必要があるようだ」

太刀川『黒トリガー』の行動パターンは？一人になる時間とか決まってるの？まさか玉狼の全員を相手する訳には行かないだろ」

奈良坂『黒トリガー』は毎朝7時頃玉狼支部にやってきて夜9時から11時の間に玉狼を出て自宅へ戻るようです。現在もうちの米屋と古寺が監視しています」

根付「チャンスは毎日ある訳だねえ。ならばしっかりと作戦をねって……」

太刀川「いや、今夜にしましょう。今夜」

三輪「……………!?!」

鬼怒田「今夜!?!」

三輪「太刀川さん、いくらあんたでも相手を舐めない方がいい」

太刀川「舐める？なんでだ？三輪。相手のトリガーは『学習する』トリガーなんだろう？今頃玉狼でうちのトリガーを『学習』してるかもしれない。時間が経つほどこつちが不利になるぞ」

三輪「……………!?!」

太刀川「それに長引かせたら米屋と古寺に悪いだろ。サクッと終わらせようや」

当真「なるほどね」

風間「……………確かに早いほうがいいな」

太刀川「それでいいですか？城戸司令」

城戸「いいだろう、部隊はおまえが指揮しろ。太刀川」

太刀川「了解です。さて、夜まで作戦立てるか」

風間「襲撃地点の選定が先だな」

太刀川「なるほど」

三輪（太刀川慶……………この人は昔から苦手だ……………）

◇ 玉狛支部 ◇

宇佐美・小南「おおお!?!」

小南「なに!?!この数値!!『黒トリガー』レベルじゃない!!」

宇佐美「千佳ちゃんすごーい!!」

小南「どうなってるの……………!?!」

木崎「雨取のトリオン能力は超A級だ。忍耐力と集中力があつて性格も狙撃手向き。

『戦い方』を覚えればエースになれる素質はある」

宇佐美「おおく……………!!」

達也「ただ1つ問題がある」

木崎「問題？」

達也「キツイことを言ってしまうが、雨取さんはサイドエフェクトで見た感じ人が撃てない。理由はざっくり言えば自分を悪く思われるのが嫌だから。雨取さんは兄と近界民の事を相談し、信じてくれた友達を連れ去られている。そしてそれを自分のせいだと言われるのが怖いタイプだ。ボクもそうだからよく分かる」

千佳「わ……………わたしは……………わたし……………は……………」

達也「君のために言っておく。この先、人を撃てなければそう遠くない大規模侵攻でメガネくんが死ぬぞ」

修「……………え？」

遊真「オサムが……………死ぬ？」

達也「迅が居ないからこの際言うが、迅の予知ではそこそこ高い確率でメガネくんが死ぬ。理由は敵が雨取さんを狙うからだ」

修「で、でもそれは千佳を戦いに出さなければいいんじゃない？」

達也「迅とボクは間違いないく雨取さんを囮にして市民の犠牲を減らそうとする」

修「そ……………そ、そんな…!？」

達也「ボクのサイドエフェクトは説明が難しいから簡単に言うが、迅のサイドエフェクトとは根底から違う。ボクが見るのはボクが存在しない世界だ。ボクが見たものはこの世界でもボク自身が手を加えたところだけしか変わらず、他のところは全く同じことが起きるようになってる。ボクが迅を使って遊真くんをボーダーに入れたのだから、1番強い敵を抑えてもらうためだ。そのためなら本部と1く2戦やり合うつもりでいる。これは君たちを利用してボクなりの責任の取り方だ。ボクはメガネくんが傷つく事を知りながらその道を大きく変えず雨取さんを危険に晒そうとしている。だからその責任として雨取さんが苦しむことになったとしても人を撃てるようになってもらう。これは強制だ」

小南「達也さん……………」

遊真「ウソ入ってないっぼいね（…………でも…）」

達也「それと遊真くん、君には皆が家に帰ったりでない間レプリカ先生とボーダーのトリガーを解析して印を作ってもらおう」

遊真「ふむ。なんで？」

達也「単純にメガネくんの生存率をあげるためだ。ボクが見た世界では相手の1番強い使い手を倒したものの戦闘体を失っていてレプリカ先生が敵に連れていかれてしまいい、君はその後の『黒トリガー』での戦闘に大きな支障が出ている」

遊真「レプリカが……!!?」

達也「だからこそ桐絵がいる間はボクが設定したトリガーで戦ってもらい、それらを印として強化して戦う方がレプリカ先生の健在とメガネくんの死を回避するのにいいと判断した」

レプリカ『なるほど、チカの方はともかく『黒トリガー』については理にかなっている。了解した』

小南「わっ!?なに!?!」

レプリカ『はじめましてこなみ、とりまる、レイジ、私はレプリカ。ユーマのお目付け役だ』

達也「まあそういうわけだからレイジさんには悪いけどこの先は狙撃の基礎訓練と並行して仮想訓練モードでひたすら人を撃ってもらおう。ボクは迅と共に遊真くんの『黒トリガー』狙ってくる慶や風間くんたちを退けなきゃならないから。あとは桐絵、新しい印を追加したら遊真くんの『黒トリガー』と戦ってあげて。これはボクからのお願いだ」

木崎「……………わかった……………」

達也「話はここまでだ。もう行かないと」

達也はそう言うときさっさと外へ出ていってしまった

修「……………千佳、大丈夫か？」

千佳「……………う、ん……………わたし……………達也さんが言ったことがすごい
凶星……………だった……………だからちゃんと人を撃てるようになって誰にも迷惑をかけた
くない！」

遊真「……………1歩前に進めたな！チカ。でもおれたちはチームだからな！師匠
のレイジさんやおれたちには迷惑とか考えずガンガン頼ってくれよ！それがオサムを助
けることになるんだからな！」

千佳「……………うん！」

木崎「じゃあそろそろ午後の訓練を始めるぞ雨取」

千佳「はい！よろしくお願いします！」

遊真「おれたちも訓練室に行こうぜこなみ先輩。印を作る前に1度今の力を試してお
きたい」

小南「いいわ！あんたの『黒トリガー』が拍子抜けじゃないことを祈ってるわ」

烏丸「さて俺達も行くぞ。三雲」

修「はい！烏丸先輩！」

◇警戒区域◇

現在警戒区域では遠征部隊と三輪、奈良坂を合わせた8人が玉狛支部に向けて走っていた

月見『目標地点まで残り1000』

太刀川「おいおい三輪、もつとゆっくり走ってくれよ。疲れちゃうぜ」

三輪（……………やっぱりこの人は苦手だ……………）

月見『目標地点まで残り500』

太刀川「!!とまれ!」

太刀川の掛け声で全員が止まる

正面には迅と達也が待ち構えていた

風間「迅……………!!それに……………」

太刀川「よう、久しぶりだな達也」

達也「久しぶりだネ、慶」

迅「太刀川さん久しぶり、みんなお揃いでどちらまで?」

◆ WORLD TRIGGER ◆

当真「うおつ迅さんじゃんなんで？」

迅「よう当真、冬島さんはどうした？」

当真「うちの隊長は『船酔い』でダウンしてるよ」

風間「余計なことを喋るな当真」

太刀川「こんな所で待ち構えてるってことは俺たちの目的もわかってるわけだな」

迅「『うちの隊員』にちよつかい出しに来たんだろ？最近うちの後輩たちはかなりいい感じだから邪魔しないで欲しいんだけど。実際邪魔した人が隣にいるし」

達也「最善のためだ。だからこうして慶や風間くんたちを止めに来てる」

太刀川「悪いが出来ない相談だと言ったら？」

達也「まあ待つてくれ、君たちも聞いていると思うけど君たちが狙ってるやつのは処遇は玉狛に一任されてるんだ。だから君たちがやってる事は契約違反だし、三輪は聞いてたでしょ？オレ言わなかったっけ？」

三輪「!?（オレ……………!?）」

達也「あいつがいないとボーダー壊滅するって言ったよな？」

三輪「……………!!」

達也「オレは今結構頭にきてるんだ。わかってたこととはいえ、あいつの事情も知ってるよと余計に……………だからまあ手を出す前に話し合いをしたいんだけど……………」

太刀川「悪いがこつちも命令なんぞでな。その話は上とやってくれ」

達也「まあ君ならそう言うと思ってたし、君たちはここで負けてもらう」

風間「最上、迅『模擬戦を除くボーダー隊員同士の戦闘を固く禁ずる』隊務規定違反で厳罰を受ける覚悟はあるんだろうな？」

達也「先にルールを破ったのはそつちだ。オレのこの行動は市民を守るための行動であつて今はオレが正義なんだよ風間くん」

迅「それにうちの後輩だつて立派なボーダー隊員だよ。あんたらがやろうとしてることもルール違反だろ風間さん」

風間「……………!」

三輪「『立派なボーダー隊員』だと……………!?ふざけるな！近界民を匿ってるだけだろうが!!」

達也「おまえこそふざけるなよ三輪。おまえは自分の私怨を優先しておまえと同じ境遇の市民を大勢作ろうとしてるんだゾ？わかってんのかテメエ」

三輪「……………!?!」

太刀川「だが、おまえたち2人で勝てるほど俺たちの部隊は甘くないぞ」

迅「おれも達也さんもそこまで自惚れてないよ。おれが『黒トリガー』使って達也さんと一緒にでも勝率1割がいいとこだ。『2人だけだったら』の話だけだ」

風間「……………!?!なに……………!?!」

そのとき遠征部隊を見下ろすようにしてA級5位、忍田本部長派の嵐山隊が姿を現す
太刀川「!!」

嵐山「嵐山隊現着した、忍田本部長の命により玉狛支部に加勢する!」

太刀川「嵐山……………!」

三輪「嵐山隊……………!?!」

太刀川「そうか……………達也が居る時点で忍田本部長派はそっち側って訳だ」

嵐山「遅くなりました達也さん、迅」

迅「いいタイミングだ嵐山、助かるぜ」

嵐山「三雲くんの隊のためと聞いたからな、彼には大きな恩がある。それに達也さんがここまでキレてるのは久しぶりみるからな。それほど重要だったことだ」

達也「木虎もメガネくんのために？」

木虎「命令だからです」

達也「慶、嵐山達が居ればオレらの勝ちは確定してるんだけどまだやるか？」

太刀川は基本的にポイント廃人の戦闘狂である

長い間戦えなかった相手との戦いに内心心を震わせながら腰の弧月を抜刀し、笑いながら答えた

太刀川「……………当然」

◆ WORLD TRIGGER ◆

戦いは機動力のある風間隊の3人による突撃から始まった

中距離の火器を持つ嵐山隊が銃で迎撃するも歌川を止められず、歌川は迅に斬りかか

る

が、それをサイドエフエクトで予測していた迅にあっさりを対応され受けに回される風間隊の3人が使うブレードのスコープピオンは耐久値が低いため簡単に折られ歌川は左肩から浅く斬られトリオンが漏出する

そこへ太刀川が入れ替わるようにして迅に弧月で斬り掛かる

太刀川の一撃は迅を仰け反らせ迅は体制を立て直すために一度距離を取る

太刀川はさらなる追撃に弧月の専用オプシヨントリガーである旋空を使い攻撃範囲を伸ばすが上に飛ぶことでそれも躲される

当真「うひーさすが迅さんイヤな地形選ぶぜ。全然射線通んねーじゃん」

太刀川「5人纏まってるとなかなか殺しきれないな」

風間「しかも迅はまだ『風刃』を1発も撃っていない。達也の方もトリガー構成が不明だ」

奈良坂「(嵐山隊の狙撃手はどこだ?こっちの動きは補足されているハズ…………)後手後手だな…………」

菊地原「風間さん、こいつら無視して『黒トリガー』獲りに行っちゃダメなんですか?うちの隊だけでも」

風間「玉狛には木崎たちがいる。ここで戦力を分散するのは危険だ」

菊地原「なるほど………了解」

太刀川「三輪、米屋と古寺はまだか？」

三輪「もうすぐ合流します」

太刀川「出水、三輪」

出水「はいはい」

三輪「なんですか」

太刀川「俺と風間隊と狙撃手三人は総攻撃で迅をやる。達也は確かブレードがメインじゃなかったはずだ。出水は達也を抑えろ。三輪は嵐山隊を足止めしろ」

出水「了解」

三輪「………了解です」

風間「玉狛と忍田派が手を結んだという事は『黒トリガー』2つと本部隊員の3分の1、さらに最上がいることでA級部隊1つ分の戦力が増えている。戦力の上で完全に我々を上回っている。『黒トリガー』奪取はより緊急性を増した。失敗は許されないぞ三輪」

三輪「わかってます風間さん」

迅「………次はこつちを分断しに来そうだな」

嵐山「その場合はどうする？」

迅「別に問題ないよ。何人か嵐山達に担当してもらうだけでもかなり楽になる。風間さんがそっちいってくれると嬉しいんだけど、こっち来るだろうな」

達也「出水だっけ？慶のこの射手がオレのここ来るだろうな」

時枝「うちの隊を足止めするなら三輪隊ですね。三輪先輩の『鉛弾』がある」

木虎「どうせなら分断されたように見せかけてこつちの陣に誘い込んだほうがよくないですか？」

嵐山「そうだな、賢と連携して迎え撃とう」

迅「おっ来たな。上手いことやれよ嵐山、達也さん」

嵐山「そっちもな迅」

達也「スグ終わらせて風間くん取ってやるよ」

三輪「嵐山隊……なぜ玉狛と手を組んだ？玉狛と達也さんは近界民を使って何を企ん

でいる？」

嵐山「玉狛は知らないけど達也さんなら市民を守るためだろう？だからこうして俺たちが派遣されてるんだ」

三輪「……………チツ」

三輪は言い返せなくなりイラつき混じりにハンドガンの引き金を引き、嵐山隊VS三輪、米屋の戦闘が始まった

達也「はじめましてだな。出水だっけ？慶のこの射手」

出水「おお、これはこれは名前を覚えてもらえてるなんで光栄つすね、はじめまして太刀川隊の射手の出水公平です」

達也「オレは最上達也だ。合成弾、あれは非常に使い勝手がいい」

出水「銃手の概念を創った人にそう言うって貰えるとはホントに光栄だなあ」

達也「風間くんを受け取りに行かなきゃならんからな。サクツと終わらせよう」
出水「俺も太刀川さんを援護しに行かなきゃなんでその意見には賛成ですよ」
達也は左手に短機関銃を出し、出水はトリオンキューブを展開した

◆ WORLD TRIGGER ◆

太刀川が重い一撃で迅の体制を崩しその隙を逃さず風間隊が斬りこんでいく

風間が腕からブレードを出して迅の体制を崩す

狙撃手はその隙を逃すまいと撃ち込むも読まれていて最小限の動きで躲される

古寺「奈良坂さん当たらないです！」

奈良坂「いいから黙って撃て、迅さんには予知のサイドエフェクトがある。躲されるは仕方ない。当てるんじゃなく動きを制限するつもりで撃て。迅さんの対処能力を攻撃の密度で上回るんだ」

当真「ふい〜」

奈良坂「当真さん、あんたも少しは撃つたらどうだ？」

当真「ああ〜？外れる弾なんか撃てるかよ。狙撃手としてのプライドが許さねー。『躲されるのは仕方ない』？そんなだからいつまで経つてもナンバー2なんだよ、おまえは。そんな訳でおれは出水の方に行くぜ。迅さんはおまえらに任せた」

奈良坂「……………なんだと!？」

太刀川「いや、それでいい奈良坂。確かに当真はそっちの方が生きる駒だ……………が、行くなら三輪の方に行け。冬島さんいないのに達也を狙撃したら逆に抜かれるぞ」

当真「うへえそうなの？じゃあ大人しく三輪の方行くかー」

太刀川「あと、奈良坂たちまで居なくなったら困るからな」

奈良坂「……………はい」

菊地原「どんどん下がりますね『黒トリガー』のくせに」

風間「包围されないためには当然の行動だろう。突出するなよ、浮いた駒は食われるぞ」

歌川「でもどうします？ここままだと警戒区域外まで行くんじゃ……………」

太刀川「いやそれは無い。迅は市民を危険にさらさない（しかし……………確かに消極的すぎる。一体何を考えている……………?）」

太刀川と風間隊は攻撃の手を緩めず次々と攻撃を仕掛けるが全て下がりがら受け流される

太刀川「どうした迅、なんで『風刃』を使わない？」

迅「……………」

太刀川「何を企んでる？随分と大人しいな迅。昔の方がまだプレッシャーあったぞ」

菊地原「まともに戦う気なんかないんですよ。この人は単なる時間稼ぎ、今頃きつと玉狛の連中が近界民を逃がしてるんだ」

風間「いいや、迅は予知を使つて守りに徹しながらこちらのトリオンを確実に削つている。こいつの狙いは俺たちを『トリオン切れで撤退させる』ことだ」

歌川「……………!？」

迅「あらら……………」

太刀川「……………なるほどあくまで俺たちを『帰らせる』気が『撃破』より『撤退』させた方が本部との摩擦が小さくて済む」

風間「戦闘中に後始末の心配とは大した余裕だな」

菊地原「……………（風間さんたちは何をもちやつてるんだ……………？『トリオン切れを狙つてた……………？』買い被りだ、ただ逃げ回つてるだけじゃないか。この人とは遠征前の訓練でも何度か戦ったけど、大して強いとは思わなかったぞ……………相打ち〇

Kならスグに片が付く)風間さん、やっぱりこの人は無視して玉狛に直行しましょうよ。ぼくらの目標は玉狛の『黒トリガー』、この人を追い回したって時間のムダだ」

風間「なるほど……………迅の『逃げ』を封じる手か)……………確かにこのまま戦っても埒が明かないな。玉狛に向かおう」

迅「……………やれやれ……………やっぱこうなるか」

逃げを封じられた迅は『風刃』を起動しスグ横の壁に斬撃を伝播させ風間隊の菊地原の首を跳ね飛ばす

菊地原「え……………」

歌川「!？」

『戦闘体活動限界ベイルアウト』

首を切断され戦闘体が活動限界を迎えた菊地原は本部に強制送還された

太刀川「出たな『風刃』」

迅「仕方ないプランBだな」

「迅悠一十最上達也」②

陽介「誰か飛んだぞ？」

三輪「誰だ？」

時枝「迅さんじゃないですよね」

嵐山「違うな。『黒トリガー』にバイルアウトは付いてない」

迅「……………申し訳ないが太刀川さん達にはきっちり負けて帰ってもらおう」

太刀川「……………！」

風間「歌川、隠密戦闘を準備しろ」

歌川「……………！狙撃手との連携が取りづらくなりますが……………」

風間「いいから急げ」

迅は問答による一瞬の隙を逃さず地面のアスファルトに斬撃を伝播させ太刀川に1発と歌川に1発斬撃を撃つ

歌川「……………隠密ON!」

太刀川には弧月で防がれたが歌川はスコープオンが脆いため左眼から腹にかけて浅いものの広く斬られながら風間と共に自身の姿を隠すトリガー、カメレオンを発動する

迅「!カメレオンか……………!」

風間隊の2人が発動したカメレオンに一瞬意識がさかれた迅に太刀川が斬り込む

迅「!!」

太刀川「誰が負けて帰るって?」

迅「できれば全員がいいな」

歌川「今の話が聞いてた迅さんの……………!?!」

風間「そうだ。あれが迅の『黒トリガー風刃』の能力。物体に斬撃を伝播させ『目の届く範囲どこにでも』攻撃ができる。迅のブレードから出る光の帯が見えるか?あれが『風刃』の残弾だ。残り8本。あれがゼロになるとリロードの隙がある。その隙を逃さず殺し切るぞ。狙撃手、太刀川を援護しろ。俺たちに当てても文句は言わん」

奈良坂「奈良坂了解」

古寺「古寺了解!」

迅が『風刃』を効果的に使うために距離を取りたいのに対して太刀川はそれを理解しているため距離を詰めて斬りこんでいく

太刀川「『風刃』の怖さは遠隔斬撃。距離を詰めればただのブレードと同じだ」

迅「なかなか研究してるじゃん太刀川さん」

迅が太刀川に押し込まれ民家のガレージに入る

古寺「追い込んだ！」

奈良坂（単純な剣の腕比べなら太刀川さんの方が上だ……………！）

太刀川「もう逃げ場はないぞ『黒トリガー』」

迅は太刀川の剣を受けながら自身の足元から斬撃を天井へ伝わせ太刀川の上から攻撃をする

太刀川「!!（壁を伝って、天井から……………!）」

迅「逃げられないのはそっちだよ。珍しく熱くなりすぎたな、太刀川さん」

迅はガレージの狭い壁を伝って5つの角度から斬撃を放つ

流星の太刀川も5つの角度からの斬撃を防げず大きなダメージを食らう

太刀川「……………!!!」

古寺「太刀川さんがやられた!!」

風間隊は迅を挟むようにして姿を現し斬り掛かる

迅は後ろの歌川を優先して残っていた1発で歌川を斬り捨てる

歌川「!!風間さん、0本です!!」

『風刃』の残弾が切れたと判断した風間がスコピーオンを変形させ迅のブレードを固定し、足からスコピーオンを地面の中を伝わって迅の足を削りつつ身動きを封じる

迅「!!……………!?!(地面の下を通って足からブレードを……………)読み逃したか……………!」

風間「太刀川!!」

満身創痍の太刀川だが庇って残っていた右腕で弧月を振るう

奈良坂「(風間さんごと斬る気か!) 入った!」

風間(……………いや待て、『風刃』の残弾は8発だった。迅が撃ったのは太刀川に6発、歌川に1発だけ。残りの1発は、残りの1発はどこに使った……………!?)

風間が警戒して太刀川を止めようとした瞬間『風刃』の斬撃が風間の足と弧月を振るっていた太刀川の腕を斬り捨てる

太刀川「……………!?!」

風間「……………(俺たちの動きを予知して、既に斬撃をガレージの壁に仕込んでいたのか……………!)」

迅「あんたたちは強い。『黒トリガー』に勝ってもおかしくないけど『風刃』とおれのサイドエフェクトは相性が良すぎるんだ。悪いな」

達也と出水が1対1で向かい合う場所ではボーダーの区分では突撃銃となる『キャリコM950』の形をした銃で多くの弾数で出水を削り、トリオンを確実に減らしていた達也「さて、プランBに変わったっほしいしコッチもちまぢまやらずに落とそっか」

迅のいる方でペイルアウトの光が見えたため迅のプランがAからBに変わったことを察した達也は懐から自身の切り札となる改造を重ねた『トンブソン・コンテNDER』を取り出した

出水「ここでリボルバーってことは里見スタイルか！」

達也「理解が早くて優秀だけど、オレの1発は防げねえんだな！」

出水は自身のトリオン能力がボーダーの中でトップクラスに多いため、ボーダートツプのトリオン量をもつ二宮隊隊長二宮匡貴とも互角に撃ち合える程の射手だ

そんな出水は自身のトリオン量に自信を持っていたためシールドを集中させて急所を守ればカウンターで勝てるかと踏んでいた

だがそれは達也でなければの話だが

達也の放った『トンプソン・コンテンドー』の1発は出水の集中シールドごと出水のトリオン供給器官を吹き飛ばした

達也の『トンプソン・コンテンドー』にはB級弓場隊隊長弓場拓磨と同じように射程を切り詰め、威力を弾速を上げるカスタムと使用する弾丸を高威力であるアステロイド2つを合成した『ギムレット』にする事でモデルの銃と合わせてボーダートップのトリオン量をもつ二宮匡貴ですら防ぐことが不可能な文字通りの必殺技と化した

それでも出水はボーダートップクラスの射手だ

カウンターのためにシールドと共に出していたハウンドを探知誘導にして自身がベイルアウトする直前に放つ

だが出水の誤算は達也のトリオン量が自身と同じだと言うことを知らなかったことだ

そのため威力調整をしていなかったハウンドは達也の固定シールドによって1発も達也には当たるとは無かった

達也「合成弾なんて便利なもん創ってくれて助かったよ」

出水「マジか!?!くああく負けたか。アレまで防がれたんじや端から勝ち目無かったわけか」

出水はそう言い残してバイルアウトした

一方、嵐山隊と三輪、米屋、当真が戦う区画では三輪の木虎を狙った鉛弾を時枝が庇うがボーダーNo. 1狙撃手である当真に頭を撃ち抜かれ時枝が戦線離脱、木虎も時枝のおかげで片足だけで済んだものの機動力が大幅に削がれてしまった

そんな中足に鉛弾を撃ち込まれている嵐山と足が削られた木虎は路地に入って時間を稼ぐ

三輪はカウンター狙いを見抜いて迅の方へ向かおうとするが三輪達の足止めが目的の嵐山は単独でバググワームを解除して追う

嵐山は三輪と米屋の攻撃をシールドで捌く

三輪は嵐山の作戦が自身を囷にして木虎に奇襲させることだと見抜いているため木虎を警戒するがなかなか出てこないため嵐山を仕留めに行く

嵐山はテレポーターで躲すも移動位置を当真に見抜かれ狙撃されかけるが、バググ

ワームを着た木虎が当真の頭を足にスコープオンを出して斬り捨てる

結果当真は嵐山を撃つことなくベイルアウトし焦った三輪は米屋と共に嵐山を落とそうとするが、嵐山隊の狙撃手佐鳥のツイン狙撃によって持っていた武器を腕ごと落とされる

だがそれでも追撃をしようとした三輪を三輪隊のオペレーターである月見蓮がとめる

月見『三輪くん作戦終了よ』

三輪「!？」

◆ WORLD TRIGGER ◆

地面や壁を伝った3本の斬撃とブレードでの直接攻撃で風間に行動不能レベルのダメージを負わせる

迅「勝負ありだな」

風間「なるほどな……………いずれ来る実戦に備えて手の内を隠していたというわけか……………」

迅「悪いね、生粋の脳ある鷹なもんで」

太刀川「……………だが『風刃』の性能は把握した。あと3週間……………正式入隊日までの間に必ずおまえを倒して『黒トリガー』を回収する」

迅「残念だけどそりゃ無理だ」

迅は残った残弾を全て使って太刀川と風間をバイルアウトさせる

月見『三輪くん作戦終了よ』

三輪「!!」

月見『太刀川くんと風間さんがバイルアウトしたわ。奈良坂くんと章平くんも撤収中

よ』

三輪「……………!!」

陽介「マジかー！つーか迅さん6対1で勝ったの!?!太刀川さんたち相手に!?!『黒トリガー』半端ねーな！弾バカもなんか無傷で落とされてるし！」

木虎「任務達成ですわね」

佐鳥「嵐山さん見ました？オレの必殺ツイン狙撃」

嵐山「ああ木虎、賢、よくやった。充と綾辻もよくやってくれた」

時枝『どうもです』

綾辻『おつかれさまです』

三輪「嵐山さん、近界民を庇ったことをいずれ後悔するときに来るぞ。あんたたちはわかってないんだ。家族や友人を殺された人間でなければ近界民の本当の危険さは理解できない。近界民を甘く見てる迅はいつか必ず痛い目を見る。そしてそのときにはもう手遅れだ」

嵐山「甘く見てるってことはないだろう。迅だって近界民に母親を殺されてるぞ」

三輪「……………!?!」

嵐山「5年前には師匠の最上さんも亡くしてるし、達也さんだって家族、友人を皆殺しにされてる。親しい人を失うつらさはよくわかってるハズだ」

三輪「……………」

嵐山「近界民の危険さも大事な人を失うつらさもわかったうえで迅や達也さんには自分の考えがあるんだと俺は思うぞ」

三輪「……………」

嵐山「……………さて、帰る前にこの重りを外してもらえるとありがたいんだが」

三輪「……………くそっ!!」

◇ボーター本部会議室◇

鬼怒田「一体どうなつとるんだ! 迅の妨害! 精鋭部隊の潰走! だが問題は何よりも……………忍田本部長!! なぜ最上と嵐山隊が玉狛側についた!?! なぜ近界民を守ろうとする!?! ボーターを裏切るつもりか!?!」

忍田「『裏切る』……………? 論議を差し置いて強奪を強行したのはどちらだ?」

鬼怒田「……………!」

忍田「もう一度はつきりと言っておくが私は『黒トリガー』の強奪には反対だ。ましてや相手は有吾さんの子……………これ以上刺客を差し向けるつもりなら次は嵐山隊では

なくこの私が相手になるぞ城戸派一党」

根付「……………」

唐沢（忍田本部長はA級1位太刀川慶に剣を教えた師匠。ボーダー本部に置いてノーマルトリガー最強の男。怒らせたのはまずかつたな。やはり強硬策より懐柔策を……………）

城戸「なるほど……………ならば仕方ない。次の刺客には天羽を使う」

忍田「!!?」

鬼怒田「なっ……………」

根付「天羽くんを……………!?!」

唐沢（S級隊員『天羽月彦』……………! 迅悠一と並ぶもう1人の『黒トリガー』使い。素行にいろいろと問題はあるが単純な戦闘力では迅悠一をも凌ぐという。城戸司令はとことんケンカするつもりだな）

根付「い……………いやしかしですなえ城戸司令……………彼を表に出すとボーダーのイメージが……………なんと言いますか天羽くんの戦う姿は少々『人間離れ』しておりますからねえ……………万が一市民に目撃されると非常にまずい……………」

城戸「A級トップを1人で倒す迅の『風刃』に忍田くんが加わるとなれば、こちらも手段を選んではおれまい」

忍田「城戸さん……………街を破壊するつもりか……………!!」

迅「失礼します」

城戸「……………!?!」

迅「どうも皆さんお揃いで、会議中にすみませんね」

達也「やあ城戸さん」

鬼怒田・根付「な……………!?!」

城戸「迅……………最上……………」

達也「城戸さんさあ今はオレ『最上じゃないんだわ』」

城戸「……………!?!」

鬼怒田「きつささらあく!!!!よくものうのうと顔を出せたな!」

迅「まあまあ鬼怒田さん血圧上がっちゃうよ」

城戸「何の要件だ迅、『ルシフェル・アレイスター』」

鬼怒田・根付・唐沢「……………!?!」

忍田「……………!?!」

城戸「宣戦布告でもしに来たのか」

迅「違うよ城戸さん。交渉しに来たんだ。おれはね」

鬼怒田「交渉だと……………!?!裏切っておきながら……………」

唐沢「いや……………本部の精銳を撃破して本部長派とも手を組んだ。戦力で優位に立つた今が交渉のタイミングでしょう」

迅「玉狛の要求は一つ、うちの後輩空閑遊真のボーダー入隊を認めて頂きたい」

鬼怒田「何い？ どういうことだ!？」

迅「だって本部が認めてくれなきゃ何度でも同じことが起こるでしょ」

唐沢「なるほど……………『模擬戦を除くボーダー隊員同士の戦闘を固く禁ずる』か」

根付「ボーダーの規則を盾にとつて近界民を庇うつもりかね……………!？」

城戸「私がそんな要求を飲むと思うか……………?」

達也「あんたらは異常者の集まりだから飲まないだろうね」

鬼怒田「何い!？」

城戸「……………今のは聞き捨てならんな……………ルシフェル・アレイスター」

達也「だってそおだろ？ 下手に手を出せばボーダーが壊滅して市民に甚大な被害が出るって伝えてあったにも関わらずてめえらは遊真くんに手えだそうした。三輪たちのときは目をつぶってやってさらには警告までしてやった。にもかかわらず自ら破滅する方を選んだんだぜ？ 異常者とじゃなけりやなんなんだ」

城戸「近界民は玉狛に一任したが『黒トリガー』についてはそんな取り決めはなかったハズだ」

達也「遊真くんの身柄を玉狛に一任した時点で『黒トリガー』も一任したも同然なんだよ」

城戸「そんな理屈が通用すると思うか？」

達也「するね。遊真くんの肉体そのものが『黒トリガー』だと言える。仮に奪ってしまえば彼は死ぬ。その上誰もその『黒トリガー』を起動出来ずに腐らせるだけで戦力がただただ無くなる。あんたらは日本人の子供をそんなに近界民だつつつて殺したいか？」

城戸「……………なぜその『黒トリガー』が起動出来ないとわかる？」

達也「それを有吾さんが創った経緯が死にかけの息子を生かすためだからだ」

鬼怒田「!!」

城戸「……………だがこちらとしても一支部である玉狛が本部より戦力を持っていて現状をそのままにはできない」

迅「わかつてるさ、だから変わりにこっちは『風刃』を出す」

城戸「……………!!」

鬼怒田・根付「な!!」

迅「うちの後輩の入隊と引き換えに『風刃』を本部に渡すよ」

鬼怒田「本気か!?!迅!」

根付「なんと……………!!」

唐沢（そう来るか……………）

迅「そつちにとつても悪くない取引だと思っけど？」

根付（悪くないどころの話じゃないねえ……………！使えない『黒トリガー』よりもA級トツプ数隊の力に匹敵してなおかつ使える人間が多い『風刃』の方がはるかに価値がある……………！）

鬼怒田（交換条件で入隊させた近界民がもし問題を起こしたとしても、天羽と『風刃』で問題なく対応できる……………実質リスクなしで『風刃』を手に入れるようなもんだ……………！）

城戸「……………取引だと……………？そんな事せずとも私は太刀川たちとの規定外戦闘を理由に、おまえからトリガーを取り上げることでもできるぞ？」

迅「そうなれば太刀川さん達も没収なんだから都合だよ」

城戸「没収するのはおまえのトリガーだけだと言ったら？」

迅「試してみなよ？そんな話を通るかどうか」

達也「城戸さんさあ。オレが怒ってんの忘れてんじやねえよな？」

城戸「……………何を企んでいる？迅……………！この取引は我々にとつて『有利すぎる』。何が狙いだ？」

達也「オレたちはあんたらと違って近界民からの被害を最小限にするために動いてんだ。狂ってるあんたらに理解しろとは言わないが、遊真くんと迅と『風刃』、忍田さんにオレが居れば……正味天羽が出てこようが勝てるゾ？」

城戸「……………いいだろう。取引成立だ、『黒トリガー風刃』と引き換えに……玉狛支部空閑遊真のボーダー入隊を認める」

迅「ありがとうございます！じゃあおれはここで失礼しますよ」

迅はそう言い残すと達也の方を一瞥して部屋を出た

鬼怒田「……………城戸司令……………先程からひとつ気になってることがあるんですが……………」

達也「ああ鬼怒田さんと根付さんと唐沢さんは知らないんだつたな。既にご存知の通りボクは『アリステラ』の生き残りだ。で、アリステラに住んでた時の名前が『ルシフェル・アレイスター』、当時は溜花様の護衛を務めていた」

鬼怒田・根付・唐沢「……………!?!」

唐沢「彼の戸籍やらは私が担当しましたけど……………なるほど君の本名か……………」

達也「いや〜先程からどうもすいません。一度怒っちゃうとまだ昔の口調が出てきちゃって……………だいぶん矯正したはずなんですけどねえ〜」

城戸「……………構わん……………君が溜花くんのために戦っていることは私も知っている……………」
達也「あはは……………バレてますか……………」
城戸「……………当然だ」

1月8日

ボーダー隊員正式入隊日

遊真「さあ、いよいよスタートだ」

幕間①

A級精鋭部隊と迅・達也・嵐山隊による遊真の『黒トリガー』争奪戦が終わり本部上層部と交渉を終えた次の日、達也は修や千佳、レプリカを犠牲にしないため玉狛に来ていた

達也「用事も終わったからボクも今日から本格的に君たちを強くするよ」

遊真「よろしくお願いします」

達也「桐絵から聞いたけど現状遊真くんが『黒トリガー』を使ってもレプリカ先生の補助無しじゃ桐絵と6対4、レプリカ先生付きで8対2だ。正直な話遊真くんの『黒トリガー』はもつと強くなる。そういう能力のトリガーだからネ」

遊真「レプリカもそう言ってたしおれもそう思う」

達也「ではここからレプリカ先生とメガネくんと雨取さんも交えてボーダーの攻撃手と銃手とオプシヨントリガーについて解説していこうと思う。レプリカ先生には解析しながらになるけど」

レプリカ『了解した』

遊真・千佳・修「よろしくお願いします」

達也「まずボーダーのトリガーは8つのホルダーがあつて、利き手で4つと反対側で4つ、左右で同時に2種類ずつ使える」

遊真「ふむふむ、組み合わせでいろいろやれるわけね」

達也「攻撃用のブレードトリガーは計3つあつて、遊真くんに使ってもらおう軽量型のブレードトリガー『スコープピオン』。いつでもブレードの出し入れが自由に重さもほとんどゼロ。手以外の所からもブレードを出せるしトリオンの調節次第でブレードの長さや形を変えられる。その代わりに耐久値は3つの中で1番脆くて受けたちするとよく折れる」

遊真「なるほど使い手次第で色んなことが出来るブレードか」

達也「その認識で大丈夫。次は1番使い手が多い万能ブレード『弧月』。『スコープピオン』と違って自由に出し入れできないし、重さもそこそこあつて両手じゃないと使いこなせない奴もいる。さらには形を変えるためにオブショントリガーが必要でそれだけで貴重な枠を1つ食ってしまうけど使い手によってはイルガーの自爆モードすら両断出来る総合力では間違いなくトップの傑作トリガー。それに加えてトリオンを消費して専用のオブショントリガーを使うことで瞬間的に伸ばすことが出来る。これは凄いやつだと40メートルの射程になつたりするから使い手次第でものすごい驚異になる」

遊真「なるほど、弧月は元々スコープピオンよりも長めで形を変えるのが自由じゃない

のか……ならやっぱスコープオンがいいかなあ」

達也「長さや重さがネックならボクや桐絵がやってみたいに弧月の長さを短めにすることはできるよ。専用のオプションで長さは戻せるからね」

遊真「ふむこれは悩むな」

達也「最後にメガネくんが使ってた『レイガスト』ネ。『レイガスト』はチーフエンジニアの1人が創ったんだけど、当時はシールドの性能が今ほど良くなかったから弾トリガーが無双してた時期に攻撃手だったその人がブチ切れて対弾トリガー用に創った守備的なトリガーで『スコープオン』のようにブレードが変形できるし攻撃力が下がる代わりに耐久値がアップするシールドモードがある」

遊真「ほほう」

修（そんな機能があったのか……）

達也「でもブレードの中では1番重たいし基本的に攻撃手は攻めがメインだから攻撃力がほかより劣る『レイガスト』はあまり人気がない。けど『レイガスト』も使い方次第では強いトリガーだと思うよ。ブレードを受けれると言う面ならシールドより固いから右手に『弧月』、左手に『レイガスト』で攻防一体の型を持つてる人も攻撃手ランク4位にいるし、使い方特殊過ぎてあんま宛にならないけどレイジさんなんか『レイガスト』使ってる」

遊真「ほう、レイジさんか」

達也「ランク4位の攻撃手もそのうち戦えると思うよ」

遊真「それは楽しみだ」

達也「ではブレード専用のオプシヨントリガーについて解説しようか。まずは『弧月』専用のオプシヨントリガーでさつきも説明した伸びるやつネ。名前は『旋空』。で、遊真くんが前に戦った槍使ってたやつが穂先を変形させたやつ、あれが『幻踊』と言つて弧月を変形させられるやつ」

遊真「あの槍『弧月』だったんだ」

達也「どうやらブレードを短くすることでブレード精製時のトリオンの消費を抑えるために槍型にしてるみたいだネ」

遊真「そういう改造もできるのか」

達也「で、お次は『レイガスト』専用のオプシヨントリガー『スラスト』。これはレイガストを起点に名前の通り加速することが出来るトリガーだ。レイジさんはこのスラストを利用して『ブースト筋肉パンチ』で近接戦闘を行う」

修「ブ、ブースト筋肉パンチ……ですか？」

達也「そ、だからあんまり宛にならないって言つたろ？」

修「え、ええ」

達也「さあブレード専用のオプショントリガーの解説も終わったところで今回の大本命の銃手用トリガーについて解説していこう」

遊真「……………大本命？」

達也「そう！遊真くんの『黒トリガー』の『印同士を掛け合わせる』能力にドンピシャのトリガーなんだよ」

遊真「なるほど」

達也「銃手用トリガーは全部で4種類あつて、これまたそれぞれ特色があつて複雑なのネ」

遊真「ふむふむ」

達也「特別な効果はないけどその分威力が高い通常弾『アステロイド』、爆発して広い範囲を攻撃できるトリオン兵以外には有効打になりにくい炸裂弾『メテオラ』、弾道を設定して好きなコースを飛ばせるけど威力は低めの変化弾『バイパー』、視覚やトリオンに反応して敵を追尾するけど威力はさほど高くない誘導弾『ハウンド』、その4種類にオプションを絡めて戦う訳ネ」

遊真「なるほど、確かにおれの『黒トリガー』と相性が良さそうだ」

達也「雨取さんにこの銃手用トリガーを勧めたのは、雨取さんレベルのトリオン量だと一方的に相手をシールドごと削れるからトリオン兵なんて一瞬で片付くわけ」

千佳「だから……」

達也「で、ここからが遊真くんをぜひ覚えて置いてもらいたい」

遊真「ふむ」

達也「銃手用トリガーには『合成弾』というものがあって、主に使い手がいるのは『トマホーク』、『ギムレット』、『サラマンダー』、『ホーネット』、『コブラ』の5つ。『トマホーク』は『バイパー』と『メテオラ』を合成して作る合成弾で『バイパー』の変態軌道から着弾点で爆発するから命中率が高く、敵の近くで爆発されるから殺傷力も高くなる。『ギムレット』は『アステロイド』2つを合成して作る合成弾でシールドでは恐らく雨取さんレベルでないと防げない程威力がある。『サラマンダー』は『ハウンド』と『メテオラ』を合成して作る合成弾で『バイパー』は扱いが難しいから『ハウンド』を入れてる人が多くて『バイパー』の代わりに『ハウンド』の効果をもった『メテオラ』だと思ってくれたらいい。『ホーネット』は『ハウンド』2つを合成して作る合成弾で主に追尾性能が強化されて『ハウンド』では追い切れない所でも追尾することができる。相手を削りたい時や誘導したい時に有効だネ。最後に『コブラ』は『バイパー』と『アステロイド』を合成して作る合成弾で威力の低い『バイパー』の弱点を補う合成弾だ。ただし、合成弾を作るのは難しくてセンスがないと作る時間が長くなる。合成弾を作っている間はシールドとか別のトリガーを使えないから大きな隙を晒すことになってしまう

というデメリットもある」

遊真「なるほど、おれの『黒トリガー』ならその弱点が無くなるのか」

達也「その通りだ。あと1つ補足するなら先程言った合成弾は基本的に射手が使う。何故なら銃手だと1つの銃で通常2種類の弾丸を使い分けることができるところが1つの合成弾しか撃てない銃になってしまう。だから基本的に射手達しか使わないわけだ。まあ僕は例外的に使ってるけど」

遊真「そう言えば達也さんはどんなトリガー構成にしてるんだ？」

達也「ボクは射手ランク1位の戦闘スタイルと銃手ランク1位の人とかのスタイルをそれぞれ尖らせて使ってたりする。雨取さんなんかには射手ランク1位の人のスタイルをできるようにもなってもらいたい。どんなスタイルかは後でレイジさんとログを見ることができることをオススメする」

千佳「わかりました」

達也「……つと、話が逸れてしまったネ……ボクのトリガー構成は1人で部隊を完結させる事だ。攻撃力、火力、防御力、射程など複数人で補うところを1人でできるそうにする。その為に銃のモデルによるちよつとした補正がかなり大きくてネ。ボクはメインに『ギムレット・拳銃(改)』、狙撃手用トリガーの『イーグレット(改)』、『シールド』、説明は後でするけど『エスクード』、サブに『ホーネット・突撃銃(改)』、『弧月

(改)、『シールド』、これも後で解説するけど『バググワーム』。これでボーダにおける全ての距離で戦えるようにしてる」

遊真「なるほど、1つの銃で複数の弾をセットする余裕が無いから合成弾にしてるんだな」

達也「そういうこと。更にいえばボクの『ギムレット』は銃のモデルを『トンプソン・コンテナー』というこの世界に実在する銃がモデルでネ。『トンプソン・コンテナー』は弾を1発しか装填できない代わりに拳銃でライフル並の威力を持つてる銃なんだ。だから『ギムレット』を1発撃つ事にリロードが必要だが、1発で相手のシールドごと撃ち抜ける火力がある」

遊真「まさしくいちげきひっさつだな」

達也「さて、そろそろオプシヨントリガーの解説に行こう。君たちが使うであろうオプシヨントリガーは幾つかあって、まずはB級隊員全員が装備している『シールド』と『バググワーム』。『シールド』は説明省くけど『バググワーム』は起動してる間リーダーに映らなくすることが出来る」

遊真「狙撃手には必須だな」

修「どうしてだ？」

遊真「そりゃあ狙撃手は見つかるかと近寄られるだろ？近寄られたら狙撃手はどうしよ

うもないからな」

修 「なるほど……………」

達也 「次はA級3位が使っている姿を消すトリガー『カメレオン』。だが、姿を消すと言つても『バッグワーム』と同時に使えないからリーダーには映るし、解除しないとトリガーでの攻撃できないというデメリットもある。次は『スパイダー』、これはまあ糸だな。線をいくつも作つて罠にしたり、身軽なやつ足場にしたりできる。さつき説明するつていつてた『エスクード』、『エスクード』は壁や地面などの触れてるところに壁を作りだすバリケードトリガーだ。ただしトリオンの消費が大きいから3人の中なら雨取さんが使うべきだろうネ。それから『ダミービーコン』、これは設置するとそこに自分がいるかのようレーダーに映る罠のトリガー。あとは銃手専用の撃つたところをマーキングする『スタアメーカー』や、視線の先数十メートルに瞬間移動する『テレポーター』や、ジャンプ台トリガーの『グラスホッパー』がある」

遊真 「『グラスホッパー』はおれと相性が良さそうだな」

達也 「その通り。それを踏まえてボクは遊真くんは2種類のトリガー構成を勧める」

遊真 「2種類？」

達也 「メインに『スコープオン』、『グラスホッパー』、『シールド』、『スパイダー』、サブに『スコープオン』、『エスクード』、『シールド』、『バッグワーム』」

遊真「『エスクード』は使うならチカじやなかったの？」

達也「『エスクード』はただ防御のためのトリガーじゃないからね。迅だつてノーマルトリガー使う時は遊真くんと同じトリオン量だけど普通に『エスクード』使つて罠とか作つてるし、『エスクード』はせりだすようにして出てくるからそれを利用して大ジャンプしたりと色々使い道があるんだよ」

遊真「なるほど」

達也「2つ目はメインに桐絵仕様の『弧月（改）』、『旋空』、『シールド』『グラスホップ』『サブに『スコープピオン』、『スパイダー』、『シールド』、『バツグワーム』」

遊真「小南先輩しようつてどういう意味？」

達也「昔の桐絵は弧月を短めにカスタマイズして今の『双月』二刀流のスタイルと同じ『弧月』二刀流に旋空を交えたスタイルだったんだ」

遊真「なるほど、スピード攻撃手の小南先輩が使つてたんなら問題なく使えそうだな。でもおれのはもう片方『スコープピオン』なのはなんで？」

達也「それは遊真くんは今のボーダー隊員にはない思考の柔軟性があるからスコープオンの使い方がとても特殊的に使えるつてのがサイドエフェクトで見えたから」

遊真「ふむ、それはすごいきたいされてますな」

達也「当然だよ。君たちにはぜひとも遠征部隊に入ってもらいたいからネ」

千佳「あ、あの！わたしのトリガー構成は……………」

達也「ボクが現時点で考えてるのはメインに狙撃用トリガーの『アイビス』、『アステロイド』、『シールド』、『メテオラ』、サブに『ハウンド』、『アステロイド』、『シールド』、『バググワーム』で状況に応じて『メテオラ』と『エスクード』入れ替えたりつてとこかなあ」

千佳「は、はい！ありがとうございます」

達也「いえいえ、今更ながら昨日はきついこと言っちゃつてごめんネ」

千佳「だ、大丈夫……………」

達也「うん、ならよかった……………では最後にメガネくんだけど……………メガネくんさ、工作兵にならない？」

修「とらっぱ……………ですか？」

達也「そ、この先迅に見てもらった感じだとボクが動けば鬼怒田さんが雨取さんの膨大なトリオンを貯めて必要な時に別の人が使えるトリガーを開発してもらえるっぽいからそれができればトリオンの消費が激しい工作兵もこなせそうなんだよ」

修「あ、あの！とらっぱ……………何をされるんですか？」

達也「その名の通り戦場に罠を張りまくる。ワープやら攻撃用の罠やら色々」

修「……………はあ……………？」

達也「A級2位の冬島隊は隊長の冬島さんが工作兵でネ。実質戦闘員は狙撃手1位の子だけなんだけど、狙撃手1人でA級2位になれるほど工作兵つてのは重要になるポジションなわけ。だから頭を使えるメガネくんにはピッタリだと思って」

修「なるほど……」

達也「ただしめっちゃムズいから宇佐美さんにピシバシ鍛えてもらってネ」

修「なんで宇佐美先輩なんですか？」

達也「そりゃあオペレーターとも連携するポジションでオペレーターの作業に近いものがあるからだよ」

修「……なるほど……ありがとうございます！」

達也「では修くんが工作兵になる前提でのトリガー構成を発表します。メインが工作兵専用トリガー『スイツチボックス』、『レイガスト』、『スパイダー』、鬼怒田さんが配達予定の『新トリガー』、サブに『バッグワームタグ』、『レイガスト』を装備してるのは単純にメガネくんのシールドよりも『レイガスト』の方が固いし、万が一見つかったもあ
る程度対処できると思って」

修「はい！ありがとうございます！」

達也「さて大まかなスタイルを決めたところで今日から3週間みっちりスタイルを極めて行ってもらいましょうか」

遊真・千佳・修 「はい！」

空閑遊真②

1月8日

ボーダー隊員正式入隊日

遊真「さあ、いよいよスタートだ」

修「ふー、なんだか緊張してきた」

遊真「なんでだよオサムはもう入隊してるじゃん」

修「よし……確認するぞ。C級隊員の空閑と千佳はB級を目指す」

遊真「おれたちがB級に上がったたら3人で隊を組んでA級を目指す」

修「A級になったら遠征部隊の選抜試験を受けて……」

千佳「近界民の世界にさらわれた兄さんと友達を探しに行く！」

修「……よし！今日がその第1歩だ……！！」

それからしばらくして入隊式が始まって滞りなく進み、本部長挨拶が始まった

忍田「ボーダー本部長忍田真史だ。君たちの入隊を歓迎する。君たちは本日C級隊員……つまり訓練生として入隊するが三門市の、そして人類の未来は君たちの双肩に掛かっている。日々研鑽し正隊員を目指して欲しい。君たちと共に戦える日を待っている。私からは以上だ、この先の説明は嵐山隊に一任する」

忍田本部長の挨拶が終わり嵐山隊に一任されたことで嵐山隊を知るC級隊員達はざわめく

「嵐山隊………本物だ！」

「嵐山さん！」

遊真「おーあいかかわらず人気だなーアラシヤマ」

甲田「あーあー喜んじやって………素人は簡単でいいねえ」

遊真「………?なあ、それどういう意味？」

丙「なんだこいつ」

早乙女「頭、白っ」

甲田「無知な人間は踊らされ易いって意味さ。嵐山隊は宣伝用に『顔』で選ばれたやつらだから実際の實力は大したことないマスコット隊なんだよ」

遊真「？」

甲田「ボーダーの裏事情を知ってる人間にとってはこんなの常識。知らなくてもちや

んと見てれば見抜けるしな」

遊真「……………こいつら本気か……………？ウソは言っていないっぽいけど」ボソツ

レプリカ『無知ゆえに踊らされている可能性があるな』

嵐山「さて、これからオリエンテーションを始めるが、まずはポジションごとに分かれてもらう。攻撃手と銃手を志望する者はここに残り、狙撃手を志望する者はうちの佐鳥について訓練場に移動してくれ」

修「一人で大丈夫か？千佳」

千佳「うん平気」

佐鳥「はいはい狙撃手組はこっちだよ」

千佳は佐鳥の案内に従って狙撃手専用の訓練場に向かう

嵐山「改めて、攻撃手組と銃手組を担当する、嵐山隊の嵐山准だ。まずは入隊おめでとう、忍田本部長もさつき言ってたが君たちは訓練生だ。B級に昇格して正隊員にならなければ防衛任務には就けない。じゃあどうすれば正隊員になれるのか、最初にそれを説明する。各自自分の左手の甲を見てくれ」

遊真『「1000」……………？』

嵐山「君たちが今起動させているトリガーホルダーには各自が選んだ戦闘用トリガーがひとつだけ入っている。左手の数字は……………君たちがそのトリガーをどれだけ使いこ

なしているかを表す数字だ。その数字を『4000』まであげること、それがB級昇格の条件だ」

遊真「ほう」

空閑遊真　　スコープオン：1000

嵐山「ほとんどの人間は1000ポイントからのスタートだが仮入隊の間に高い素質を認められた者はポイントが上乘せされてスタートする。当然その分即戦力としての期待がかかっている。そのつもりで励んでくれ」

甲田　　ハウンド：2200

丙　　弧月：2100

早乙女　ハウンド：1900

遊真「ははあ……だからなんかえらそうだったのか」

嵐山「ポイントをあげる方法は2つある。週2回の合同訓練でいい結果を残すか、ランク戦でポイントを奪い合うか。まずは訓練の方から体験してもらおう。ついてきてくれ」

木虎「三雲くん」

修「木虎……」

木虎「なんであなたがここにいるの？B級になったんでしょ？」

修 「転属の手続きと空閑の付き添いだよ」

遊真 「おつキトラひさしぶり。おれボーダーに入ったからよろしくな」？

木虎 「……………（こいつが迅さんの言う近界民だったなんて……………でも言われてみれば確かに……………そういう雰囲気はあったかも……………）」

遊真 「おれなるべく早くB級上がりたいたいんだけどさ、なんかいい方法ある？」

木虎 「簡単よ、訓練で全部満点をとってランク戦で勝ち続ければいいわ」

遊真 「なるほど、わかりやすくいいな」

嵐山 「さあ到着だ。まず最初の訓練は……………対近界民戦闘訓練だ。仮装戦闘モードの部屋の中でボーダーの集積データから再現された近界民と戦ってもらう」

「いきなり戦闘訓練……………!?!」

遊真 「ほう」

木虎 「私のときもいきなり『これ』だったわ」

修 「ぼくの時も……………」

木虎 「これで大体わかるのよね。『向いてる』かどうか」

嵐山 「仮入隊の間に体験した者もいると思うが、仮装戦闘モードではトリオン切れない。ケガもしないから思いっきり戦ってくれ」

そう言って嵐山が訓練室壁の小窓に手で合図を送ると仮装戦闘モードの部屋の中に

大型のトリオン兵が現れる

嵐山「今回戦ってもらうのは『初心者レベル』の相手……………君たちも見たことのある大型近界民だ。訓練用に少し小型化してある。攻撃力はないがその分装甲が分厚いぞ。制限時間は一人5分、早く倒すほど評価点は高くなる。自信のある者は高得点を狙って欲しい。説明は以上！各部屋始めてくれ！」

がガガガガがガガガガ

グワン

C級隊員達はほとんどが初めての戦闘で戸惑いながらも近界民と戦う

修「……………」

木虎「初めてなら1分切れればいいほうね。あなたの時は何秒かかったの？三雲くん」

修「いやぼくは……………」

ざわっ

修「……………！」

アナウンス『2号室終了、記録58秒』

「1分切った！」

「すげー……………！」

丙「さすがだな」

甲田「ま、こんなもんだろ」

木虎「58秒、まあまあね」

修（ぼくの時は時間切れで失格……………）

◇ 訓練室管理ルーム ◇

諏訪「今季の新人もパツとしねーな。今の1分切ったやつがトップだろ？」

堤「いやー、一時期の新人が凄すぎただけでしょ。黒江が11秒、木虎が9秒、緑川なんか4秒ですよ？」

◇ 訓練室 ◇

訓練室では遊真に順番が回ってきていた

アナウンス『5号室、用意』

堤「そいつらと比べるのは可哀想だ」

アナウンス『始め!』

遊真はアナウンスと同時に大型近界民を横に回りながら飛び越え、近界民の弱点である眼を切り裂きながら近界民の後ろに着地する

アナウンス『……………れ……………0.6秒……………!!?』

甲田「な……………」

諏訪「なんだ!?!こいつは……………!」

遊真「よし、どんどんいこう」

◆ WORLD TRIGGER ◆

甲田「0.6秒……………!?!」

遊真「今ので満点かな？」

甲田「いやいやいやそんなわけないだろ、まぐれだ！計測機器の故障だ！もう1回やり直せ！」

遊真「ふむもう1回？いいよ」

もう一度やれといちやもんをつけられた遊真は先程と同じ動きをさらに無駄を削り近界民を倒した

アナウンス『記録、0・4秒』

C級三バカ「ちぢんでる!!？」

風間「あれが迅の後輩……なるほど、確かに『使えそう』なやつだ」

菊地原「そうですか？誰だって慣ればあのくらい……」ぶつぶつ

歌川「素人の動きじゃないですね、やっぱ近界民か……」

「おまえすごいな！」

「何者だ!？」

木虎「今すべてが腑に落ちたわ……」

修「……………え？」

木虎「あなたの学校を襲った近界民……倒したのはあいつね？そうでしょ？」

修「うっ……………（もう空閑の正体は本部にバレてる。隠す必要もないか……………）」

「そうだよ」

木虎「!! やつぱり! そういうことだったのね! 三雲くんにあんな真似ができるわけないと思ってたわ!」

修「(なんで嬉しそうなんだ……………?)」

烏丸「修」

修「あ」

木虎「!! か……………か、か、か、烏丸先輩!」

修「達也さんも……………」

烏丸「おう木虎、久しぶりだな」

達也「さつきそこで烏丸くんとあつたから来てみたよ」

烏丸「悪いバイトが長引いた。どんな感じだ?」

修「問題ないです。空閑が目立ってますけど……………」

烏丸「まあ目立つだろうな。今回も嵐山隊が入隊指導の担当か、大変だな」

木虎「いえ! このくらい全然です! 烏丸先輩……………最近ランク戦に顔出されてないですね、お時間あつたらまた稽古つけてください……………!」

烏丸「いやおまええ充分強いだろ。もう俺が教えることなんてないよ」

木虎「そんな……………私なんてまだまだです」

烏丸「ん？　そういやおまえ修と同一年か」

木虎「？　はい、そうですね」

烏丸「じゃあちようど良かった。こいつ俺の弟子なんだ。木虎もいろいろ教えてやってくれ」

木虎「……………!?　弟子……………!?　弟子というとその……………マンツーマンで指導するのな……………?」

烏丸「そうそうそんな感じ。だいたい先は長そうだけだな」

修「すみません……………」

烏丸「さて……………嵐山さんにも挨拶しとくか」

修「あ、嵐山さんはむこうです」

木虎「……………(烏丸先輩の『弟子』……………なんてうらやましい……………!!!)」

◇ 狙撃手専用合同訓練場 ◇

佐鳥「さあ狙撃手志望の諸君、ここがオレたちの訓練場だ」

「広い……………」

「これホントに建物の中……………!?!」

佐鳥「10フロアぶち抜きで奥行360メートル。基地の中で1番でかい部屋だ。キミたちにはここでまず訓練の流れと狙撃手用トリガーの種類を知ってもらおう。えーと今回の狙撃手志望は1、2、3……………全部で7人か」

千佳「あ、あの……………すみません8人です……………」

佐鳥「うおっと！女の子を見逃すとは！マジでゴメン！8人ね！」

少女（ちっちゃ……………小学生？こんな子が戦えんの……………?）

佐鳥「よし！じゃあ正隊員の指示に従って各自訓練をはじめよう！と、その前に正隊員の人達に自己紹介だけして貰おうか」

東「B級東隊隊長の東春秋だ。よろしく」

荒船「B級荒船隊長の荒船哲次……………よろしく」

全員がそれぞれ持ち場でライフルを構えて狙いをつける

千佳「……………あの……………」

東「ん？どうした？」

千佳「撃ったあと……走らなくていいんですか？」

少女「……………？走る？」

東「えーと、今は走らなくていいんだよ」

千佳「そうなんですか、すみません……………」

少女「狙撃手は走らないでしょ。隠れて撃つのが仕事なんだから、謎すぎ」

東（いや……………この子の言ってることは正しい。狙撃手は位置を知られると大きく不利になる。数発ごと狙撃地点を変えるのが基本だ。だから走る。普通はB級に上がってから教えることだが……………この子の師匠は少なくともこの子がB級に上がることを確信してることか……………誰が師匠なんだ……………？）

佐鳥「んじゃ次は狙撃用トリガーの紹介ね。狙撃用トリガーは全部で3つある。みんなが今使ってる『イーグレット』は射程距離を重視した万能タイプ。これ一本で大体OK。軽量級の『ライトニング』は威力は低いいけど弾速が早くて当てやすいチクチク型、重量級の『アイビス』は対大型近界民用に威力を高めたドツカン型。でも弾速は下がってるから当てにくい。まあ百聞は一見にしかず、女の子二人に試し撃ちしてもらおうか。アイビスであの大型近界民の的を狙おう」

千佳「はい」

佐鳥「よし構えて、3……………2……………1……………発射！」

ズドツ

千佳の放った1発は仮装戦闘モードになっていなかった訓練場の壁をぶち抜きボーダー本部の外装に穴を開けた

佐鳥「……………」

千佳「……………」 その……………(´；´)……………ごめんなさい」

◇ 攻撃手・銃手組訓練室 ◇

甲田「……よし、お前の強さがまぐれじゃないことはわかった、合格だ。俺たちと組もうぜ、強者同士が手を組めばより『上』を目指せる」

遊真「おことわりします」

甲田「な……………!?!」

嵐山「三雲さんと組むんだろう?」

遊真「うん、そう」

風間「……なるほどな」

嵐山「風間さん、来てたんですか」

風間「訓練室をひとつ貸せ、嵐山。迅の後輩とやらの実力を確かめたい」

遊真「ほう」

修「あの人は……!?!」

烏丸「A級3位風間隊の隊長だ」

修（A級3位……!!）

嵐山「待つてください風間さん！彼はまだ訓練生ですよ？トリガーだって訓練用だ

！」

遊真「おれはべつにやってもいいよ」

風間「ちがう。そいつじゃない、俺が確かめたいのは……おまえだ、三雲修」

遊真「！」

修「……え!?!」

三雲修

遊真「オサムと……………」

木虎「風間先輩が模擬戦……………!!」

嵐山「いきなり何を言い出すんだ風間さん、また城戸司令の命令か？」

風間「三雲は正隊員だろう？俺と模擬戦をする分にはなんの問題もない」

修「A級3位、風間先輩……………!!」

風間「訓練室に入れ三雲、おまえの実力を見せてもらう」

修（なんでこんな上の人が……………空閑じゃなくてぼくを……………!!? 迅さんが何か関係してるのか……………!?!）

嵐山「無理に受ける必要は無いぞ三雲くん」

烏丸「模擬戦を強制することはできない。イヤなら断れる」

修「……………」（A級隊員……………普通に考えて今のぼくが戦えるような相手じゃない……………そもそもぼくが正隊員になれたのは迅さんと空閑のおこぼれを貰ったからで、ぼく自身の実力じゃない……………けど、遠征部隊に選ばれるにはいざずれ戦わなきゃならない相手、その強さを知っておいた方がいい）受けます、やりましょう。模擬戦」

木虎(『やりましょう』じゃないでしょ本当は弱いくせに……一方的にやられて恥をかいただけよ)

「なんだ?」

「正隊員同士の勝負か?」

時枝「はいはい終わつた人はラウンジで休憩しよう」

「えー」

「見たいのに……」

修(時枝先輩……ありがとうございます)

遊真「俺は見ててもいい?」

嵐山「もちろんだ」

烏丸「今のおまえじゃ勝てないぞ」

修「わかつてます」

烏丸「無理はするなよ」

修「はい!」

諏訪「風間がB級に絡むとは珍しいな」

堤「さっきの白い子の関係ですかね……まあともかく」

アナウンス『模擬戦開始』

修（風間さんの武器はスコープピオン、それも二刀流。ポジションはまちがいなく攻撃手だ。この場合は距離をとって射撃で……）

修は風間の装備から中・遠距離攻撃はないと判断し中距離から一方的に攻撃しようとしてアステロイドを出す

風間「なるほど、レイガストを盾として使う防衛寄りのシューターか」

風間は一瞬で修のスタイルを見抜くと自身の部隊の十八番である姿を消すトリガー、カメレオンを発動し自身の姿を消した

修「……………!?!」

遊真「！きえた！」

達也「アレがこの前説明したA級3位部隊がよく使ってる姿を消す隠密トリガー、カメレオンだ」

修は姿を消した風間に対して動揺からロクに動けず自身の左側に姿を現した風間に胸のトリオン供給機関をスコープピオンですれ違いざまに貫かれる

アナウンス『トリオン供給機関破壊、三雲ダウン』

菊地原「バカだなー、訓練室ならトリオン切れしないから隠密トリガーも使い放題。勝負になんないよ」

風間「立て三雲、まだ小手調べだぞ」

ブウン

風間は再びカメレオンを使って姿を消す

修「……………!! (また消えた……………!?) シ……………盾シールドモード!!」

レイガストをシールドモードで奇襲に備えようとするが修の反応速度では対応できず後ろから首を切り裂かれる

修「!!」

アナウンズ『伝達系切断、三雲ダウン』

修「が……………!! (風間先輩を捉えきれない)」

それから3度、修は風間の動きを捉える前に切り裂かれてダウンする

遊真「姿を消すトリガーか……………、ふーむ……………おれならどう戦うかな……………」

烏丸 (隠密トリガーは確かに強力だが無敵って訳じゃないぞ。それに気付けるか? 修)

修「透明になるトリガーは無敵じゃない、それはわかっている。もし本当に無敵なら他の隊員もみんなそれを使ってるはず、でも実際そうじゃないってことは透明化トリガーには何か危険性があるってことだ。そういうえば風間先輩は攻撃の瞬間は姿を現してる。もしかして……………姿を消してる時は他のトリガーを使えないのか……………? だとすれば姿を消してる時が逆に一番脆い!」アステロイド!!」

修はカメレオンの弱点を看破するとアステロイドを9×9×9の27個に分割し、広範囲に放つが1つも風間を捉えられない

風間「正解だ」

修「!!」

風間は修の後ろから姿を現す

風間「だが、その手には慣れてる」

風間はそのままスコープオン2本を修の胸に突き刺し、トリオン供給機関を破壊する

アナウンス『三雲ダウン』

修「くそっ……………!!（戦闘経験が違いすぎる……………!どうすれば風間先輩の透明化を破れる……………?考えろ、もっと考えるんだ）」

菊地原「普ふっつ通つすぎ。光るものがないよね、なんであんなやつに絡んでるんだろ風間さん」ぶうぶう

木虎「烏丸先輩、もうやめさせてください。見るに耐えません」

遊真「キトラ」

木虎「三雲くんがA級と戦うなんて早すぎます、勝ち目はゼロです」

烏丸「なんだ修の心配か？」

木虎「なっ……………ちがいます!」

遊真「オサムだって別に今スグ勝てるとは思ってないだろ。先のこと考えて経験を積んでんだよ」

木虎「『ダメで元々』『負けても経験』いかにも三流の考えそうなことね。勝つつもりでやらなきや経験は積めないわ」

遊真「ほう？」

烏丸「おまえいいこと言うな」

木虎「いえ、それほどでも……」コホン

達也「まあ見てなって、もうちよつとで風間さんがメガネくんの効果抜群なこと言つて実力引き出してくれるから」

遊真「でも、終わったつぽいよ」

烏丸「……」

達也「なんだ烏丸くん？そんな眼で見るんじゃない。ここからだよ」

風間「……もういい、ここまでだ。時間とらせたな」

修「ありがとう、ごさいます、た……」（結局20回以上負けてかすり傷も与えられなかった……これがA級の実力……！）

風間「（これといって特徴のないB級下位といった印象だな。本部の話ではこいつが近界民を手懐けたという話だったが……『迅の後輩』ということで少々期待しすぎた

か) 迅め……………やはり理解できない……………『黒^{ブラック}トリガー』を手放すほどのことなのか……………」

修「え……………!? 『黒トリガー』を……………!?」

風間「……………? なんだ知らないのか? 迅は近界^{あい}民^つをボーダーに入隊させるのと引き換えに自分の『黒トリガー』を本部に献上した。おまえたちの部隊^{チーム}を本部のランク戦に参加させるためだそうだ。全く理解できない」

修「(迅さんが……………ぼくたちのために『黒トリガー』を……………!?……………(風間先輩、すみません、もうひと勝負、お願いします」

風間「ほう……………」

◆ WORLD TRIGGER ◆

遊真「あれ? まだやるみたいだぞ?」

達也「な？だから言ったでしょ？」

木虎「なんで……?!もう充分負けたでしょ……?!」

遊真「さあ……なんかしゃべってたっぽいけどな」

諏訪「なんだあのメガネまだやる気か、もうあきらめて引つ込めよ。俺は白チビの方が見てーんだよ」

堤「そうですね？オレはあのメガネくんもうちよつと見てたいですけど。なんだか………雰囲気が変わった気がする」

修（20戦以上戦ってぼくの攻撃は1度も風間先輩に届いてない。相手はA級3位部隊の隊長、はつきりいって勝てる気がしない………でも迅さんのあの話を聞いてしまったら、このままで終わるわけにはいかないだろ………!贅沢なことは言わない、この最後の1戦、絶対1発当ててやる。ただそのことだけに集中しろ、知恵を絞れ、烏丸先輩に教わったことを思い出せ………!）

烏丸「まず、一口に銃手ガンナーと言っても色々なタイプが居る。中距離からバリバリ連射する突撃銃型、割と近距離でドカドカ撃つ拳銃型ハンドガン、そして銃型トリガーシューターを使わずに弾丸を飛ばすタイプ、このタイプは他のとは分けて射手と呼ぶ」

修「じゃあぼくは射手タイプですね」

烏丸「そうなるな、射手タイプの特長は弾丸の性能を細かくいじれるところだ。『威力』『射程』『弾速』この3つを毎回の攻撃で自由に調節できる。小さく割ってバラ撒くのも、1個丸ごとぶっ放すのも自由だ。その分攻撃に手間がかかるのと命中制度がやや荒いのが欠点。使いこなすにはセンスが必要だな」

修「センス……………」

烏丸「逆に突撃銃や拳銃の銃手タイプでは予め設定した2種類の弾しか撃てない。そのかわり取り扱いがシンプルで訓練するほど命中制度が上がる。さらに銃型トリガーには弾丸の射程を20%ほど延ばす補助機能がある。安定・堅実な戦いをしたいならこつちだ」

修「なんだか話を聞いてるとぼくには射手より銃手の方がいいような……………センスが

必要とか言われると正直自信が無いです……………」

烏丸「俺の考えは逆だ。銃手タイプは安定してる分トリオン能力の差がモロに出る。トリオンが弱いおまえは先に進むほど不利になるぞ。おまえは弱いけど馬鹿じゃない。発想と工夫を反映できる射手の方が合ってると思う」

修「……………はい！」

烏丸「銃手・射手は考えながら戦うポジションだ。自分が持つてるもの、相手が持つてるもの、お互いの狙い、戦場の条件、仲間の位置、あらゆる要素を使って相手の動きをコントロールするんだ」

修（透明化を封じる手は思いついた。問題はその先……………どうやって風間先輩に攻撃を当てるかだ。『ぼくが持つてるもの』を確認しろ）

『アステロイド』：射撃用トリガー、威力・射程・弾速の調節ができる

『シールド』：防御用トリガー、防御範囲を小さくすればするほど耐久力が上がる

『レイガスト』：接近戦用トリガー、ブレード部分を変形できる、『盾モード』で防御にも使える

『スラスタ』：レイガスト専用のオプショントリガー、トリオンを噴出してブレードを加速させる

修（ぼくの武器はこの4つ、この4つを使って風間先輩に一撃食らわせる……!）

アナウンサー『ラスト1戦、開始!』

風間は開始の合図とともにカメレオンを起動し姿を消す

遊真「さあどうする? オサム」

菊地原「ムリムリ、また瞬殺で終わりだよ」

修（行くぞ、相手の動きを読み切れ）

堤「……………!?!」

諏訪「なんだこりゃあ!?!」

修が展開したアステロイドのトリオンキューブは細かい粒となって部屋にばら撒かれた

堤「これは……………超スローの散弾……………!?!」

アステロイド

威力：70

射程：29・9

弾速：0・1

風間「……………」

嵐山「……そうか！訓練室ならトリオン切れはない、弾丸で訓練室を埋め尽くす作戦か……………」

烏丸「風間さんは透明のままじゃ弾丸を防御できない、考えたな修。けど隠密トリガーなしでも風間さんは強いぞ」

風間はカメレオンを解除し、邪魔なアステロイドの弾丸をスコピオンで切り捨てながら修に迫る

修（来た!!!チャンスは一瞬……………!）

修は前面に構えたレイガストの影でアステロイドを分割なしで展開する

木虎（弾丸の壁で動きを制限して大玉で迎え撃つつもり……………!?!）

修（この一撃が勝負だ……………!!）

風間（やりたいことはわかるが、そう簡単には当たらないぞ。視線で狙いが丸わかりだ）

修 『『スラスタ』 ON!!』

修がとった行動はアステロイドの射出ではなく前面のレイガストでのスラスタによる突進だった

風間 「!?」

諏訪 「シールド突撃!？」

修の突進は風間の不意をつき、風間はスコープオンでシールドモードのレイガストを受け止めるがそのまま押される

風間 「シールド!!」

しかし風間の背面にはアステロイドの弾丸が無数にあるため背面にシールドを張らざるを得ず両方のトリガーを使っているため反撃できず、壁際に追い込まれる

諏訪 「うおっ壁まで押し込んだ!!」

堤 「いや!風間さんの間合いですよ!」

壁まで押し込まれたことで背面にシールドを張る必要が無くなった風間がスコープオンで反撃しようとするがそれより早く修がレイガストのシールドを広げて風間を包む

嵐山 (盾^{レイガスト}モードで閉じ込めた……………!?)

修は広げたレイガストで風間の反撃を防ぐと、一部分のみ円形に穴を開けそこにアス

テロイドを丸々1発叩き込む

風間「!?」

修「アステロイド」

風間（ここでゼロ距離射撃か……………!!）

ドンッ

菊地原「!!」

遊真「決まった」

◆WORLD TRIGGER◆

菊地原「まさか……………!!」

諏訪「やったんじゃねーか!? これ!!」

アステロイドによる爆煙が晴れるとそこには首をスコープオンで貫かれた修がいた
アナウンス『伝達系切斷、三雲ダウン』

諏訪「くあーっ!! マジかよ!!」

嵐山（読み合いでは三雲くんの勝ちだったが……………）

修「……………（作戦はこれ以上無いくらい上手くいったのに……………）くそっ……………!!」

木虎「……………惜しかったわね」

達也・遊真「……………いや」

遊真「そうでもないよ」

修のレイガストが消えレイガストで封じていた空間の煙が晴れるとそこには左肩から大きく削られた風間が居た

堤「!!」

アナウンス『トリオン漏出過多、風間ダウン』

修「えっ……………それじゃあ……………」

風間「最後は相打ち……………引き分けだ」

嵐山「……………!!」

アナウンス『模擬戦終了』

【模擬戦結果】

風間 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 △

三雲 ^{???}? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

三雲修：0勝 24敗 1引き分け

木虎「風間さんと引き分けるなんて……………!」

烏丸「勝ってないけど大金屋だな」

達也「だから言つたろ?」

空閑「オサムやつたじゃん」

修「やつた……………のかな?」

遊真と修は歓喜のハイタッチをする

烏丸「うちの弟子が世話になりました」

風間「烏丸……………そうか……………おまえの弟子か。最後の戦法はおまえの入れ知恵か

?」

烏丸「いえ、俺が教えたのは基礎のトリオン分割と射撃だけです。あとは全部あいつ

自身のアイデアですよ」

達也「風間くんが迅の話をもがねくんにしてくれたおかげだよ。彼は……なんて言うか……人の為なら頑張れるタイプの珍しいやつなんで」

風間「なるほど、おまえはこの結末を知ってたという訳か」

達也「まあ……ネ」

烏丸「どうでした？うちの三雲は」

修「……………」

風間「……………はつきりいつて弱いな。トリオンも身体能力もギリギリのレベルだ。

迅が推すほどの素質は感じない」

修「……………」

風間「……………だが、自分の弱さをよく自覚していてそれゆえの発想と相手を読む頭がある。知恵と工夫を使う戦い方は、俺は嫌いじゃない」

修「……………」

風間「邪魔したな三雲」

遊真「あれ？結局おれとは勝負してくれないの？」

風間「……勝負？おまえは訓練生だろう。勝負したければこちらまで上がって来い」

風間はそれだけを言い残し部下の二人を連れて訓練室をでて行った

遊真「A級3位のかざま先輩か……上に行く楽しみが増えたな」

菊地原「あんなのと引き分けちゃダメですよ。ぼくなら100回戦って100回勝てる、あんなパツとしないメガネ」

歌川「そうか？遅い弾で空間を埋めるとか良い手だったと思うが……………」

菊地原「あんなのトリオン無限ルールだからできたことでしょ。最後の太玉だつて1

回両防御して、それから刺し返せばよかつたんですよ」

風間「そうだな、張り合つてカウンターを狙つた俺の負けだ」

菊地原「もう、すっかりしてくださいよ風間さん」

歌川「おまえはなんでそんなにえらそうなんだ……………」

風間（三雲には才能も怖さも感じなかつたが…………最後の1回だけは完全に読みを通された。それまでの20戦で俺の動きが掴まれていたということか。それに人の為なら頑張れるタイプ…………『持たざる者』が知恵と工夫でどこまで行けるか、この先が楽しみ

だな)

烏丸「ラストの1戦はいい読みだったな」

修「烏丸先輩の指導のおかげです」

烏丸「けど、1回読み勝つたために20回負けてたら普通はアウトだぞ」
修「は、はい」

木虎「そうよ！調子に乗らない事ね！」

修（こいつはなんで嬉しそうなんだ……………？）

嵐山「三雲くん、大変だ。きみたちのチームメイトが……………！」

修「え……………？」

◇ 狙撃手合同訓練場 ◇

一方、アイビスで本部に穴を開けた千佳は申し訳なさから土下座で佐鳥達に謝罪して
いた

千佳「ほんとうにごめんなさい壊した壁は一生かけてでも弁償しますので……………」
佐鳥「なっ、え!?!こちらこそ!」

東「頭上げなよ、大丈夫。訓練中の事故だ。責任は現場監督の佐鳥が取る」

佐鳥「ひええ!?!東さん!?!」

東「きみは本部の隊員じゃないな。トリオンの測定記録がない。その肩のエンブレム

は……………」

千佳「……………玉狛支部の雨取千佳です……………」

東（なるほど……………玉狛ということはこのこの師匠は多分レイジか）

千佳「あの……………私のせいで玉狛の先輩が怒られたりとかは……………」

東「しないしない。責任は全て佐鳥にある」？

佐鳥「ですよね！やっぱり！」

鬼怒田「なんだこれは！一体どうなつとる!?なぜ穴が開いとるんだ!?誰がやった!?!」

千佳「……………!」

佐鳥「鬼怒田開発室長、訓練中にちよつとした事故が起きました。責任は全て現場監

督のボクにあります」？

鬼怒田「その通りだ!!」ドシツ

佐鳥「痛つ……………くない!」

鬼怒田「防衛隊員が基地を壊してどうする!?!」

佐鳥「あれえ、これが正解じゃないの?」

千佳「すみません!わたしがカベを壊しました!」

鬼怒田「何……………?東くん、本当かね!?!」

東「それは事実です、彼女がアイビスで開けました。玉狛支部の雨取隊員です」

鬼怒田「なんだと……!!?玉狛の……!!?」

嵐山から報告を受けた修と遊真は達也と共に狙撃手合同訓練場に走ってきた

修「千佳!!……!!?」

そこで3人が見たものは

鬼怒田「そうかそうか千佳ちゃんと言うのか、すごいトリオンの才能だねえ。ご両親に感謝しなきゃいかんよ」??

千佳「?、?は、はい」

鬼怒田「壁のことは気にせんでいい。あの壁もトリオンでできてるから簡単に直せる」??

鬼怒田開発室長が千佳を孫のように愛でている所だった

修「鬼怒田開発室長!?!これは一体……!!?」

佐鳥「鬼怒田さんはロリコンだった……!!?」

東「別れて暮らしてる娘さんを思い出すんだろ。たしか今中学一年生のハズだ」

千佳「あつ修くん、遊真くん」

鬼怒田「む……!!?」

修「千佳!」

鬼怒田「三雲……………? どうか、玉狛に転属しおったのか。おいこらメガネ! ちゃん
とこの子の面倒を見んか」バンツ!!

修「……………!? はい、すみません」

少女「あんたすごいね! なんてあんなの撃てるの!？」

千佳「わっ」

東(玉狛ってことは迅の後輩……………この子の半端ないトリオン性能を報告しなかった
のは本部で派手にデビューさせるためか……………? 迅や林藤さんが考えそうな事だが
……………)

◇警戒区域◇

迅「よしよし、みんな無事に入隊したか。派手に目立っただろあの3人。サイドエ
フェクト使わなくてもわかる、おれの後輩だからな。今頃きつとウワサになってるぞ

………
けど、あの3人が注目を浴びるのはまだまだこれからだ」

空閑遊真③

空閑遊真

- ・地形踏破訓練：1位
- ・隠密行動訓練：1位
- ・探知追跡訓練：1位
- ・個人ポイント：1100

遊真「ふむ……………これで訓練は一通りやったな。満点だと訓練1つで20点か。前回と今回の戦闘訓練とあわせて+100点、残り2900点。えーとつまり4000点になるのは……………」

時枝「合同訓練は週2回、満点を取り続けた場合19週間くらいで4000点になるね」

遊真「19週間って何日？」

時枝「133日」

遊真「ふーむ……………そんなには待てんなあ。となると…………『ランク戦』で稼ぐことになるわけか」

時枝「ここがC級ランク戦のロビー、ランク戦のやり方を教えるよ。空いてるブースに入ろう」

遊真と時枝は3階にある308号室に入った

時枝「C級ランク戦は基本的に仮想戦場フィールドでの個人戦だ。やり方は簡単、このパネルに武器とポイントが出てるだろう？これが今ランク戦に参加してる隊員。好きな相手を選んで押せば対戦できる。逆に向こうから指名される場合もある。対戦をやめたい時はブースを出ればOKだよ」

遊真「なるべく早くポイントを稼ぎたいときはどうすればいいの？」

時枝「ポイントが高い相手に勝つほど点がたくさんもらえるよ。逆に自分よりポイントが低い相手だと勝ってもあんまり貰えなくて、負けたときはたくさん取られる」

遊真「ふむふむ、なるほどね。俺一人のためにわざわざありがとう、キトラの先輩」

時枝「時枝だよ」

遊真「ありがとう、ときえだ先輩」

甲田「真の強者は危ない橋を渡らない、戦略に沿って勝つべくして勝つ。高ポイント相手に欲をかくのは素人が陥りがちな愚。少量とはいえ弱い相手からでも点が取れることに変わりはない。『取れる相手から獲る』これが『勝つ人間』の基本計画だ」

早乙女「当然の帰結だな」

丙「おつと新しい『贅』^{ニエ}がやってきたようだぜ」

丙がそういうと甲田がスコーピオン1100の相手の対戦を受諾する

甲田「さて……………世界の厳しさってやつを教えに行くかな」

早乙女「おいおい、虐めすぎて新人の心^{ルーキー}を折るなよ。弱者には慈悲が必要だ」

甲田「弱肉強食が世の理……………先のない人間に引導を渡すのも1つのやさしさ、だろ？」

早乙女「やれやれ」

丙「俺たちも次に予約しとこうぜ」

◇◇ 対戦ステージ ◇◇

アナウンス 『対戦ステージ「市街地A」C級ランク戦、開始』
アナウンスと共に甲田と対戦相手の遊真が転送されてくる

遊真 「おっ新3バカ1号」

甲田 「……………!!?おまえは……………!!」

遊真 「そんじやまあ、よろしくおねがいます」

甲田 「」

ドン

バン

ズバン

空閑遊真

スコピオン：1325

遊真 「おおく訓練よりこつちの方が断然早いな！」

レプリカ 『そのようだな、自分のポイントが高くなるほど点を取りにくくはなるが』

遊真「新3バカにもう1周もらつとくか」

レプリカ『絞り取りすぎて心を折るなよ』

新3バカ「二ヒイ——！！」

◇◆大規模侵攻対策会議室◇◆

会議室では城戸を含めた上層部の人間が遊真のC級ランク戦を見ていた

城戸「あれが、空閑の息子か」

林藤「そう、空閑遊真。なかなかの腕だろ」

城戸「……………風間、おまえの目から見てやつはどうだ？」

風間「……………まだC級なので確実なことは言えませんが明らかに戦い慣れた動きです。戦闘用トリガーを使えばおそらくマスターレベル……………8000点^{ポイント}以上の実力はあるでしょう」

忍田「8000……………！！それなら一般のC級と一緒にしたのはまずかつたかもしれない、初めから3000点^{ポイント}くらいにして早めにB級へあげるべきだった。たしか木虎は

3600点ポイントスタートだったろう？」

林藤「そうしたかったけど城戸さんに文句言われそうだったからなー」

城戸「……………やつはなぜ『黒トリガー』を使わない？昇格したければS級になるのが1番早いだろう」

林藤「またまた、あいつが『黒トリガー』使ったら難癖つけて取り上げる気満々のくせに。『入隊は許可したが『黒トリガー』の使用は許可していない』とか言ってる」

城戸「……………先日、訓練場の壁に穴を開けたのも玉狛の新人だそうだな。『雨取千佳』」

林藤「あの子はちよつとトリオンが強すぎてね、いずれ必ず戦力になるから大目に見てやってよ」

城戸「『黒トリガー』の近界民ネイバーにトリオン怪獣モンスター……………そいつらを組ませてどうするつもりだ？」

林藤「別にどうもしやしないよ。城戸さんって俺や迅のこと常に何か企んでると思っ
てないか？チーム組むのも、A級目指すのも、本人たちが決めたことだ。千佳の兄さん
と友達がが近界民にさらわれてて、あの子は2人を取り戻したくて遠征部隊選抜を目指し
てる。遊真ともう1人の隊員チームメイトの修はそれに力を貸してるんだ」

風間「……………なるほど、そういう目的だったか」

城戸「近界民にさらわれた人間を近界民が奪還する、か……………馬鹿げた話だ……………近界には無数の国がある。どの国にさらわれたか判別するのは困難だ。そもそも被害者がまだ生存しているかどうか……………残念だが救出はあまり現実的ではないな」

忍田「だから助けに行くのはやめると？可能性で論じることではないだろう！」

城戸「子供が想像するよりも世界は残酷だという話だ」

林藤「でもまあ何か目標があった方がやる気出るでしょ。救出だろうが復讐だろうが、なあ？蒼也」

風間「……………三輪あたりはそうでしょう。……………自分は別に兄の復讐をしようとは思っていません」

林藤「お？遠征で少し価値観変わった？」

風間「自分は何も今までと変わりません。ボーダーの指令に従って近界民を排除するのみです。三輪は先月の小競り合い以降、何やら悩みこんでる様子ですが……………」

林藤「ありやまどうしたの？」

風間「嵐山に何か言われたようです」

林藤「へえ……………なんだろうな」

迅「どれも遅くなりました。実力派エリートです」

達也「すみません、遅れました」

忍田「よし、揃ったな。では本題に入ろう。今回の議題は近く起こると予測される……近界民の大規模侵攻についてだ」

◇◇C級ランク戦ロビー◇◇

遊真「ふーむ……………」

(玉狛の白頭だ……………！)

(戦闘訓練1秒切りの……………！)

遊真「オサムの話ではこの鉄っぽいのもおカネらしい。だが、鉄のやつよりも紙のやつの方がずっと価値は上だという……………紙なのに……………」

レプリカ『ふむ、見たところ基本的に数字が上がるほどサイズが大きくなっている。金属のままこれ以上いくと重すぎて持ち運びが困難になる。それを避けるため軽い紙で代用しているのではないだろうか』

遊真「ふむ……………いちおう納得できる」？

遊真はそう言うのと近くの自販機に500円玉を入れてジュースを買う
遊真「買い物したらおカネが増える。これも謎だ」

レプリカ『「おつり」だ。細かくなつたんだ』

遊真「あ」

遊真は帰ってきたおつりの十円玉を1つ落としてしまう

遊真「お……………?」

十円玉が転がって行った先にはA級7位の三輪がいた

三輪「我が物顔でうろついているな……………近界民……………!」

遊真「あんたは……………『重くなる弾の人』」

◆ WORLD TRIGGER ◆

遊真「どうも」

三輪は十円玉を拾うと遊真に渡し、自分も自販機でジュース買った

遊真「どうした？元気がないね、前はいきなりドカドカ撃ってきたのに」

三輪「本部がおまえの入隊を認めた以上……おまえを殺すのは規則違反だ」

遊真「ほう……？」

米屋「おつ！黒トリの白チビじゃん！」

陽太郎「がんばつとるかね？しよくん」

米屋「そーいやボーダー入ったんだっけか！」

遊真『『槍の人』とようたろう……う？なんで一緒にいんの？』

米屋「クソガキ様のお守りしてんだよ」

陽太郎「陽介はしおりちゃんのイトコなのだ」

遊真「ほう、しおりちゃんの。玉狛と本部は思ったより仲が悪くないのか……？」

陽太郎「しおりちゃんにとりまるは1年ちよつと前まで本部にいたからな」

米屋「今もたまに本部に来てるし」

遊真「へえ、オサムと似たような感じか」

米屋「つーか秀次おまえなんか会議に呼ばれてなかったっけ？」

三輪「……風間さんに体調不良で欠席すると言つてある」

遊真「ふむ、体の調子が悪いのか」

米屋「違う違う、近界民をぶつ殺すのは当然だと思つてたのに最近周りが逆のこと言
い出したから混乱してんだよ」

遊真「あーそつかお姉さんが近界民に殺されてるんだっけ」

米屋「あつ」

三輪「……………!!なぜそれを……………!?!」

米屋「……………」

遊真「仇討ちするなら力貸そうか」

三輪「……………!?!なに……………!?!」

遊真「おれの相棒が詳しく調べればお姉さんを殺したのがどこの国のトリオン兵か
けつこう絞れるかもよ? どうせやるなら本気でやったほうがいいだろ」

三輪「……………、……………、……………ふざけるな……………」

!お前の力は借りない……………!近界民は全て敵だ……………!」

米屋「おい秀次、どこ行くんだ?」

三輪「……………会議に出る」

米屋「やれやれ、マジメなやつはつらいねえ……………あ!そーいやオレおまえと勝負
する約束だったよな!ヒマならいつちよバトろうぜ!」

遊真「正隊員と訓練生って戦えるんだっけ？かざま先輩は戦ってくれなかったけど」
 米屋「ポイントが動くランク戦は無理だけどフリーの練習試合ならできるぜ。風間さんはプライド高いからガチのランク戦でやりたいんだろ。オレは楽しけりやなんでもいーんだ、ほれほれ対戦ブース行くぞ」

遊真「ほう」

遊真達がランク戦ロビーに行くのとたくさんさんのC級がメインモニターである試合を観戦していた

米屋「なんだあ？妙に観客ギャラリー多いな」

緑川：○○○○○○○○○○

三雲：???

???

???

???

???

???

????

??

遊真「『三雲』……………」

アナウンス『10本勝負終了、10対0、勝者緑川』

A級4位 草壁隊

攻撃手 緑川駿(14)

陽太郎「あっおさむ!!負けた!!」

米屋「いつぞやのメガネボーイじゃん。緑川とランク戦か？」

遊真「ミドリカワ……………」

修（全敗か……………最後まで動きが読めなかった……………）

陽太郎「こら、おさむ！負けてしまうとはなにごとか！」

遊真「なんか目立ってんなー」

修「陽太郎……………!?!空閑……………!」

緑川「おつかれメガネくん、実力は大体わかったからもういいや。帰っていいよ」

陽太郎「」

「なんか全然だったなああのメガネ。動け無さすぎでしょ」

「期待はずれ」

「年下の緑川に完全に舐められてるし」

「風間さんと引き分けたってのもガセだなこりゃ」

陽太郎「おさむのカタキはおれがとる！いくぞ！らいじん丸！」

陽太郎が雷神丸に指示を出すのが雷神丸は動かない

陽太郎「らいじん丸—— ツ!!」

遊真「……………なあ、この見物人集めたのおまえか？」

緑川「……………違うよ。風間さんと引き分けたっていうウワサに寄ってきたんだろ、

オレは何もしてないよ」

遊真「へえ……………おまえつまんないウソつくね」

緑川「……………!!」

遊真「おれとも勝負しようぜミドリカワ。もしおまえが勝てたら……………おれの点を全部やる。1508点」

緑川・修「な……………?!」

米屋「あれ?オレとの勝負は?」

緑川「なんだこいつ……………こいつも玉狛か……………?」1500ってC級じゃん。訓練用のトリガーでオレと戦うつもり?」

遊真「うん、おまえ相手なら充分だろ」

緑川「……………!!」

煽られた緑川は2階から飛び降り、遊真の前に降り立つ

緑川「……………いいよ、やろうよ。そっちが勝ったら何がほしいの?3000点^{ポイント}?5000点^{ポイント}?」

遊真「点はいらない。そのかわりおれが勝ったら『先輩』と呼べ」

緑川「(『先輩』……………?年上だったのか。チビだから年下かと思つた)……………OK、万が一オレが負けたらいくらでもあんたを『先輩』って呼んであげるよ」

遊真「いや、おれじゃない。ウチの隊長を『先輩』と呼んでもらう」

陽太郎「お……………!!意外とゆうまおこってる!!」

◆ WORLD TRIGGER ◆

修「お、おい空閑……………」

陽太郎「こいつはおもしろくなってきたぜ」

米屋「くっそー、白チビはオレが先約だったのにー」

修「あ……………三輪隊の……………」

米屋「米屋陽介、陽介でいーよメガネボーイ」

修「メガ……………!!」

陽太郎「陽介はしおりちゃんのイトコなのだ」？

修「えっ……………宇佐美先輩の!!」

陽太郎「そしておれの『陽』なかまでもある？」
修「『陽』仲間……!!？」

◇ランク戦ブース101号室◇

緑川『操作パネルの一番下に黒い四角があるだろ、それを押せば正隊員とも対戦できる。203号室がオレだよ』

遊真（9110点……）

緑川『もつとも正隊員の方が拒否つてたら戦えないし、戦ってもポイントは取れない。………だからオレがあんたに勝っても得しないんだよね。かわりにメガネくんからもらおうか1508点』

遊真「それでいいよ。そっちが勝つたらな」

緑川『………じゃあ何本勝負にする？1本？3本？5本？10本？』

遊真「10本。いつも10本でやってるから」

緑川『オツケー』

アナウンス『ランク外対戦10本勝負、開始』

10本勝負が始まり遊真が歩道橋の上に、緑川はその近くの歩道に転送された

修「A級4位部隊……!?!強いとは思ってたけどそんなに上だったのか……!」

陽太郎「陽介とどっちが強い?」

米屋「個人だどどーだろなー、オレポイント覚えてねーし」

米屋陽介

孤月(槍):9443

スコープオン:8545

米屋「勝つたり負けたりだなー。でもまあ緑川はまだ中坊だし才能ならあつちが上な

んじゃねーの?」

ざわっ

修「……………!」

周りがざわつき修がモニターを見ると、遊真が緑川にスコープオンで背中を貫かれて

いた

アナウンス『空閑、緊急脱出1ー0緑川リード』

陽太郎「ゆうま!」

修(空閑がいきなり1本取られた……………!?)

アナウンス『2本目開始』

遊真は先程の緑川の動きを警戒してか、階段などを使って引き気味に戦うが緑川に押される

緑川「動きは悪くないけど」

スコープオンを受けて体勢が崩れたところを後ろから胴体を真つ二つにされる

緑川「オレの敵じゃないね」

210

緑川：○○

空閑：???

陽太郎「ああ………!!」

修（いくら空閑でもA級相手にボードアのトリガーじゃ………）

「やっぱA級は違うわ」

「あの白いやつもけっこうやるけどな」

緑川『10本勝負でよかったね、5本勝負ならもうリーチだよ』

遊真「………」

米屋「あー、けっこう経験の差があんなー」

陽太郎「けいけんの差ってなんだ!? ゆうまもミドリカワに負けるっていうのか!？」

米屋「いや逆、逆。見てな、そろそろ勝つぞ」

米屋の予言通り遊真が緑川に右腕を切らせ、その間に相手の胸にスコープオンを刺す

2 | 1

緑川：○○??

空閑：??? ○

「1本返した!」

「相打ちOKか!」

米屋「捕まえた。もう負けはねーな」

修「どういうことですか……!?!」

米屋「ウチの隊の攻撃を4対1で凌いだやつが緑川1人を捌けないわけねーだろ。なんか知んねーが白チビのやつ、緑川をボッコボコにしたいらしーや」

遊真は電柱を足場に加速しながら緑川を斬り捨て、緑川は対応出来ずに緊急脱出するベイルアウト

2 | 2

緑川：○○??

空閑：??? ○

次の5本目は緑川と正面から打ち合い、的確に急所に刃を突き立てる

2 | 3

緑川：○○??
???

空閑：???
???○○○

遊真『10本勝負でよかったな。5本勝負ならもう終わってたぞ』

緑川「……………!!（こいつ……………急に動きが変わった……………!?最初の2本は手を抜いたのか……………!）」

米屋「緑川は才能あるし実際つえーけどまだボーダー入って1年やそこら、覚えた芸を見せたくてしかたねー犬つころの動きだ。けど白チビは……………あいつの動きはもつとずつと静かで淡々としてる、ただうまく相手を殺すための動きだ」

米屋の言葉通り、6本目からサクサクと緑川が負けていく

214

緑川：○○??
???

空閑：???
???○○○

215

緑川：○○??
???

空閑：???
???○○○

216

緑川：○○??
???

空閑：???
 ???
 ○○○○○○

「どうなってるんだ……!!」

「緑川が全然勝てなくなっただぞ……!!」

遊真「おまえがなんでオサムの評判を落としたいのかは知らん。ホントならオサム本人がおまえをどうにかするとこだけど、あいつは自分のことけつこう鈍いからおまえくらいせこいやり口だとやられてることに気づきもしない。だからかわりにおれがやる、おまえが二度とつまんないことしないようにな」

緑川（こいつは……いや、この人は強い……!!）

◇◇大規模侵攻対策会議室◇◇

対策会議室では風間があるモニターに見入っていた

忍田「……………?どうした?風間」

風間「失礼……………C級のブースで……………玉狛の空閑が緑川を圧倒しているようです」

三輪「……………!?!」

林藤「あらら」

◇◇C級ランク戦ブース◇◇

遊真「……………おまえA級だろ?スコアピオン以外使わんの?他にもトリガーあんだろ?」

緑川「……………これでいい、こっちの方があんたとの差がよくわかる」

遊真「へえ、だいたい顔になったじゃん」

そう言うのと2人はお互いに突っ込み、激突する

ドッ!

アナウンス『10本勝負終了、勝負……………空閑遊真』

218

緑川：○○??
 ???
 ???
 ???
 ???
 ???
 ???
 ???
 空閑：???
 ???
 ○○○○○○○○
 ○

「A級がC級に負けた……………」

「緑川、後半は手も足も出なかつたな。ボロ負けだ」

陽太郎「よくやったゆうま！おれはしんじてたぞ！」

米屋「よーし白チビ、今度こそオレと対戦……………」
 「遊真、メガネくん」

修「！迅さん……………!？」

迅「どもども、ちよつときてくれ。城戸さんたちが呼んでる」

レプリカ十最上達也③

る
A級7位の米屋が遊真とランク外対戦をしようとした瞬間、後ろから迅の呼び声が掛

用件は城戸司令に修と遊真が呼ばれているので迎えに来たようだ

修「城戸司令がぼくたちを……………!!」

遊真「ふむ？誰？」

「S級の迅さんだ……………」

「玉狛支部の……………」

迅「おっと悪いけどおれはもうS級じゃない。単なるA級の実力派エリートです」

緑川「あつ！迅さん!!」

親しいもの達には迅バカと渾名される緑川が目敏く迅に駆け寄る

緑川「迅さんS級やめたの!?!じゃあ対戦しよう！対戦！」

迅「おつ、駿。相変わらず元気だな」

遊真「これは一体……………?」

米屋「緑川は熱烈な迅さんファンなんだよ。近界民ネイバーに食われそうなところを迅さんに助

けられてボーダーに入ったらしいからな」

遊真「なるほど、だから玉狛に入ったオサムに嫉妬したのか」

緑川「……………三雲先輩、すみませんでした」

修「え!?何!?なんで!」

緑川「先輩を大勢の前でボコボコにしてしまいました」

修「うん、だってそりゃランク戦だし……………」

緑川「ちがうんです、三雲先輩に恥かかそうと思ってわざと観客集めたんです」
ギャラリ

修「あ、そうなの? まあ、それはそれでよかったよ。なんだか実力以上の評判が立つたから……………」

緑川「……………」

修「実際、風間先輩とは24敗1引き分けだったからな!」

「そうだったのか……………」

「ウワサが1人歩きしてたんだな」

修（やつと言えた……………」

遊真「なかなか素直でよろしい」

緑川「……………そういう約束だったからな、白子ビ先輩」

遊真「空閑遊真、遊真でいいよ。大勢の前でボコボコにしてわるかったな」

緑川「いいよ別に、自分で集めた観客だし、次はボコボコにし返すから」

遊真「ほう、お待ちしています」？

迅「うんうん、ライバルっていいね」？

緑川「迅さん！遊真先輩に勝ったら玉狛支部に入れてよ！」

遊真「遊真でいいよ」

迅「いやおまえ草壁隊はどうすんの？」

緑川「兼業する！どっちもやる！」

迅「無茶言うなあ……………さて、ほんじや行こうか遊真、メガネくん」

遊真「すまんね、よーすけ先輩。勝負はまた今度な」

陽太郎「すまん陽介」

米屋「ちえー」

「なあ今気づいたけど……………あの白いやつって戦闘訓練で0.4秒だしたやつじゃな
いか？緑川の記録を抜いたっていう……………」

「ガセじゃなかったのか……………」

「メガネの方は白チビに『隊長』って呼ばれてたぞ」

「いやでもメガネは弱かったじゃん」

「けど城戸司令から呼び出されてるし、元S級とも知り合いっぽい……………」

「謎だなあのメガネ……………」

ランク戦ロビーでは修の正体について語り合われていた

迅「駿はどうだった？遊真。手強かったか？」

遊真「けっこう強かったかな、こなみ先輩と10本勝負してなかったらやばかったかも。これからもっと強くなるやつだと思うよ」

迅「ふんふん、メガネくんは？」

修「ぼくは……………手も足も出ませんでした。風間さんの時と違って全然動きが読めなくて……………動きに整合性がないというか、きまぐれというか」

迅「なるほど、そのへん遊真はどう戦った？」

遊真「おれはそういう時は大体相手を『動物』だと思つて戦うよ」

修「『動物』……………!?!」

遊真「『人間はけっこう理屈に合わない動きをする。理屈よりも習性とか性格とかを読んだ方がいい場合も多い』ってむかし親父が言つてた。かざま先輩みたいなキチンとした人は理詰めでいけるけど、ミドリカワみたいな天然系は動物として見た方がいい」

迅「おお、そうかもなー」

修（そういえばたしかに米屋先輩もそんなこと言つてたような……………）

遊真「ミドリカワは自信満々でプライド高そうなのはわかつてたから最初の2本はミ

ドリカワの動きを見ながらむこうに気分よく勝たせた」

修「勝たせた……?!?なんで……?!?」

遊真「簡単に言えばこつちをナメてもらうためだな。むこうの戦争でたまにやってたんだ。最初の何回かだけ大負けしたフリして引き込んで殺すの」

修「……………」

遊真「『自分の方が強い』と思いこんでるやつは、勝てるハズの相手に負けるとムキになるからベストな動きが崩れて殺しやすくなるんだ。しかも負ければ負けるほど取り返そうとして熱くなるから、あとはその隙を突くだけで簡単に勝てる」

迅「最初だけ勝たせてあとは筆り取るカジノのディーラーみたいだな」

遊真「ふむ?そう?」

修「……………(相手をコントロールするために最初の2本を使ったのか……………!)これが米屋先輩が言ってた『経験の差』なのか……………」

遊真「終わりの方はミドリカワも気づいてきてラスト2戦はいい動きしてたよ」

迅「おっそうか、あいつ成長したな」

修「(空閑が8対2で勝つ相手にぼくは10対0で負ける。これが現実的なレベルの差……………他の隊員だってみんな考えて鍛えて積み上げてる。生半可なやり方じゃ全然追いつけない、とりあえず今日のことを忘れないようにしよう)動物、動物

.....」

遊真「……………」

遊真が緑川との戦いを話しているうちに会議室に到着した

迅「失礼します」

鬼怒田「遅い！何をモタモタやつとる！」

迅「いやーどもども」

陽太郎「またせたなぽんきち」？

達也「ブフォ……………」プルプル

鬼怒田「なぜおまえが居る!?それと最上！なにを笑つとる!？」

達也「いや、し、失礼……………」生で聞くとヤバいネ、コレ……………」プルプル

宇佐美「陽太郎！陽介はどこいったの？」

陽太郎「かれはよくやつてくれました」？

城戸「時間が惜しい、早く始めてもらおうか」

修「あの人が城戸司令……………」近界民嫌いのボーダーで一番偉い人だ」

遊真「ほう」

忍田「我々の調査で近々、近界民の大きな攻撃があるという予想が出た。先日は爆撃型1体の攻撃で多数の犠牲者が出ている、我々としては万全の備えで被害を最小限に食

い止めたい。平たく言えばきみに近界民としての意見を聞きたいということだ」

三輪「……………」

遊真「ふむ、近界民としての意見」

鬼怒田「近^{ネイバーフッド}界にいくつも国があることはわかっとなる。いくつかの国には遠征もしとる。だがまだデータが足らん！知りたいたいの攻めてくるのがどこの国でどんな攻撃をしてくるかということだ！おまえが近界民側の人間だろうがなんだろうがボーダーに入隊した以上は協力してもらおう！」

遊真「なるほど、そういうことならおれの相棒に訊いたほうが早いな。よろしく」

レプリカ『心得た』

遊真がそう言うのと遊真の左手の人差し指から声が鳴り、黒い炊飯器のようなモノが出てくる

鬼怒田・忍田・風間・三輪「……………」

レプリカ『はじめまして、私の名はレプリカ。ユーマのお目付け役だ』

忍田「……………」

鬼怒田「なんだこいつは……………」

レプリカ『私はユーマの父ユーゴに造られた多目的型トリオン兵だ』

三輪「トリオン兵だと……………」

城戸「空閑、有吾……………！」

修（そうか、トリオン兵だったのか……………！）

レプリカ『私の中にはユーゴとユーマが旅した近界の国々の記録がある。おそらくそちらの望む情報も提供できるだろう』

忍田「！」

鬼怒田「おお……………！」

レプリカ『だがその前に……………ボードーには近界民に対して無差別に敵意を持つ者もいると聞く。私自身まだボードー本部を信用していない。ボードーの最高責任者殿には私の持つ情報と引き換えにユーマの身の安全を保証すると約束して頂こう』

城戸「……………！」

鬼怒田（何を言つとる人形め……………口約束などどうとでもなるわい）

達也（……………とか思ってたんだろーなー……………、ぼんきち）プルプル

修（空閑には嘘を見抜くサイドエフェクトがある……………！城戸司令を試す気か……………！）

城戸「……………よかろう、ボードーの隊務規定に従う限りは隊員、空閑遊真の安全と権利を保証しよう」

修（空閑は反応してない……………？城戸司令……………嘘はついてないのか……………!?）
レプリカ『確かに承った、それでは近界民について教えよう』

◆ WORLD TRIGGER ◆

レプリカ『近界民の世界……………すなわち近界に点在する「国」はこちらの世界のよう

に国境で分けられているわけではない、近界ほとんどを占めるのは果てしない夜の暗黒であり、その中に近界民の国々が星のように浮かんでいる。それらの国々はそれぞれ決まった軌道で暗黒の海を巡っており、ユーマの父ユーゴはその在り方を「惑星国家」と呼んだ』

修「『惑星国家』……?!?」

レプリカ『太陽をまわる惑星の動きとは少々異なるが惑星国家の多くはこちらの世界を掠めて遠く近くを周回している。そしてこちらの世界と近づいた時のみ遠征艇を放ち、門を開いて侵攻することができるといえる。「攻めてくるのはどこの国か」その問いに対する答えは「今現在こちらの世界に接近している国のうちのいずれか」だ』

鬼怒田「そこまではわかるとる！知りたいたいのには『それがどこの国か』！その『戦力』！その『戦術』だ！」

レプリカ『どの国がそうなのかを説明するにはここにある配置図では不十分だ。私の持つデータを追加しよう。リンドウ支部長』

林藤「OK、レプリカ先生。宇佐美よろしく？」

宇佐美「あいあいさー」

林藤は宇佐美に丸投げし、丸投げされた宇佐美は持っていたパッドを操作して既に展開済みの軌道配置図にレプリカのデータを上書きする

緑川「……………!」

レプリカ『これが、ユーゴが自らの目と耳と足で調べ上げた惑星国家の軌道配置図だ』
陽太郎「おおく!でかい!」

鬼怒田「これは……………!」

忍田「さすがは有吾さんだな……………」

修「これが……………近界民の世界の地図……………! (もしかしたらこの中に千佳の友達や
隣児さんをさらった国が……………!)」

三輪「……………!」

レプリカ『この配置図によれば現在こちらの世界に接近している惑星国家は4つ。広
大で豊かな海を持つ水の世界、海洋国家リーベリー。特殊なトリオン兵に騎乗して戦う
騎兵国家レオフォリオ。厳しい気候と地形が敵を阻む、雪原の大国キオン。そして近界
最大級の軍事国家、神の国アフトラトル』

城戸「その4つのうちのどれか……………あるはいくつかが大規模侵攻に絡んでくると
いうわけか」

風間「その4つの中に爆撃型トリオン兵と偵察用小型トリオン兵を使う国はあるのか
?」

遊真「それだったら確率が高いのはアフトラトルかキオンかな、イルガー使う国っ

てあんまりないし………ていうかそういうの迅さんのサイドエフェクトで予知できないの?どこが来るとか」

迅「おれは会ったこともないやつ未来は見えないよ。『近々何か攻めてくる』ってのはわかっても、そいつらが何者なのかはわからない」

遊真「ふむ………なるほど」

城戸「今はひとまずその2国が相手と仮定して対策を進めよう。次に知りたいのは相手の戦力と戦術。だが規模に関しては最上の予知により前回の大規模侵攻の8倍であるとかわかってる。しかしその内訳がわからない。特に重要なのは敵に『黒^{ブラック}トリガーが居るかどうかだ』」

修「『黒トリガー』………!」

レプリカ『我々がその2国に滞在したのは7年以上前なので現在の状況とは異なるかもしれないが、私の記録では当時、キオンには6本、アフトラトルには13本の「黒トリガー」が存在した』

忍田「13本………!」

レプリカ『しかし「黒トリガー」はどの国でも希少なため通常は本国の守りに使われる。遠征に複数投入されることは考えづらい。多くても1人までだろう』

達也「ちよつと失礼」

城戸「なにかね？」

達也「その2国なら攻めてくるのはアフトラトルで投入される『黒トリガー』は4本だ」

城戸「!？」

鬼怒田「……………な!?なんじゃと!？」

迅「……………!?!……………達也さん、なんでわかんの?」

達也「それはボクがこちらの世界に戻ってくる直前までアフトラトルに滞在していて内部事情を知ってるからだ」

城戸「なるほど、ではその内部事情とやらを教えてもらおうか」

達也「そのまえに、アフトラトルには恩人がいてネ。その人をコチラ側で保護したい。その人は確定で遠征に来る、だからもし保護できたらその時はその人の扱いをボクに一任して欲しい。もちろん尋問くらいはちゃんとするししてもらって構わない」

城戸「……………いいだろう」

達也「では、現在アフトラトルは国を支える『マザートリガー』の『神』が死にかけてる。だから色んな国へ遠征部隊を出してる。アフトラトルは規模が大きいためこちらの世界のように4つの領地に別れていて、そのうちの1つで最大派閥のベルテイストン家の一派が来るだろう。そして彼らが4本もの『黒トリガー』を遠征部隊に出せるのは『窓の影』^{スピラスキア}と呼ばれる『ワーブゲートの黒トリガー』があるからだ」

城戸「……………ワーブゲート……………だど!？」

達也「そう、仮に負けてもワーブゲートで回収できるから問題ないのさ。残りの3本も全部めんどくさい能力持ってる。

1つ目は『泥の王』^{ホルボロス}と呼ばれるもので能力は自分自身を含めた自身のトリオンの液状化と固体化、そして気体化だ。対処法はトリオン反応センサーで気体化を見破ることと面攻撃で固体化使ってカバーしてる弱点を見つけて破壊すること。使用者の気性がかなり荒いため、わざと離れて放置するなどして駒として浮かせながら煽るのも手だ。

2つ目は『卵の冠』^{アレクストル}と呼ばれるもので能力は様々な生き物の形をした弾丸を大量に作り出しそれを当てようとしてくる。トリオンに当たるとトリオンキューブになる。こ

れでトリオン体の敵を捕らえることもできる。さらに変えたキューブを還元して自身のトリオン体やトリオン量の回復も行える。使用者の特徴として根暗でネチネチしたやつだから絡め手をよく使う。『窓の影』との連携も厄介だ。有効な策としては攻撃手はシールドを細かく分裂させ全面に展開して弾を防御しつつ切り込むのがいいだろうが1番は弾数の多い射手・銃手で敵の周りを周回して弾を削って狙撃手に狙撃させる。この時ワープ使いがトリオン兵を送り込んでくる可能性があるので腕の立つ部隊を護衛につけるといいだろう

3つ目は『星の杖』^{オルガノン}と、呼ばれるものだ……正直これは強すぎて普通に迅でも負けると思う」

城戸「……………!?!」

忍田「迅でもか!?!」

迅「おっと……………」

レプリカ『「星の杖」はアフトラトルで国宝と呼ばれるほどの「黒トリガー」だ。使い手によっては1国を単独で墮としたとの記録もある』

達也「そのとおり、だからボクのみた未来で『星の杖』に勝てるのは遊真くんだけだ。天羽をぶつけても被害が無駄に広がり、更に他で押し切られる」

城戸「なるほど、だからあんなに空閑遊真の入隊に固執したのか」

遊真「……………?」

達也「それで、『星の杖』の能力だけど、展開した色んな角度の円を目に見えない速さのブレードが走る仕組みだ。使い手も65歳と老齢だが確実に近界最強クラスだ。対処法は敵の狙いの的にそのまで好き勝手『星の杖』を振るえないからその間に遊真くんを当てて他を逃がす、コレしかない。仮に遊真くんが負けても被害が出ることは無い。コレはボクのサイドエフェクトとボク自身が保証する」

城戸「……………」

達也「で、肝心の敵の狙いだけど、敵の狙いは『C級隊員』だ」

忍田「C級だと……………」

達也「そのために敵は新型トリオン兵『ラービット』を繰り出してくる」

鬼怒田「新型!?!」

達也「新型についてはあとでレプリカ先生に説明してもらおう。遠征にはもう2人ノーマルトリガー使いが参加する。能力はアイビスを越える威力の弾をドカドカ撃ってくるやつと磁力でカケラを操って敵の捕縛、移動、攻撃、防御とかなり高性能なトリ

ガーを使う。磁力使いは『星の杖』使いと一緒に来るから迅に遠くへ連れていってもらう」

迅「了解、了解」

達也「人型が出てくるまでは基地の西側を1人でやらせる。天羽は北西に、他はC級に避難誘導をやらせて敵を釣り出しつつ避難が終わってない地区を優先的にB級部隊を合同で1箇所ずつ掃討する。A級は基本的にラービットの相手と避難が進んでる地区を1つか、2つで担当してもらう。ただし諏訪隊は本部のオペレーターームで待機、これは『泥の王』の使い手が基地に侵入してくると思われるため真っ先に会敵するオペレーターームで相性のいい諏訪隊に訓練室まで連れて行ってもらう、仮想訓練モードでオペレーター達に解析と空調などで援護してもらう。その隙に忍田さんと菊地原くん、歌川くんは訓練室へ行ってもらい斬ってもらう」

忍田「了解した」

達也「大砲使いはA級の緑川くん、米屋くん、出水くんとB級から東隊、荒船隊、柿崎隊、来馬くんで戦ってもらう。その他のB級は全てトリオン兵に当てる。『卵の冠』使いは終盤か盤面が余程悪くならないと出てこないだろう。出てきたところをレイジさんと烏丸くんやボクと近くの射手・銃手に対応する。B級部隊の1位と2位は元A級部隊のためラービットに当てる、以上が大まかな対策になるでしょう」

忍田「なるほど、了解した。だがC級を囮にすると言うのは……………」

達也「ボクの見た未来では死人はオペレーターからしか出ていません。よって中央オペレーター達には今回のみ緊急脱出ベイルアウトを持たせ、敵の侵入と同時にそれを徹底させ死人を無くします」

忍田「死人が出ないのはわかった！だが敵の狙いはC級隊員だろう!？」

達也「玉狛の雨取さんにB級装備を持たせてC級の振りをしてもらいます」

修「なっ……………!？」

達也「そして彼女がアイピスで敵を迎撃すれば敵の目は彼女に向く。ラービットさえ慶や風間くん達にに抑えてもらえれば人型が雨取さんのところに集まる。あとは『星の杖』使いを遊真くんに、『磁力使い』を迅に、残りはボクと玉狛第一で護ります」

忍田「……………」

城戸「いいだろう、被害を最小限に抑えるためだ。緊急脱出ベイルアウトも持たせる。これが最善だろう、協力してもらおうぞ林藤支部長」

林藤「……………いいか？修」

修「……………ぼくも千佳を護りのに協力させてください」

達也「それは当然だろう。彼女を囮にする以上精神的な不安は少しでも取り除くべきだ」

城戸「君の意見を尊重しよう」

修「……………でしたらぼくからはなにも」

忍田「では決まりだ。さあ、近界民を迎え撃つぞ！」

◇ 2 時間後・ボーダー本部屋上 ◇

三輪「……………何の用だ、迅」

迅「風間さんにお前がへこんでるって聞いてさー」

三輪「……………」

迅「秀次、実はおまえに頼みたいことがあるんだ」

三輪「……………!?!」

大規模侵攻編

大規模侵攻

◇ボーター本部屋上◇

三輪「俺に頼みだと……………!?!」

迅「うん、そう」

三輪「……………、……………断る。他を当たれ」

迅「おいおい、話だけでも聞いてくれよ。さつき達也さんが言つてた人型の1人とお前が基地の近くで当たりそうなんだ。魚っぽいの見えたから多分キューブにするやつ。その時多分メガネくんがピンチだから助けてやつて欲しい」

三輪「……………達也さん達が護つてるんだらう?なら俺は必要ないだらう」

迅「城戸さんが、『風刃』を誰に使わせるかで悩んでるらしい。第1候補の風間さんが辞退したんだと」

三輪「……………!?!」

迅「嵐山と木虎も外向きの仕事があるから候補から外れた。今候補に挙がってるのは8人。加古さん、佐伯、生駒っち、片桐、雪丸、弓場ちゃん、鋼、そんでおまえだ。おまえがおれの頼みを聞いてくれるなら、おれはおまえを推薦する」

三輪「何……………!?!」

迅『風刃』があればお姉さんの仇をうちやすくなるぞ。パワーアップはできる時にし
といた方がいいだろ」

三輪「……………、……………ふざけるな、あんたの一存で『黒トリガー』^{ブラック}の持ち手が決
まるわけがない。話は終わりだ」

迅「おまえはきつとメガネくんを助けるよ。おれのサイドエフェクトがそう言うて
る」

達也「……………で、なんでボクも呼んだのさ。迅」

迅「今一度確認しときたいんだ。達也さんが味方かどうか」

達也「ああ、そう言うことネ。キミの予知で見えてない方向に進んでるのがそんなに心配かい？」

迅「今まで予知で色々やってきたからね」

達也「安心しなよ、キミの見たる最善から2、3番目を1番の上にしてやるんだ。メガネくんを傷つけずにレプリカ先生も助ける。ボクは帰ってきてからずっとそのため

に動いてきた」

迅「……………信じて、いんだよね？」

達也「とーぜんだ。ボクのサイドエフェクトに最悪は無いあるのは2番を1番にすることだけ」

迅「達也さんの見たのはどんなのだった？」

達也「遊真くんが『星の杖』に勝つけどメガネくんは死にかけ、レプリカ先生はアフトクラトルへ連れてかれたよ」

迅「つまりおれのみてる2、3番目の善が達也さんの最悪だと？」

達也「ボクが見てるのはボクがいない世界線だ。ボクがなにもしなければその通りに進む。けどなにかすればそれはボクが干渉したとこだけ変わる。ボクはそれで決まった未来をより良くする。これに関しては迅ですら干渉できない」

迅「なるほど、達也さんは未来を見てるわけじゃないってわけか」

達也「そう。迅が見てる未来はボクの中では既に結果が出ている。未来を見るんじゃない。結果を見てるんだ。ボクは自分が見た映像を『原作』と呼んでいる。そしてその『原作』に手を加えてオリジナルのシナリオへ引つ張り込む。それがボクのサイドエフェクトだ」

迅「なるほど、戦闘じゃ一切役に立たない。なのによく未来視だと誤魔化せてたね」

達也「まあそのために頑張ったからな」

迅「……………すみませんでした。あなたを信用させてもらいます」

達也「わかって貰えたようでよかったよ。この貸しは今度返してもらおうよ」

迅「……………未来が見えないってこんなに不安なんです」

達也「はっはっはっ、ボクは存在そのものがイレギュラーだからね。見えるわけがないのさ」

迅「……………でも、あなたはそうやって干渉しないと『原作』に出てこないですもんね。だからあんなに入らなくていいところで話に入ってくる」

達也「……………ま、これも運命のイタズラさ。受け入れてその上で色々と模索してやっていくしかないよ」

迅「……………強いんですね」

達也「キミには負けるさ、なんせ『原作』ではこれらの事を誰にも言えないこととか

もいっぱい抱えててもちやんとした笑顔を見せてた」

迅「……………またこうして話してもらっていいですか？」

達也「……………イレギュラーだからネ。構わないよ。ボクに何を言ったところで未来は変わらない」

迅「……………ありがとうございます」

達也「うん、じゃあ大規模侵攻乗り切ろうか」

迅「あいあいさー」

達也「ははっ」

◇ 次の日 ◇

迅「うお、早いな」

本部の屋上から街を眺める迅が見たものは急な曇り空と無数に開かれた門ゲートだった

第二次大規模侵攻開始

◇ 司令室 ◇

沢村「門ゲートの数、38、39、40……依然増加中です!!」

忍田「任務中の部隊はオペレーターの指示に従って展開！ トリオン兵を撃滅せよ!!」
匹たりとも警戒区域から出さな!! 非番の隊員に緊急招集と先日決めた作戦を伝達！ 全戦力で迎撃にあたる!! 戦闘開始だ!!」

◆ W O R L D T R I G G E R ◆

アナウンス『^{ゲート}門発生、^{ゲート}門発生、大規模な^{ゲート}門の発生が確認されました。警戒区域付近の皆様は直ちに避難してください』

◇ 三門第三中学校 ◇

「……………!!」

「なにあれ……………!」

「基地の方が真っ暗だ……………!!」

修「先生！」

先生「三雲くん」

修「呼び出しがあつたので現場に向かいます！学校のみんなをなるべく基地から遠くに避難させてください！」

先生「わかつたわ」

「三雲！」

「もしかしてやばいのか?!?これ……………」

修「近界民ネイバーが警戒ラインを越えるかもしれない、先生に協力して皆を避難させてくれ、頼んだぞ」

「わ……………わかつた！」

「気をつけてね……………」

そう言つて修はクラスメートたちと別れて千佳たちと共に外へ出る

修「千佳、おまえはみんなと一緒に避難しろ、ただしトリオン兵が来てみんなが危なくなつたら渡したトリガーを使って迎撃するんだ」

千佳「うん、わかつた」

修「夏目さん、千佳のこと頼む」

夏目「了解つすメガネ先輩！」

修 「空閑」

遊真 「ほいよ」

修 「一緒に来てくれ、トリオン兵を食い止めるぞ」

遊真 「そう来なくつちや。チカにもちびレプリカを渡しとく、あぶない時は呼んでくれ。おれかオサムか達也さんが絶対に助けに行く」

千佳 「うん……………！」

修 「行くぞ!!」

遊真・修 「「トリガー起動!!」^{オン}」

修と遊真はノーマルトリガーを起動し駆け出す

沢村「最上隊員の予知通りトリアン兵はいくつかの集団に別れてそれぞれの方角へ市街地を目指しています！本部基地から見て西・北西・東・南・南西の5方向です！」

忍田「では、予定通り避難が進んでいない東部へB級を集めろ！A級は嵐山隊は南西を通過し南の敵を掃討しろ」

来馬『鈴鳴第一現着！戦闘開始！』

東『東隊現着、攻撃を開始する』

沢村「風間隊、嵐山隊、荒船隊、柿崎隊、茶野隊もトリアン兵を排除しつつポイントへ向かっています！」

忍田「よし、合流を急がせろ。各隊連携して防衛にあたるんだ」

レプリカ『ボーダーとトリオン兵が交戦し始めたようだ』

修「状況は!？」

レプリカ『数ではトリオン兵が圧倒しているが、タツヤの予知通り敵は戦力を分散している』

修「……………!それじゃあ……………」

レプリカ『いや、まだだ。ラービットがまだ出てきてない』

遊真「予知が付いてるからって気を抜くと死ぬぞ。戦いつてのは基本的に数が多い方が有利なんだ」

東隊の攻撃手、小荒井と奥寺の2人が持ち前の連携でモールモッドの背部を切り裂き沈黙させる

小荒井「東さん、最後の1匹片付きました！」

東「よし、じゃあ他の隊と合流しよう」

バキリ

バキ

バキ

バキ

バキン

バムスターの死骸から内側を破って中から二足歩行の新型トリオン兵が現れる

東「……………!?!?……………でたか……………2人とも気を引き締めろよ。忍田さん、こちら東！新型トリオン兵と遭遇した予知通りサイズは3メートル強、性能もほぼ『プレーン体』と酷似、予知通りと考えてよさそうです」

忍田『了解した。風間隊がもうすぐ着くはずだ。それまで戦力を削られないように耐えてくれ』

東「……………了解!!聞いての通りだ2人とも引き気味に攻撃を受け流す。あの腕に掴まれるなよ」

小荒井・奥寺「了解!!」

ボーダー1の軍師東春秋率いる東隊とラービット（プレーン体）の戦闘が始まった

沢村「基地東部にて風間隊が到着！東隊は後退して柿崎隊と鈴鳴第一が合流、村上隊員が南部にて新型を足止めしているようです。茶野隊ももうすぐ合流できるかと」

忍田「了解した。遊真くん!!」

◇◇基地南西部◇◇

忍田『遊真くん!!』

遊真「ほいほい」

忍田『新型が現れだした。遊真くんも遭遇し次第「黒^{ブラック}トリガー」を使ってくれて構わない』

遊真「了解、了解!!」

◇ 基地東部 ◇

ボーダー本部基地の東部では風間隊が新型トリオン兵と交戦していた

風間「掴まれるなよ！電撃にも注意しろ！」

歌川「了解！」

菊地原「捕まりつこないですよ。こんな単純な動き……………」

ラービットは風間隊の連携を絶とうと地面を殴り土煙を出す

風間と歌川は煙に紛れてカメレオンを発動し、菊地原は発動せずラービットの攻撃を

誘う

菊地原「うわあ……………やだなあ……………」

ラービットはシールドとスコープオンで防御姿勢を取った菊地原を殴り付けドン付きの住宅までぶつ飛ばすと同時に追撃に走る

菊地原「はいはい、こっちこっち」

だが、ラービットは何かに反応し、動きを止め『歯』で弱点である『眼』を守る

しかし、ラービットが反応した透明となった風間と歌川の攻撃は『眼』ではなく足を削り、ラービットはバランスが取れず転ぶ

◇ アフトクラトル遠征艇 ◇

黒角の青年「おいおい……………、もうラービットとまともに戦えるヤツが出てきたぞ」

老人「いやはや、これは……………ミデン玄界の進歩も目覚しい……………ということですか」

黒角の青年「大したことねえよ。ラービットはまだプレーン体だろが」

大柄の男性「いやいや、分散の手にも掛からなかつたしなかなか手強いぞ。何よりラービットの特徴を知ってるかのような動きをするのも気になる」

落ち着いた青年「我々も出撃致しますか？ハイレイン隊長」

ハイレイン「いや、お前たちが出るのは玄界の戦力の底を見てからだ。慌てることはない。卵はまだたくさんある」

◆WORLD TRIGGER◆

ハイレイン「玄界はまだその戦力の全てを見せていない。前回ラッドを撒いた時は数百の兵が動いていた。その規模からしてこの隊以外にも腕の立つ使い手が数多く存在すると推測できる」

黒角の青年「玄界の猿相手にビビりすぎなんじゃねーの？隊長さんよ」

落ち着いた青年「口を慎めエネドラ、上官に対して無礼だぞ」

エネドラ「あ？てめーこそ誰に口利いてんだ？雑魚が」

老人「ほっほ、いやはや、お2人にケンカされては船がもちませんな」

エネドラ「……………チツ……………イライラするぜ!!このクソ狭めー船はもううんざりだ！なあオレを出せよハイレイン！玄界の兵なんざオレ1人で皆殺しにしてやる！」

大柄の男性「皆殺しはともかく、確かにそろそろ体を動かしたいものだな、兄……………いや、隊長」

ハイレイン「もう少し我慢しろすぐにお前たちの出番は来る。……………ミラ」

ミラ「はい、次の段階へ進みます」

◇ 基地南西部 ◇

レプリカ『数が多すぎるな、ここは引いた方がいい』

修「でもここを通したら千佳たちが……………！」

ドンッ

修「……………!?!」

レプリカと口論する修の元へラービットが現れる

修「新型トリオン兵……………!?!」

ラービットは修を見つけると同時に上から飛び掛る

修「盾^{シールド} モード!!」

修はレイガストでガードするが押し込まれ、ラービットが追撃を加えようと腕を振り

かぶる

遊真「『強』^{ブラスティックインティ}印五重」

遊真が『黒トリガー』に換装し五重に強化した蹴りをガードするラービットの腕に叩

き込む

当然ラービットの腕は壊れ吹っ飛ぶ

修「空閑……………!」

遊真「うお、こいつかつてーな」

遊真が吹っ飛ばしたラービットはまだ生きており、無事な右腕で修を攻撃しようとするが遊真がそれを阻止するべく攻撃するよりも早く上から『通常弾^{アステロイド}』による射撃で脆くなっていたラービットは今度こそ沈黙する

嵐山「目標沈黙！」

修「あ……………嵐山さん！」

嵐山「三雲くん！無事か!？」

遊真「どうも助かったよときえだ先輩」

時枝「あれ？そんな格好だったっけ？」

木虎「例の『黒トリガー』ですよ、先輩。ていうかあなたそれ城戸司令から使用許可降りてるの？」

遊真「まあね」

嵐山「本部！こちら嵐山隊！こちら嵐山隊！新型を1体排除した！トリオン兵を減らしつつ次の目標へ向かう！」

『ザ————ガリガリッ』

嵐山「……………本部!？」

『……………砲で……………迎撃……………』

嵐山が本部の異常を察して基地の方へ振り返ると爆撃型トリオン兵イルガーが本部へと特攻していた

木虎「あれは……………!!」

修「このタイミングだったのか!?!……………イルガー!！」

◆
W
O
R
L
D

T
R
I
G
G
E
R

◆

沢村「爆撃型トリオン兵接近!!」

鬼怒田「砲台全門撃ちまくれ!!」

沢村「一体撃墜!!もう一体が来ます!!」

忍田「衝撃に備えろ!!」

ドンッ

鬼怒田「織り込み済みとは言えきついもんじゃわい」

沢村「第二波来ます!! 三体です!!」

忍田「装甲の耐久値は!？」

鬼怒田「あと1発までは何とか持たせる」

忍田「よし、砲撃を集中! 一体だけでいい、確実に撃墜しろ!!」

根付「!? いや…………… 一体だけでは……………」

沢村「一体撃墜確認!! 残り2体!!」

根付「忍田本部長!？」

忍田「問題ない残りは一体だ」

忍田がそう言った瞬間、モニターに映るイルガーがX字に切り裂かれ爆発する

根付「……………!？」

鬼怒田「太刀川!!」

根付「おお!!」

沢村「もう一体が直撃します!! ショックに備えてください!!」
ドスンッ

忍田「後続は!?!」

沢村「今のところありません!」

忍田「よし………今のうちに外壁を修復、次を警戒しろ。慶! お前の相手は新型だ。
斬れるだけ斬ってこい」

太刀川『了解、了解。さっさと片付けて昼飯の続きだ』

嵐山「基地は大丈夫だ！太刀川さんが爆撃型を墮とした！」

遊真「タチカワさん……………？迅さんのライバルだった弧月の人か」

修「A級1位の……………！」

遊真「自爆モードのイルガーを斬って墮としたのか。しかも普通のトリガーで……………すこいな」

修「空閑から見てもやっぱり凄いのか？」

遊真「自爆モードはかなり頑丈になるからな。こないだみたく引きずり墮とす方がまだ楽かもしれない」

木虎（『こないだみたく』『引きずり墮とす』……………!?じゃあ……………あのとき私を助けたのは……………!）

忍田『嵐山隊、通信が乱れてすまなかった。新型を仕留めたということだな？』

根付『さすが嵐山隊、新型討伐一番乗りですなえ』

嵐山「いえ、我々が到着した時には既に玉猫の三雲・空閑、両隊員が交戦中でした。新型には既に大きなダメージを与えており、うちの隊はトドメを刺しただけです」

鬼怒田『玉猫……………！例の「黒トリガー」か！』

忍田「なるほど、遭遇したか。では予定通りに三雲くんは雨取隊員の元へ向かってくれ。達也くんは既に向かっけてもう近くにいるはずだ」

修 「了解です!!」

◇ アフトクラトル遠征艇 ◇

エネドラ 「なんで追い撃ちしねーんだ!?!あと2、3発で陥とせただろが!」

落ち着いた青年 「敵を無駄に追い詰めれば痛い目を見る。その程度のこととも分からないのか?」

エネドラ 「雑魚の理屈なんざ知らねーよ。敵は殺せる時に殺しやいいんだ」

ハイレイン 「爆撃は敵戦力のあぶり出しと惑乱が狙いだ。我々の目的は玄界の占領や支配ではない」

大規模侵攻②

◇基地東部◇

菊地原「嵐山隊が先に新型倒しちやったらしいですよ。2人が慎重すぎるから……
一対一ならともかく3人掛かりで負けるわけがないのに……」

風間「別に競争してる訳じゃない」

菊地原「そりやそーですけど……、……なんかさつきドカドカ食らってます
たけど大丈夫なんですかね？本部」

風間「問題ない。本部には太刀川や当真がゴロゴロしてる。いざとなれば忍田本部長
もいる。それにより本当に危険な時にはやつが動くハズだ」

◇基地北西部◇

本部基地北西部では、警戒区域内の住宅もトリオン兵もその全てが消滅し真つ平らになつていた

迅「おいおい、真つ平らじゃんか。天羽」

ボーダー本部

S級隊員ブラック（黒、トリガー）

天羽月彦（16）

天羽「迅さん……………」

迅「おまえなー、もうちよつと加減しろよ」

天羽「やだよめんどくさい……………どいつもこいつもつままない色のザコばつか。全然やる気起きないよ……………」

迅「うんうん、余裕があつていいことだ。悪いんだけどさ、おまえおれの担当もやつてくれない？基地の西つかわ」

天羽「ええー……………なんで……………？」

迅「そろそろ敵さんが本格的に動き始めるからおれは別で任務があんの」

◇ 本部基地南西部 ◇

千佳たちが避難誘導を行っている地区にトリオン兵が侵入していた

夏目「ぎやーもー、突破されちゃってんじやん！」

千佳「逃げ遅れた人は急いで地下堂シエルターへ！」

トリオン兵は逃げ遅れている市民を狙う

C級三バカ『西の陣』、『輝く鳥ヴァイフニル』!!』

C級三バカのハウンドと弧月による連携攻撃はトリオン兵と『眼』を正確に貫き沈黙させる

甲田「……………やれやれ、C級は戦闘禁止とか言ってる場合じゃねーぜ……………!」

しかし、C級三バカの倒したトリオン兵の死骸の中から新型トリオン兵ラービットが現れる

早乙女「え……………?」

丙「何……………!?!」

◆ WORLD TRIGGER ◆

早乙女「な……………なんだこいつ……………」

丙「なんかヤバい感じしねえ……………」

甲田「……………ああ、オレの歴戦の勘もそう告げ……………」

トリオン兵の死骸の中から現れたラービットはプレーン体では無く、モッド体と呼ばれるアフトラトルのトリガー能力の一部を搭載するタイプのラービットだ

そしてこのモッド体ラービットは『眼』の部分にエネルギーをため、ビームを撃ち出した

C級三バカ「どわあ!!」

千佳・夏目「!!」

甲田「ててて、撤退!! 戦略的撤退ーッ!!」

「トリオン兵が来たぞ!!」

「逃げろ!!」

モッド体のラービットは逃げ遅れた千佳に狙いをつけ、砲撃体勢に入る

夏目「やば……………」

その時、1発の弾丸がラービットの『眼』を撃ち抜き、内側から頭ごと吹き飛ばした

「達也「よう、無事か雨取さん」

千佳「達也さん!」

達也「メガネくんも来てるよ」

修「千佳……………」

千佳「修くん!」

喜びもつかの間、新たにモールモッドが現れる

修「モールモッド!」

達也「メガネくん。1人でやれるな?」

修「……………!?!」

達也「あの時とは違うってところを見せてやれ」

修「……………はい!」

修は達也の指示により単独でモールモッドと対峙する

「三雲だ！三雲が戻ってきたぞ！」

修（モールモッドと実践で一对一……空閑や嵐山さんたちの援護無しで戦うのはあの時以来か……。あの時からどれだけ変われたか、試すには絶好の相手だ。そのために宇佐美先輩達に手伝ってもらって特訓もした。今度こそ自分の力でみんなを助ける………！）

修はアステロイドを左に動きながら撃ち出すことで弾を散らしモールモッドを牽制する

修（トリオン兵の動きは一見動物っぽく見えるけど実際はプログラムに沿ってその状況に適した行動を選択する『理に適った』動きだ。そういう意味では緑川より風間先輩の動きに近い。訓練で何度もくれば動きの先が見えてくる）

修はモールモッドの薙ぎ払いをレイガストで受け流す

修（けど、凄いでるだけじゃダメだ。ぼくのトリオンじゃ……烏丸先輩に言われたことを思い出せ、反撃のイメージをもて。訓練しただろ）

モールモッドは上から爪を振り下ろす

修「（来た!!!!!!!!!!）スラスターON!!」

修はスラスターを起動し、スラスターの勢いでモールモッドを飛び越え、すれ違いぎ

まに前足の付け根を切り飛ばしながら後ろにまわる

修 「もう1発!!」

修はモールモツドの後ろで着地する前に身体をひねり、再びスラスターを起動して上からレイガストを振り下ろす

修 「あああああ!!」

修の放った一撃はモールモツドの背部装甲を割り、弱点である『眼』を斬り裂いてモールモツドは沈黙した

夏目 「やった!!」

修 「よし……………!! (倒せた……………!! 空閑や先輩たちのおかげでぼくも……………少しずつ成長してる……………!)」

達也 「よくやったネ。でもそろそろ追加が来るぞ」

修 「……………はい!!」

◆ WORLD TRIGGER ◆

◇ アフトクラトル遠征艇 ◇

ミラ「……………（彼は……………!!）目標確認。雛鳥の群れです。住民の避難にあたっていた模様」

大柄な男性「なるほど、巢を叩いても出てこないわけだ。それにこんなに玄界の兵がこちらの戦術に乗らない理由もわかった」

ハイレイン「だが、こちらの狙いには気がついていないようだ。雛鳥の警護が少なすぎる。さあ、雛鳥を捕まえようか」

そう言つてハイレインは倒されたモッド体ラービットの胸部に格納していた三体の改造型ラッドで門を開きそれぞれ別タイプのモッド体ラービット三体を達也たちがいる元へ送り込んだ

ハイレイン「玄界の戦力は程よく散っている。ラービットが仕事をやる舞台は整つた。雛鳥のトリガーに脱出機能がついていないことはラッドの調べでわかっている。お前たちはラービットの仕事に邪魔が入らないよう、玄界の兵と遊んで来い」

◇ 基地南西部 ◇

修 「新型が3匹!？」

夏目 「ずつる………!いくらでも出てくんじゃん!!」

達也 「早く逃げろ!!こいつらの狙いはキミたちだ!!」

ラービットの内の一体が腕の一部を液化化させ下から達也を攻撃する

達也 「悪いね、『泥ホルボロスの王』の性能は知ってるから当たらないよ」

達也は言葉通りバックステップで躲すと左手にキヤリコM950の形をした銃を展開し強化追尾弾ホーネットを連射する

修は黄色っぽい色をしたラービットに近くの住宅へと殴り飛ばされる

千佳 「!!」

夏目 「メガネ先輩!!」

修「だ……大丈夫だ！ぼくに構わず逃げろ!!」

達也「雨取さん!!アイビスだ!!ボクが許可する!!撃て!!」

千佳「………了解!!（今度こそ、友達はわたしが助ける!!）」
ズドツ

千佳の放った一撃は紫色のモッド体の左半身を吹き飛ばす

しかしまだ生きていたラービットは残った右腕を液化化させようとするが修がレイガストで『眼』を切り裂き、トドメを刺す

千佳「!」

夏目「うおっ、まだ生きてた!?!」

達也「忍田さん、援軍は?」

忍田「安心しろボーダー最強の部隊がそっちに向かってる」

修「ボーダー最強の部隊………!?!」

現在警戒区域の中を法定速度など無視で走っている1台の車がいた

小南「あーもー！なんであたしたちがこんなに遅れなきやなんないの!?!」

木崎「おまえを学校まで拾いに行つたからだな」

小南「なっ!?!」

烏丸「まあ、そうすね」

小南「今回の作戦は？」

木崎「いつもと同じだ。小南が暴れて俺たちがフォローする」

烏丸「了解」

小南「OK!! 新型なんかズタボロにしてやるわ! トリガー^{オン}起動!!」

◆ W O R L D T R I G G E R ◆

『戦闘体生成、実体を戦闘体へ換装、トリガー起動完了』

小南「さあ、戦闘開始よ!!」

◇アフトクラトル遠征艇◇

ハイレイン「なんだ……?!?今のトリオン反応は……『黒^{ブラック}トリガー』か……?!?」
 ミラ「いえ、『黒トリガー』ではありません。反応は通常トリガー……のハズ、です」
 大柄な男性「新手の強敵か!?モッド体のラービットがもう2体もやられたぞ!」
 ミラ「戦闘員ではなく雛鳥の中にいるようだわ。でもこの数値は……」

ハイレイン「思いがけず『金の雛鳥』か……作戦変更だ。ランバネイン、エネドラ、
 おまえたちは予定通り門^{ゲート}で送り込む。玄界の兵を蹴散らしてラービットの仕事を援護

しろ。だが無理をする必要は無い、あくまで戦力の分断が目的だ。危険な場合はミラのトリガーで回収する」

エネドラ「『危険』？オレが玄界の雑魚にやられるわけねーだろー！」

ハイレイン「ウイザ、ヒュース。おまえたちは『金の雛鳥』を追い………もしかすればここで新しい神を拾えるかもしれない」

◇◇基地南西部◇◇

千佳は正面から飛び掛ってくる黄色のラービットと茶色のラービットに向けてアイビスを撃つがラービット2体は左右に避ける

修（受けずによけた!?!学習してるのか!?!）

黄色のラービットのパンチをレイガストのシールドモードで受けるがもう1匹が横をすり抜け、千佳に迫る

達也もホーネットで応戦するが足を止められず千佳は住宅を気にしてアイビスを撃

てない

千佳がラービットに掴まれそうになったその時、レイジが間に入り、腕を受け止めていた

千佳「木崎さん!!」

木崎「……………雨取、狙撃手の基本は忘れたのか？」

千佳「……………!」『狙撃手は居場所を知られたら負け』『まずは姿を隠すこと』『相手に見つかったまま戦つてはいけない』……………です!」

木崎「……………よし、覚えてるならいい」

レイジはそれだけ言うのと空いてる右手でレイガストを握りしめ、スラスターを利用してアッパーをラービットの腹に叩き込む

アッパーで浮いたラービットを2発目のスラスター筋肉パンチでもう一体のラービットの元へぶつける

小南「メテオラ」

そうして2体重なっている所へ小南が上から斬り込んで離脱する

さらに予め追撃するように放っていたメテオラが直撃する

小南「修、遊真はどうしたの？」

修「()の声……………」小南先輩……………!?!」

しかしまだ生き残っていた茶色のラビットが、隙を着いて砲撃を放つ
烏丸「エスクード」

だが、その砲撃は烏丸が展開したエスクードの壁に防がれる

修（地面から盾が……!!）

烏丸「遅くなつたな、修」

修「……烏丸先輩！」

達也「やあ、桐絵。まだラビットが生きてるみたいだけど、ウデ堕ちたんじゃない

？」

小南「……!!達也さん!!失礼ね!!ちゃんと訓練してるんですよ!？」

達也「はっはっはっ、そいつは結構。そろそろ来るぞ」

先程ラビットを転送した改造ラッドが再び門を開く
ミラ「転送完了、戦闘、開始です」

◆ WORLD TRIGGER ◆

◇ 対アフトラトル対策会議 ◇

レプリカ『アフトラトルのトリガーは基本的に「トリガーホーン」と呼ばれる、外見上角に見えるもので量と質を変化させ通常トリガーを大きく上回る戦闘力を得ている。また「黒トリガー」と適合すると角が黒く変色する』

忍田「角が黒ければ『黒トリガー』というわけか………!」

レプリカ『いずれにせよ「角つき」の戦闘力は下手をすれば「黒トリガー」にも匹敵出来るかもしれない。相対した場合は心してかかることだ』

◇基地南西部◇
〜

ウイザ「いやはや……………子供を攫うのはいささか気が重いですな」
ヒュース「これが我々の任務です、ウイザ翁」
達也「やあやあ、久しぶり〜。元気してた？」

◇基地東部◇
〜

エネドラ「チツ、ガキばつかかよ。外れだな」
菊地原「あれがぼくらの標的ですか？」

風間「ああ、敵の能力を確認する。ほどほどに相手して後は浮かせるぞ」

◇基地南部◇
〜

ランバネイン「んー？ふたりだけか？拍子抜けだな」

東「来たな。予定通り数で対処する。予め指示があった隊以外は相手の射程に注意しつつトリオン兵の排除だ」

ランバネイン「……………いや、数を見て侮るのは良くないな。コツコツと片付けていこう」

そう言うのとランバネインは両手に弾丸を取り出すがそこに茶野隊が東と鈴鳴第一の狙撃手、別役太一を援護すべくランバネインに攻撃する

が、マントで防がれ反撃される

茶野隊の2人はシールドを張るがシールドを軽々と貫き、茶野隊の2人を緊急脱出させる

別役「い、一撃!？」

東「止まるな！走れ太一！」

ランバネインは後退する2人を追撃すべく腕を大砲に変形させ茶野隊を緊急脱出させた弾丸を乱射する

ランバネインの弾丸は障害物を壊しながら別役を緊急脱出させた

東「太一!!」

ランバネイン「はっはあ!!お前で最後だ!!」

荒船「目標捕捉」

東へと追撃しようと走り出したランバネインを荒船隊の3人の狙撃手が狙撃する

荒船「命中、いい釣りだ。東さん」

しかしランバネインは全く油断しておらず、局所的にシールドを張ってしつかりと狙撃を防御していた

ランバネイン「もう3人増えたか、これで7人。長距離戦は大歓迎だ、俺のトリガー『ケリードーン』は撃ち合いには自信がある」

そう言うランバネインの肩甲骨が変形し、変形した部分に展開されたパネルの様なものから高火力の射撃が荒船隊を襲う

荒船隊は隊長の荒船を除く2人が緊急脱出した

ランバネイン「思ったより沢山居そうだな。これなら退屈せずに済みそうだ」

◇ 基地南西部 ◇

ヒュース「自分が目標ターゲットを捕らえます。ウイザ翁には援護をお願いしたい」

ウイザ「よいでしょう。しかし相手には達也殿がおりますがゆえ、用心なさい
ヒュース殿」

ヒュース「注意します。雛鳥を殺してしまわないように」

ヒュースはそう言うのと磁力を操り、カケラを展開する

達也「あれ？ボクの挨拶は無視？」

ヒュース「黙れ！恩を仇で返す者と話す舌など持つていない!!」

達也「恩も何も元々ただの契約だったじゃないか。契約が切れたからコッチに帰ってきただけさ。それにボクは受けた恩はちゃんと返す派だ」

木崎「まだ新型が2体も生きてる。手負いとはいえあれが絡むと面倒だ、小南。3分やる、新型を片付けろ」

修「……………!?!(小南先輩1人で……………!?!)」

小南「1分で充分よ。あたしが戻るまでやられないでよね」

小南はそう言い残して新型の方へ向かう

達也「あの二人来たから遊真くんと迅もコツチに向かってきてるハズだ。それまでC級を庇いつつ戦力を温存したい」

木崎「了解だ」

烏丸「了解」

ウイザ「おやおや、なかなか落ち着いている。これは思いのほか手強そうだ」

ヒュース「問題ありません。相手が雛鳥を背にしている以上……………我々の有利は揺るがない」

ヒュースがカケラを飛ばすが烏丸がエスクードで防ぎ、レイジはガトリング砲を展開する

一方の小南は新型2体を機動力で翻弄しながら切り刻んでいく

小南「ヒビ入ってるくせに堅いわね。ま、だからどうってことはないけど」

『接続機ON』

小南が自身のワンオフトリガー、接続機を起動し両手に持つ小型剣の双月の柄を合わせて斧にし、上から振り下ろすことで茶色のラービットを頭から両断し、黄色のラービットが放つカケラを避けながら胴体を上半身と下半身の真つ二つにする

夏目「マジ……………!? ホントに瞬殺じゃん!」

修「ダメージがあつたとはいえ、あの新型を……………!」

ちびレプリカ『林藤支部長いわく、玉狛支部のトリガーは本部のものとはやや作りが異なるそうだ。本部のトリガーが大人数での運用を想定し、継戦能力を重視して規格化されているのに対して、玉狛のトリガーは使用者の特性に合わせた一点もの、本部未承認の近界民技術ネイバーテクノロジーを使った実験作だ』

修「本部未承認の技術……………!?!」

ちびレプリカ『林藤支部長が個人的に近界ネイバーフッドから持ち帰ったトリガーを技術者が解析して玉狛独自の技術を構築してららしい。コナミのコンセプトは「火力重視」、トリガーの連結で一撃の威力を大幅に高める、トリオン効率度外視の短期決戦型だ』

修「じゃあ烏丸先輩やレイジさんも……………!?!」

ちびレプリカ『コナミと同じように独自のトリガーと戦スタイルい方を持っている。玉狛第一は本部のランク戦には参加していないようだが、それはおそらく本部のトリガーと

レギュレーション
規格が違うためだ」

修（ボーダー最強の部隊ってそういう事だったのか……………）

ちびレプリカ『たしかに玉狛はボーダーの中では異端だ。コナミの動きはむしろ

……………近界民の戦い方に近い』

小南「コツチは片付いたわ」

レイジ「了解、よくやった」

◇ 基地東部 ◇

エネドラ「どっからどう見てもクソガキ3匹だが……………ラビット殺す程度の腕はあるんだよなあ？ がんばってくれよオイ」

風間「安心しろ。おまえを倒す対策は終わっている」

エネドラ「んだと、玄界の猿どもが!!」

菊地原「下です」

エネドラが得意の液体化で風間隊の足元で固体化させブレードとして攻撃するも菊地原に見抜かれ、躲される

エネドラ「……………!?（クソ生意気に避けやがった……………？完全に死角だっただろーがオイ）」

風間「なるほど、情報通りだな。三上、菊地原の耳をリンクさせろ」

菊地原「ええ〜」

三上『了解です、聴覚情報を共有します』

歌川「頼むぞ、おまえの副作用サイドエフェクトが頼りだ」

菊地原「はあ……………これ疲れるからイヤなんだけど……………」

攻撃手部隊で唯一エネドラに対して有利が取れる風間隊の真価が今発揮されようとしていた

大規模侵攻③

A級3位風間隊攻撃手、菊地原士郎のサイドエフェクトは『強化聴覚』一言で言えば『耳がいい』ただそれだけの能力である

ボーダーの基準で言えばランクの低いサイドエフェクト

菊地原本人も指摘されるまで、それがサイドエフェクトだと気付かないほどだった

「『耳がいい』って……地味すぎるだろ」

「サイドエフェクトって言っても大したことないな」

「盗み聞きとかには使えるんじゃないの?」

菊地原（聞こえてるよ……）

実際その性能は常人の5〜6倍、『1キロ先の針が落ちる音が聞こえる』というような超人的なものではなかった

菊地原（サイドエフェクトとか認定されないほうがよかった、こんなシヨボい能力

……）

だが……

風間「おまえ、『強化聴覚』のサイドエフェクトを持つてるらしいな」

菊地原「……………誰？おまえ……………チビのくせにえらそうに……………」

風間「風間蒼也、19歳だ。はじめまして」

菊地原「じゅ……………19歳……………!?!……………ぼくのサイドエフェクトなんて地味で大了ことない、役に立たないよ」

風間「それは俺が決めることだ。宇佐美」

宇佐美「あいあいさー。きくつちーのサイドエフェクトは『耳』ってところがいいんだよねー。聴覚情報は通信にも乗せやすいし解析もラクだしなにより視覚の処理能力を食わないところが……………」

歌川「宇佐美先輩、話を進めてください」

風間「おまえの聴覚情報を通信を介して共有する。隊全員がおまえの耳の恩恵を受けられる。知覚情報のみ頼る、他の部隊より遥かに有利だ。正隊員になったら俺の作る部隊チームに来い。お前の力が必要だ」

エネドラは立っていた建物の床を崩して屋上から下の階に移動し、残った天井からも攻撃するがその全てを躲される

エネドラ「オイオイ当たたんねーぞこいつら！尻に目ん玉でも付いてんのか!？」

風間「情報通り攻撃は『風刃』に似てはいるが『風刃』ほどのスピードは無い」

エネドラ（こいつら………目で見てるんじゃないな………『音』か『振動』か………）

歌川「どこかで近付きたいですね。長時間の聴覚共有は酔ってくる」

菊地原「根性ないなあ………」

風間「まだだ、相手がイラついて隙を見せるまでこのままだ。その後奇襲すると見せ掛けて作戦通り撤退して放置だ」

エネドラ（オレがイラつくのを待ってんだろ？雑魚どもが小細工しやがって、猿知恵

レベルが！）

エネドラは液体化させたトリオンを操作し各地に様々な音を出させる

歌川「……………！そこらじゅうから音が……………！」

風間「さすがに『音』に気付いたようだな」

菊地原「ふーん……………：原始人レベルですな」

菊地原の強化聴覚の真の力はその『聞き分け』の精密さにある

子供の頃から無自覚に強化聴覚を使っていた菊地原は『音』から材質・重量・状態など様々な情報を得ることができる

菊地原「右上と左の上下、それ以外は無視していいです」

菊地原の情報を頼りにそれぞれがブレードを回避する

エネドラ「……………：玄界の猿が……………！！あくめんどくせえ！！雑魚に付き合うのはもう終わりだ！！」

菊地原「……………：来た！」

エネドラの攻撃は建物中を埋め尽くすように展開され、建物ごと風間隊に襲いかかるが風間隊は全員がカメレオンを起動し姿を消して撤退した

◆ WORLD TRIGGER ◆

エネドラ「……………！あア!?いねーじゃねーか!!」

散々躲され煽るだけ煽られて逃げられたエネドラの怒りは最高潮になっていた

エネドラ「……………あんのクソガキどもがア!!」

エネドラはその後周りから放置されることとなる

◇ 基地南部 ◇

基地の南側では村上がラービットのモッド体を三体を相手にしていた

村上（色がつくと攻撃方法が変化するのか、さすがに3匹はしんどいな……………！）
ドオレがこいつらの相手をする間はその分だけ他のところが楽になるハズ。倒せなくとも引き付けてやる、1秒でも長く……………！）

下がりながら受けの立ち回りをする村上に対して紫のラービットが飛びかかるが飛

んだ直後上下真つ二つになる

村上「!？」

太刀川「よう、村上。俺忍田さんにこいつら斬つてこいつって言われてんだ。もらつていいか？」

村上「……………どうぞ、太刀川さん」

太刀川「旋空弧月」

弧月専用オプシヨン『旋空』

トリオンを消費して瞬間的にブレードの間合リイいを拡張する
振り回されるブレードは先端に行くほど速度と威力が増す

太刀川は居合の容量でX字に斬撃を放ち、残った2体を一撃です斬り捨てる

A級1位太刀川隊

『No. 1 攻撃手』

『個人総合No. 1』

太刀川慶（20）

太刀川「国近、新型撃破数ランキングはどうなってる？」

太刀川隊オペレーター

国近柚宇（17）

国近『嵐山さん3体、風間さん3体、小南2体、B級合同2体、最上さん1体、ミクモ?1体。太刀川さんは今の3体でトップタイだね』

太刀川「俺のから2匹村上につけとけ。けっこうダメージ入ってた」

国近『了解』

太刀川「さて、次はどこに行きやいいんだ?」

忍田『慶は東部地区に向かえ、風間と共に東部のトリオン兵を排除しろ。そこにいるB級を南部地区へ向かわせる。変わりを頼む。確率は低いが人型がC級や市民を狙って市街地へ向かった場合は交戦を許可する。お前が斬れ』

太刀川「太刀川了解（来い来い、『黒トリガー』来い）」

村上（『黒トリガー来い』って思ってるな……………この人は……………）

◆ WORLD TRIGGER ◆

一方、B級合同とランバネインが戦う戦場ではランバネインが高い建物を攻撃しつつゆつたりと移動していた

荒船「堂々と姿を晒しやがって……………撃って来いって誘ってやがんな」

柿崎「C級にや悪いがこの状況でヘルプなんかいけねーよ！」

東「火力差が大きい、無理に攻撃するなよ。焦って撃ち合いになれば火力差で一気にやられるぞ（……………あるいはこの膠着状態が敵の狙いか？南部の新型をフリーにするために……………）」

ランバネイン（不用意に撃つて来なくなつたか、思ったより我慢を知ってるな。さあどうする？定石通り市街地を攻撃して誘い出すか……………それともいつそヴィザ翁たちに加勢するか……………）」

緑川「よねやん先輩どうすんの？」

A級4位草壁隊

攻撃手

緑川駿（14）

出水「達也さんの指示ではここで俺らがアイツを倒してから玉狛を援護しろって」

A級1位太刀川隊

射手

出水公平（17）

米屋「あの人がそう言うってことはここでアイツを倒せるってことだ。やるしかないだろ」

A級7位三輪隊

攻撃手

米屋陽介（17）

◆WORLD TRIGGER◆

出水「柚宇さん、柚宇さん。ヤツの情報ちようだい、米屋と緑川の分も」

国近『ほくい、東さんたちの戦闘記録送るよ。詳しいことは東さんたちに訊いてね』

A級3バカのトリオン体の視覚にランバネインの戦闘映像が送られる

緑川「あちやー」

米屋「おー」

緑川「ゴツいのに意外と射撃系じゃん。いずみん先輩と同じタイプだ」

米屋「弾バカ族だな」

出水「誰が弾バカだ槍バカ。東さん、出水です。米屋と緑川も一緒です。『角付き』と

戦るんでサポートお願いします」

東「……………！わかった。情報通りシールドではヤツの弾は防げない上にイーグレットを止めるレベルのシールドがある。撃ち合うなら足を止めるなよ。火力勝負だと敵しいぞ」

出水「だいじよぶです、弾除けが2個あるんで」

緑川・米屋「おい、こら」

荒船「敵のシールドはブレードを止められるかもしれない。単発だと厳しいぞ」

出水「荒船さん、了解です」

国近『その建物のデータがあったから送るね。「旧・三門市立大学」』

出水「おつ柚宇さん気が利く！」

米屋「よし、行くか。作戦はMAP見て考えよーぜ」

緑川「作戦って……………このメンバーじゃ突撃しかなくない？」

出水「どう突撃するか決めんだよ」

緑川「相手が弾タイプってことは近づかなきゃギリ貧でしょ」

米屋「人数で勝ってるから挟み撃ちだな。動き回って裏取れたやつが当ててく感じでいくか」

緑川「これ建物とか壊しちゃっていいの？」

出水「オレらが壊さなくてもむこうが派手にぶつ壊すだろ」

緑川「そっか」

出水「まあ、とりあえず一発ぶつ放すからあとは臨機応変に」

米屋「結局それな」

緑川「了解」

出水「炸裂弾^{メテオラ}＋変化弾^{バイパー}、変化炸裂弾^{トマホーク}」

出水は得意の合成弾を使い建物の影から放ち幾度か曲げ、ランバネインを奇襲する

ランバネイン「！」

シールドでガードするランバネインに次は緑川が斬り掛かる

ランバネイン「新手か！」

緑川「グラスホッパー」

緑川はジャンプ台トリガーを使って方向転換し、敵の気を逸らす

ランバネイン（こいつは………陽動か！）

米屋「幻踊弧月」

米屋の放った槍の一突きはランバネインのシールドを躲し、相手の首に迫るが、体を

逸らして躲される

米屋「やっぱいきなり首は無理か」

米屋は2発、3発と槍で攻撃するが全てシールドと体捌きで対応される

ランバネイン（攻めてくると見せかけてこちらの反撃に対応出来る距離を保っている。これも、陽動……………！）

緑川の奇襲を見抜いたランバネインは右の肩甲骨を変化させ、後ろの死角に向かって弾を放つ

緑川は反応してグラスホッパーを使い回避する

緑川「うひゃあ」

米屋「さすがに2度目はバレバレか」

ランバネイン「白兵が2人……………」

再びトマホークがランバネインを襲うがしっかりとシールドでガードする

ランバネイン「新手の火兵が1人！」

シールドでガードしたランバネインは右手の手のひらから弾丸を放ち、カウンターするが弾を曲げることで角度のある攻撃をする出水には当たらない

出水「うおーこえーくらつたら即死だなあれ」

ランバネイン「何か細工があるということか……………？）数の有利を活かした攻撃も手馴れている。なかなか手強い相手だ。こういう場合は……………」

ランバネインは肩甲骨を変化させジェット機構を作り出すとトリオンを噴射して飛

び上がった

緑川「！」

米屋「飛んだ！」

出水「やべっ」

ランバネイン「同時に相手をしないことだな」

ランバネインは飛び上がったことで得た上の有利を活かして3人の頭上に弾丸の雨を降らせる

出水と米屋は近くの建物の影に飛び込んで回避し緑川は建物の中へ避難する

建物の中へ避難した緑川の元へランバネインが強襲する

ランバネイン「1人ずつ潰していくとしよう」

出水・米屋「緑川！」

緑川は冷静だった

自身の横にある消化器を斬って中身をばら撒く事で煙幕として使う

ランバネイン「！（煙幕………!?）逃がさん!!」

ランバネインは姿の見えない緑川を逃がすまいと弾丸を前方に叩き込むがそれを躲しながら緑川はランバネインの足を斬り、機動力を削った

ランバネイン「!!」

緑川「なるほど、なるほど。『勝てる』と思ってるやつは隙だらけだな」

◆WORLD TRIGGER◆

緑川「『物事がうまくいってるときは操られてても気づけない』」

ランバネインは片足を失ったことで膝をつく

ランバネイン「むう……………!!」

緑川「トロいね!」

緑川は自身の得意技であるグラスホッパーを相手の周りに展開して高速で移動する『ピンポール』をしてランバネインの死角から攻撃しようとするが、ランバネインはそれに対応して着ているマントの周りに弾丸を展開して全方位を弾丸で攻撃する

緑川「うおっ」

緑川が居た建物の一部が吹き飛ぶが緑川はグラスホッパーで回避していた
 緑川「あつぶねく、とりあえず足一本」

ランバネイン「分断に成功したと思いきや、逆に誘い込まれていたわけか。1人ずつ
 なら問題なく倒せるという認識……………改める必要があるな……………」

ランバネインは再びジェット機構を使って飛び上がる

米屋「また飛びやがった！落とせ弾バカ！」

出水「『落としてください』だろ。誘導弾^{ハウンド}」

出水は敵を追尾できるハウンドを放ちランバネインを攻撃する

ランバネインはジェット機構で加速して逃げ回る

ランバネイン「!!」

が、東と荒船の狙撃でジェット機構の一部を削られる

ランバネインは左腕の大砲で荒船に反撃する

荒船は即座に建物から離脱するがタイミングを遅らせた1発の弾丸に右腕を吹き飛ばされる

ランバネイン「（飛行機能の再構成まであと20秒……………）少々高く飛びすぎたか

……………！」

ランバネインは着地しながら出水に対して大砲を放つ

出水はシールドで防いだもののシールドを割られる

荒船「あの野郎……！射撃の制度を上げてきてやがる……！！やっぱ下手に手は出せねーか……！！」

東「いや、今が攻め時だ。ガンガン押すぞ。B級全員人型を包囲しろ」

奥寺「奥寺了解！」

柿崎「ここで押すのか!?何が変わったってんだ?東さん！」

東「さつきまでの『人型』は俺たち全員に意識を割いてもまだ余裕を残していた。その余裕を使った正確な防衛と火力を活かした大雑把な攻撃がやつのスタイル、自分の強みを知っている割り切った戦い方だ。だがA級の3人がやつの警戒レベルを引き上げた。反撃の制度は上がったが余裕はなくなつて隙が生まれ始めている。数の優位が生きる場面だ、バラけてやつを意識を散らせ。まとまつてると一発でもつてかれるぞ」

巴・照屋・来馬「了解！」

ランバネインは再構成した飛行機能を使って出水は攻撃を建物でガードしながら躲けていく

ランバネイン（玄界の兵の動きが変わった。なかなかイラつく攻撃をしてくる。いい指揮官がいるな）

米屋「攻撃手配置完了、弾で獲物を追い込んでくれ」

出水「OK、しっかりと仕留めろよ槍バカ」

ランバネインを出水のフルアタックや東の狙撃などで米屋が待機している方へ誘導する

ランバネイン（飛び回りながらでは狙いが定まらないな。かと言ってぬるい機動では的になる。ここは建物で敵の斜線を切って……………）

来馬「ひつ……………！」

ランバネイン「浮いた兵から狩っていくか」

奥寺「かかった！」

緑川「よねやん先輩のほうか！」

来馬にランバネインがジェット機構で加速しながら迫るが、待機していた米屋が建物の窓から飛び降り強襲する

が、ランバネインは体の向きを変え、米屋に向き直る

ランバネイン「なるほど」

米屋「!!」

ランバネイン「こうして敵を呼び込むわけだな。よく理解できたよ」

ランバネインはシールドを出せない米屋に向かって容赦なく大砲を叩き込む

米屋「……………と、思うじゃん？」

突然米屋の前面に何枚ものシールドが展開されランバネインの攻撃を防ぐ

ランバネイン「!?」

来馬・緑川・奥寺・巴「フルガード」
「フルガード」

ランバネイン（周囲の人間が盾を………!!?）

米屋「らああああああ!!」

ランバネイン「おおおおお 《b》!! 《/b》」

ランバネインは弾を集中させてシールドを削るが米屋にかする程度でしか当てられず、胸に槍を突き立てられる

米屋「こっちは『部隊』チームなんで、悪いな」

❖ WORLD TRIGGER ❖

胸にあるトリオン供給器官を破壊されたランバネインのトリオン体が崩壊し、トリオン体崩壊の爆煙が晴れるとそこには生身のランバネインが横たわっていた

ランバネイン「……………見事。よもやこの俺が5人足らずしか仕留められんとは

……………ヴィザ翁の言う通り玄界の進歩も目覚ましい」

米屋「10対1だからな。さすがに勝てなきややべーだろ。悪りーな1対1で戦れなくて」

ランバネイン「……………謝る必要はあるまい。これは戦争だからな」

ランバネインは左腕に着けたブレスレットから『小窓』と呼ばれるものを展開し米屋を攻撃する

米屋「おっと」

が、米屋は上に飛ぶことでその奇襲を回避する

ランバネイン「!」

米屋「さすがに一人で来てるわけねーよな」

ランバネインのブレスレットを目印にワープゲートが開き、中から『黒角』の女が出てくる

ミラ「退却よ、ランバネイン。あなたの仕事はここまでだわ」

東「!」《i》『黒い角』……………『黒トリガー』か……………《i》!」

ランバネイン「はっはっは！不意打ちも通じんのでは完敗だな！楽しかったぞ玄界の戦士たち。縁があつたらまた会おう」

米屋「あつ、その女の人に達也さんから伝言！『受けた恩はちゃんと返す』だつて！！」

ミラ「……………！！！」

緑川「あつ逃げる！」

東「待て、手を出すな。相手が退くなら今はそれでいい、深追いするな。戦果は充分だ」

緑川「えくせつかく倒したのに」

ランバネインが通ったワープゲートが閉じる

緑川「今の門ゲートっぽいのもトリガー？」

出水「らしいな」

米屋「イエー来馬さんナイス罠！迫真の演技！」？

来馬（演技じゃないんだけど……………）

東「みんなよくやった。だが、まだ終わってない。B級合同部隊は南部地区の防衛に戻るぞ」

B級「了解！！」

東「出水、お前たちはどうする？」

出水「玉狛のサポートに行こっかなーと、今フリーなおれらだけみたいなんで」

東「そうか、わかった。助かったよ、3人とも今度なんかメシ奢らせろ」

緑川「ラツキー」

米屋・出水「「じゃあ焼肉で」？」

◇ 警戒区域南西部 ◇

人型の出現の報を受け、嵐山隊から離脱して修たちの元へ向かっている遊真とそれに合流した迅の2人は修たちの元へ全速力で走っていた

迅「おつ未来が動いたな。達也さんの予知通りおれらの戦う相手が1人減った」
遊真「ふむ？」

迅「たぶん敵の大砲使いをA級の3人とB級合同が倒したんだ」
遊真「なるほど、確かに遠距離は面倒だからな」

◇ ボーダー基地本部 ◇

アナウンス『侵入警報、侵入警報』

沢村「来ました！人型の侵入です！」

エネドラ「さあ出て来い猿ども、遊んでやるぜ」

大規模侵攻④

エネドラはボーダー基地へと侵入し、非戦闘員を相手に暴れようとしたがそこにはB級諷訪隊が待ち構えていた

ハイレイン『エネドラ、基地への侵入は命令していない。我々の目的はあくまで雛鳥の捕獲だ。余計なことはするな』

エネドラ「てめーのやり方はまどろっこしいんだよ！先に巢を潰しや雑魚兵も取り放題だ。理にかなってんだろ？」

諷訪「……誰が雑魚兵だって？」

諷訪は堤とともに散弾銃を使ってエネドラに対して範囲の広い面攻撃をする

エネドラ「出たな雑魚が。誰も遊んでくれねーのかと思って心配したぜ」

エネドラは諷訪隊にターゲットを絞り、後退する諷訪隊を追う

しかしエネドラの攻撃を諷訪隊では躲しきれずに諷訪が片腕を失う

B級を諷訪隊ではエネドラには勝てないが、時間稼ぎをするためにエネドラをC級の

訓練室まで引き付け、諏訪と笹森が中に入ることによってエネドラを訓練室に入れることに成功する

エネドラ「さっきのチビ共はチョロチョロ躲してムカついたがてめえらはそうでもねーなあ。なんの芸もねえ、雑魚そのものだぜ!!」

堤「仮想戦闘モードON!!」

部屋が仮想戦闘モードになったことで諏訪の切られた腕も元に戻る

エネドラ「!?（どうなってんだ………!?今ぶった斬った腕が………!?）」

諏訪「何がどうなってんのかわかんねえだろ?間の抜けたアホ面晒しやがって。来いよミスター『黒^{ブラック}トリガー』お望み通り遊んでやるぜ」

エネドラ「『遊んでやる』だあ………!?猿が満足に口利いてんじやねーぞ!!」

挑発されたエネドラはフルパワーで諏訪に攻撃するが攻撃を食らった諏訪は無傷で何食わぬ顔をしていた

諏訪「おーおーナイスな攻撃だな。もっかいやってみろよ、ほれ」

エネドラ「………（このクソ猿………どういう仕掛けだ………?不死身?幻覚

?いや………そんなたいそうな性能のトリガーをこの雑魚が持つてるわけがねえ。つつーことは………）仕掛けがあんのはこの部屋か!!」

エネドラは部屋に細工があると踏んで部屋にフルパワーで攻撃する

しかし見えない壁に阻まれて部屋を壊せない

エネドラ「……………!! (やっぱそうだ、攻撃が通りやがらねえ……………!!)」

諏訪「ご名答。けどわかったとこでてめにやどうにもできねーけどな。大人しくプルプルしてろ、スライム野郎が」

エネドラ「……………!!」

笹森『……………でもこのままじゃ俺らもあいつを倒せませんよ?』

諏訪『いーんだよこれで。本部長と風間を除いた風間隊が来るまでの時間稼ぎだ。俺らはスライム野郎が操作盤コンパネに気付かぬーようにほどほどにこいつの相手すんぞ』

笹森『了解です』

諏訪「さあ、ゲーム開始だぜ」

◇ 基地南西部 ◇

ドカン!!

玉狛第一と達也がC級を守りつつヒュースとヴィザを相手に戦う戦場では1人の男が飛来していた

ヴィザ「!」

烏丸「!?!」

迅「あだだだ……これ勢いつけすぎじゃない?レプリカ先生。間に合ったからいいけど………」

修「!!迅さん!!」

ヒュース「こいつは………?」

迅「はじめまして、アフトラトルの皆さん。おれは実力派エリート迅悠一。悪いがこつからはおれが相手をさせてもらう」

遊真「『弾』バウンド印、セクスタ六重」

ヴィザを遊真の勢いある蹴りで強襲する

迅「おつと間違えた。『おれが』じゃなくて『おれたちが』だった」

達也「来たか………」

修「空閑………!」

達也「悪いがこつからはボクは手伝えないよ」

木崎「わかつている。本部までは俺たちで送ろう」

達也「任せた」

達也はそう言うどエスクードを使って基地へ向かって飛んで行った

遊真『『強』印、^{フリスト}_{ダブル}二重』

遊真は蹴りを叩き込んだ後すぐさま『強』印で強化し殴るもヴィザに躲されてしまう

遊真「悪いね。ここを通す訳には行かないんだ」

ヴィザ「いきなりこれとは……いやはやなかなか躰のいい少年だ」

ヒュースは遊真を狙って超電磁砲の要領でカケラを飛ばす

遊真には躲されたがそのカケラは千佳を庇った修に刺さった

迅「おお、メガネくんナイス」

千佳「修くん、大丈夫!?!」

修「大丈夫だ!逃げるぞ!やつらはおまえを狙ってる!」

迅「そつちは頼むぜ玉狛第一、メガネくん。連絡用通路は使えない、直接基地を目指してくれ。トリオン兵に気をつけろよ」

木崎「了解した」

小南「OK」

烏丸「了解!」

玉狛第一はC級を連れ、後退する

ヴィザ「おっと、これ以上逃げ回られるのは……………御免蒙りたい」

遊真「動くな」

攻撃をしようとしたヴィザを遊真が鎖で拘束する

ヴィザ「……………これは……………（今の蹴りの時すでに布石を打っていたというこ

とか…………）」

ヒュース「チツ……………!!」

ヒュースは動けないヴィザの代わりにカケラを撃ち出そうとする

迅「エスカード」

迅が素早くバリケードトリガーのエスカードで道を塞ぐ

ヒュース「!!（道に壁が……………!?!）」

迅「もうあいつらには追いつけないよ。おれと達也さんのサイドエフエクトがそう

言ってる」

ヒュース「……………サイドエフエクト……………!!」

ヴィザ「やれやれ……………玄界はなかなか曲者ぞろいだ」

ヴィザは『星の杖』^{オルガン}を起動し、自身を拘束していた鎖を排除する

ヴィザ「ヒュース殿、作戦を切り替えましょう。このお二方をどうにかせねば我々は

「雛鳥を追えないようです」

遊真「行くぞレプリカ」

レプリカ『心得た』

遊真（『強』^{ブリスト}印、^{ダブル}二重）

遊真が身体機能を強化して地面を踏み、地割れを起こして体制の崩れたところをヴィザにつけていた鎖を使って投げる

遊真『弾』^{バウンド}印、^{ダブル}二重

遊真も『弾』印を使って追いかける

ヴィザ「力任せとはなんとも豪快な。しかし……空中ならこちらも気兼ねなく全力を振るえる。『星の杖』……?!?」

ヴィザが『星の杖』を起動し遊真を斬ろうとするがブレードに『錨』^{アンカー}印と呼ばれる重しが付けられており思ったように動かさない

ヴィザ「（重い……）いつの間に……?!?」

遊真『錨』^{アンカー}印+『追』^{ハウンド}印、^{クアドラ}四重

遊真は達也の指示で追加した『追』印で対象を追尾する『錨』印を放つ

『錨』印の攻撃をマントでヴィザはマントで防ぐが遊真に蹴りこまれ、墜落したアパートは重さで崩壊する

ヴィザ「うーむ……………先程斬った鎖にもこの重しの仕掛けが……………玄界のトリガーはなかなか多彩ですな」

遊真「ひとつ訊きたいんだけどさ。なんでわざわざこつちの世界を狙うの？ トリオン使える人間が欲しいなら近くの国から捕まえてくればいいじゃん」

ヴィザ「……………ええ、無論そのようにしておりますよ。近隣の国全てに精銳が派兵されております。ここ玄界もそのひとつです。以前は玄界の民を捕らえるのは容易かつたが、この所はそうもいかなくなっている。他の国を攻めるのと同じように準備と戦力が必要になったと言うわけですな」

ヴィザはマントの一部を切り離すことで重石を取り外す

レプリカ『……………！「錨」印はマントで防がれたか』

遊真「……………神が死にかけると必死だね」

ヴィザ「……………!?……………そうですか……………達也殿ですな」

遊真「まあ関係ないけど」

一方の迅は予知で攻撃を見抜きながらヒュースの攻撃を躲していた
ヒュース「(攻撃が当たらない……………)なんだ?こいつは……………」

ヒュースはカケラを集めてブレードを作り、攻撃する

迅はそれを利用して足元を崩して地下道に入る

迅「思ったよりあっさり分断できたな、これでこつちの目的は達成できた」

ヒュース「……………(地下道……………狭さと暗さがポイントだ。こいつもなにか仕掛けをしてくるタイプか……………?)やつは恐らく奴と同じように未来が見えている。だが暗い場所ならこちらにも有利に戦えるハズだ」

ヒュースは牽制にカケラを飛ばして接近する

対する迅は後退して地下道の奥へと進む

ヒュースはカケラを使って姿を消す

迅「!暗さに溶け込んで……………」

迅「ふざけてなんかないよ。おれにはおまえの未来が見えるんだ」
ヒュース「何……………?!」

◇アフトクラトル遠征艇◇

ミラ「ヒュースとヴィザ、エネドラもそれぞれ戦闘開始。金の雛鳥は玄界の基地へ向かうようです。状況は第3ラインへ移行しました。雛鳥の群れにはヒュースによってすでにマーカーを設置済み。指示を頂ければいつでも私のトリガーで兵を送り込めます」

ハイレイン「ヴィザとヒュースの相手は？」

ミラ「ヒュースの相手は通常トリガー。ヴィザ翁の相手は瞬間出力の計測値から『黒トリガー』の可能性が濃厚」

ランバネイン「玄界の『黒トリガー』か、俺の『雷の羽』ケリートーンで勝負してみたかったが……………

ヴィザ翁が相手ではさすがに生き残れまい」

ハイレイン「……………わかった。ヴィザとヒュースたちから『金の雛鳥』が分離れるのを待って残りのラービット7体を全て投入する。長引かせることもない。今日ここで全てを片付けよう」

◇ 基地南西部（遊真VSヴィザ） ◇

ヴィザは重石の付いたブレードをブレード同士で重石だけを的確に斬り捨て軽くする

ヴィザ「ふむ……………重さは多少マシンになりましたかな」

ヴィザは軽くなったことでスピードをある程度取り戻したブレードを使って辺り一体を切り捨てて

レプリカ『「錨」印はほとんど削ぎ落とされたな』

遊真「大丈夫。刃の動きはギリギリ見える」

レプリカ『「錨」印はトリオンの消費が大きい。防がれるなら乱発はできないぞ』

遊真「だな、『弾』^{バウナード}印」

遊真は瓦礫を飛ばす

ヴィザはそれを難なく切り落とす

遊真「『鎖』^{チェイン}印」

しかし、切られた破片から鎖が出てヴィザの杖を封じ、鎖の先に付いた瓦礫で押し固める

遊真「『射』^{アステロイド}印＋『強』印」

ヴィザ「ふむ……………」

ヴィザは杖に仕込まれた手持ちの剣で瓦礫を切り刻み、遊真の射撃を回避する

遊真「！（アレで動けるのか……………」

ヴィザは『星の杖』で遊真の動きを牽制し、一気に踏み込んで遊真を斬る

遊真「『壁』^{エスクード}印」

しかし、遊真がエスクードを使ってヴィザの踏み込みを防ぐ

ヴィザ「ふむ……………これを見越して達也殿は私の足を削っていたわけですか」

実は達也は遊真達が来るまでに1度だけ不意を突いて踏み込み、仕組みを知っているためヴィザの斬撃を避けホーネットを1発だけ足に行くように追尾設定して残りは全て頭を狙って撃ち、さらにその1発を紛れ込ませるように撃つことでヴィザの左足の膝を削っていた

レプリカ『さすがは国宝の使い手だな』

ヴィザ「若さに似合わぬ周到な戦いぶりですな。後学のためにじっくりお手合わせ願いたいところですが……もたもたしては雛鳥に逃げられてしまう」

遊真「……よく言うよ。アンタも囷のくせに。……おまえ、つまんないウソつくね」

◇ 基地南西部（玉狛第一側） ◇

千佳たちを本部へ逃がそうとしている玉狛第一の前にラービットが7体現れる
木崎「新型だ。ここから正念場だぞ」

烏丸「了解です。エスクード」

烏丸は高架下にラービット一体を誘い込みエスクードで身動き取れなくする
烏丸「この道はだめだ。迂回して別のルートから基地へ迎え！」

エスクードで止められたラービット以外は上の線路を横切つて修達に接近する

レイジと小南が一体ずつ近接戦闘で相手をしているが残りの4体がその横をすり抜けるように千佳を狙う

だがそこへアステロイドの雨が新型を襲う

修「!?」

夏目「うわっ何!?!」

緑川と米屋が茶色のラービットに斬り掛かるがラービットの腕を切り落とすには至らずガードされる

緑川「硬っ、なにこいつ」

米屋「ウワサの新型だろ、ウジャウジャいんなー」

修「緑川!! 米屋先輩!!」

緑川「三雲先輩おまたせっす! 遊真先輩は?」

修「空閑は向こうで『黒トリガー』の相手をしてる」

米屋「あー例の最強のやつか、マジかいいなー」

出水「よー京介、先輩が助太刀してやるぜ。泣いて感謝しろよ」

烏丸「泣かないですけど感謝しますよ」

出水「生意気、アステロイド」

修「……………! (射手……………それもA級1位!?)」

出水「そーらこっちだ。ついて来い！」

出水は移動して角度をつけながらラビットを誘導する

烏丸「ここはこの人たちに任せて早く行くぞ！数ではまだ負けるから何体か抜けてくるかもしれない。気を抜くなよ！」

修「はい!!」

烏丸が言うとすぐにA級たちの取り逃したラビットとエスクードの拘束をぬけてきたラビットの2体が千佳達に襲いかかる

一体は烏丸が止めたが、もう一体は抑えられない

千佳「修くん、わたしのトリオンを使って！」

『トリガー臨時接続』

修「……………!?!」

ラビットは危険を察知したのか飛んで下がる

修「(今やるべきことは一体でも多く数を減らすこと！狙うのは他の人と戦ってるやつだ!) 狙うぞ千佳!!アステロイド！」

夏目「でかつ!!」

修は出水が戦っているラビットに狙いを定めて千佳のトリオンで絶大な威力を誇るアステロイドを放つ

出水が相手をしていたラービットは全壊し、原型を無くす

出水「うおっ!?!なんだこりゃあ!?!」

烏丸（千佳か……!?!いや、アイビスじゃない。誰だ……!?!）

ミラ「ラービット全壊……!?!計測機器もエラーを起こしました……!?!」

ハイレイン「期待以上だな、窓を開けてくれミラ。出るつもりはなかったが……」

『金の雛鳥』は俺が捕らえよう」

◆WORLD TRIGGER◆

米屋「新型が吹っ飛んだあ!?!なんだ今の!」

緑川「三雲先輩……………!?!」

修「……………まず1匹!次は正面のやつだ!来るぞ!」

千佳「うん!」

出水「アステロイド通常弾+アステロイド通常弾、ギムレット徹甲弾」

出水の放つ合成弾、徹甲弾はラービットの左半身を大きく削り、動きを止める

修「!!（動きが止まった!）今だ!」

修が放つアステロイドはラービットを全壊させる

出水「おい、メガネくん。おまえ何者だ? トリオン半端ねーな!」

修「玉狛支部の三雲修です、こっちは同じ玉狛支部の雨取千佳と本部所属の夏目さん。さっきのはぼくのトリオンじゃなくて千佳のトリオンをぼくのトリガーで撃つただけです」

出水「あまとりちか……………? 『玉狛のトリオン怪獣』か! おれは出水。おれらで新
型片付けようぜ。そろそろ新たな人型が出てくるハズだからな」

修「はい!!」

千佳「!!?」

夏目「どした? チカ子」

千佳「鳥……………!」

千佳が見た方のビルの上には鳥を展開したハイレインが立っていた

ハイレイン「もう3体目がやられたか、急ぐ必要があるな」

修「人型近界民……………!!」

ハイレイン「『アレクトール
卵の冠』」

修「攻撃が来ます!!!」

木崎「任せろ」

ハイレインの放つ鳥に対してレイジは球数の多い機関銃で撃ち落としていく

出水「誘導弾!!」

出水は足元に細かく割ったアステロイドをばら撒き、ハウンドをトリオン反応追尾にして鳥を撃ち落としていく

ハイレイン「やはり『卵の冠』の情報も玄界に漏れているか………それにしても高い火力、繊細なトリオンの制御、ランバネインと撃ち合っただけのことはある」

出水「この、わくわく動物野郎が」

大規模侵攻⑤

◇ボードー本部・C級訓練室◇

ボツ！

諏訪の散弾銃のアステロイドによる面攻撃がエネドラのトリオン体を削る

だが、トリオン体を液体化させているエネドラには効果は無く一瞬で元に戻ってしま
う

エネドラ（だんだんわかってきた。このクソ部屋の仕組み……オレもこいつらもト
リオン攻撃のダメージがゼロにされるって感じか……？まともに戦うだけムダだぜ。
………なのにピョンピョン跳ね回りやがって、何がしてーんだ？こいつらは）

ドパツ

ガキン

エネドラ「！」

諏訪の面攻撃が液体ではなく固いなにかに当たったような音が鳴る

諏訪「お!?今の手応え………ひよつとして当たりか？」

堤「硬質化したトリオン反応！カバーされた部位パーツを見つけました！反応をマークします！」

諏訪「はっはあ、弱点見つけたぜ!!」

エネドラ「……………あーあーなるほど……………そういうことか」

ドバツ

ガキキキキン!!

諏訪「……………!!?」

諏訪は見つけた弱点を狙って攻撃を集中するが明らかに当たった音が多かった

堤「硬質化の反応が増えた……………!!偽装ダミー……………!!?」

エネドラ「くつくつ……………猿が知恵絞ってんの見んのは楽しいなあ。死ぬまでそのレ

ベルでキーキー言ってる」

突如として諏訪の体内から敵のブレードが出てくる

諏訪「あ……………!!?(コレが情報にあつた気体化攻撃か!?)」

アナウンス『仮想戦闘モード終了』

エネドラが撒いた気体化したトリオンは訓練室のパネルに反応して仮想戦闘モード

が終了する

諏訪「!!チツ……………!!?」

仮想戦闘モードが終了したことにより諏訪のトリオン体が腕を失った状態に戻る

エネドラ「無敵タイムは終わりか？暇つぶしにしかなんなかつたな」

エネドラはそういうとフルパワーの攻撃で今度こそ訓練室の壁を破る

鬼怒田「いかん！『黒トリガー』^{ブラック}が出てきおったぞ！忍田本部長はまだ着かんのか！」

根付「もう少しかかるでしょう……………エレベーターに数百メートルの通路……………訓

練室まではかなり距離があります……………！」

城戸「あの男が、ともに通路を行けばな」

鬼怒田・根付「……………!?!」

城戸「やんちゃ小僧が……………」

城戸の推測通り忍田は本部の外壁を走っていた

目的地である訓練室の外側まで来ると忍田は旋空弧月で外壁を破り、中へ乱入する

忍田「旋空弧月」

エネドラ「!!」

中へ乱入した忍田は真つ先にエネドラに対して旋空弧月を放つ

根付「間に合った！」

鬼怒田「なんつうショートカットじゃ」

忍田「よく足止めした、諏訪隊。おかげで死者はゼロに抑えられた。ご苦労だったな」

諏訪「イヤイヤ、まだ死んでないっスよ」

忍田「鬼怒田さん、悪いが壁を修復してくれ。こいつを逃すわけにはいかないからな」

エネドラ「……………ああ？誰が逃げるって？この程度でオレに勝てると思ってるのか
!?!雑魚トリガーが!!」

忍田「当然だ。貴様のようなやつを倒すため、我々は牙を研いできた」

◆ WORLD TRIGGER ◆

エネドラ（こいつも八つ裂きにしてやりてえが面倒くせえ。気体^{ガス}ブレードで腹から

掻っ捌いてやる)

三上『トリオン展開！気体攻撃です！』

忍田「堤！」

堤「了解です、空調を全開にします！」

エネドラ「……………!?（風で押し戻されて届かねえ……………!?）」

忍田「やつの弱点の情報をくれ」

三上『ダメーも同時に映ってしまいますが……………』

忍田「構わん。何れにしろ、全て斬る」

エネドラは忍田に対して硬質化ブレードの手数の多さで攻めるが忍田は最小限の動きで躲すとカウンターで旋空弧月を使い、的確に弱点カバ―だけを斬っていく

エネドラ「（ピンポイントにダメーだけを……………!?）うぜえな、クソ雑魚がー」

エネドラは3つの水球を作り出し、そこから先程以上の数の細いブレードを出して攻撃する

が、忍田は細いことで脆いブレードを斬り落としながら旋空弧月で尚もエネドラの弱点カバ―を破壊していく

エネドラ（どうなってんだ、止まんねーぞこの猿！雑魚トリガーの分際で……………!!くたばれ!!）

エネドラは足元の亀裂に液体を流し込み忍田の足元から攻撃するも回避されカウンターでさらに弱点カバーを破壊される

エネドラ（ダミーを増やすのが追いつかねえ……………!）

忍田「貴様のトリガーは火力よりもその特殊性が武器だ。ネタが割れば強みを失う。貴様の敗因は、ネタが割れた状態でここに来たことだ」

忍田はそう言つて最後の2つの弱点カバーを斬り捨てた

エネドラ「が……………!?!」

諏訪「マジで全部斬つた！本部長やべえな！」

笹森「援護するヒマなかったですな」

だが、エネドラのトリオン体は崩壊せず、再び液体からブレードが飛び出して忍田を襲う

諏訪「!?!」

液体化して別の場所へ移動したエネドラが姿を現す

諏訪「ああ!?!なんで生きてやがる!?!」

忍田「……………!（土壇場で弱点をカバーから外したのか……………!）」

エネドラ「さすがによく避けたなあ。……………けど、気をつけるよ。今はこつちが風上だぜ」

忍田「!!」

エネドラがそう言った瞬間、忍田の体内からブレードが出て来て忍田に初めてのダメージを与えた

エネドラ「あ？即死しねえな。小癩にも体ん中に盾張ったか？けど手応えはあったぜ。伝達系はズタズタのハズだ。もうまともに動けねえだろ？あ？敗因がどうのとか言つてたなあ、ボス猿さんよ。教えてくれよ、オレの敗因つてやつを」

忍田「……………いいだろう、スグにわかる。私の仕事はもう終わった」
空調の操作が必要なくなったことで戦線に復帰した堤と共に諏訪は火力を集中させる

諏訪（局所防御）

エネドラ「こいつらがオレに勝てるつてのか？」

諏訪（ダミー生成）

エネドラ「雑魚だけで何ができる!!」

堤「おサノ！」

小佐野『了解！スタアメーカー適用！』

銃手・射手用オプシヨントリガー『スタアメーカー』

弾丸が命中した場所に目印をつけることができる。対隠密戦闘などで有効

諏訪「（これでもうダミーはムダだぜ！）日佐人!!」

笹森はカメレオンで姿を隠して後ろから接近し、マーカーされた弱点のみを狙って弧月を振り下ろすもブレードが届く前にエネドラのブレードに貫かれる

エネドラ「消えるトリガーはもう見た。気付かねーとでもおもったか？クソガキ」

笹森「……………」

『戦闘体活動限界緊急脱出』
ベイルアウト

笹森が緊急脱出すると同時に煙幕が張られる

諏訪「弾を集中させろ!!」

エネドラ「（食らうか馬鹿が！トロいぜ!!）」

「そつちがね」

エネドラ「!!」

エネドラが声のする方へ振り返った瞬間、風間隊の菊地原と歌川が姿を現し、マーキングされた弱点カバーを斬り落とす

エネドラ「（こいつらは……………！尻尾巻いて逃げたチビども……………!!最初から姿消してやがったのか……………!!?さっきのやつは真打ちのための捨て駒か……………!!）」

歌川「伝達脳と供給器官を破壊、任務完了」

エネドラ「猿ども……………が……………!!!」

エネドラのトリオン体が崩壊して辺りが煙に包まれる

忍田「ダミーが1度ゼロになった時点でこうなる事は決まっていた。我々の勝ちだ」
菊地原「トドメを刺したのは風間隊つてことで、よろしく」

諏訪「おいてめえ、菊地原！」

◇アフトクラトル遠征艇◇

ミラ「ハイレイン隊長、エネドラが敗北しました」

ハイレイン『そうか、そちらは任せる』

ミラ「了解致しました、回収に向かいます」

エネドラ（このオレが………玄界の猿なんぞに………！）

菊地原「どうします？ こいつ」

エネドラ「………」

達也「そいつは一旦ボクに預けてもらおう」

忍田「!!」

エネドラ「………てめえは………」

達也「久しぶりだね、エネドラ。元気してたかい？」

エネドラ（ミラのやつが回収に来るハズだ………！ さっさと来やがれ………！ なのためにてめーがいてると思ってる………！）

と、その時エネドラのプレスレットが起動しミラがワープゲートで現れる

歌川「!!」

菊地原「人型近界民！」

ミラ「回収に来たわエネドラ。派手にやられたようね」

エネドラ「チツ……………！おせえんだよ！」

ミラ「あら、ごめんなさいね」

エネドラはミラに手を伸ばそうとするがその腕は斬り落とされた

ミラの『小窓』ではなく、達也の腕から伸びているブレードによって

ボーダー組「「!?」」

エネドラ「なっ……………!!?」

ミラ「……………!?!」

達也「こうなるのはわかった。だからボクはやらせないよ」

ミラ「……………!!」

達也は腕から伸びているブレードを変形させてエネドラの腕を回収すると『泥の王』ホルボロスを剥がして腕を捨て、さらにエネドラの心臓にブレードを伸ばしその命を絶った

忍田「……………!!? ……なんてことを!!」

達也「捕虜としてなら死んでても問題ないよ忍田さん。情報は引き出せる……………さて、これで『泥の王』はボクの手の中だ。賢いキミならわかるだろ? ミラ。ハイレインに繋いで」

ミラ「……………わかったわ」

ミラはハイレインに通信を繋がざるを得なかった

ミラ「……………隊長、申し訳ありません。『泥の王』の回収に失敗し、最上達也に取られてしまいました」

ハイレイン『……………!!?なんだと!!?』

ミラ「……………最上達也はハイレイン隊長に繋げと言っています」

ハイレイン『……………くっ……………繋げ……………』

ミラ「了解しました……………これでハイレイン隊長と話せるわ」

達也「ありがと、ミラ。……………さてハイレイン、久しぶりだね。聞いての通り今ボクが『泥の王』を持つてる。そんなわけだからーっ交渉しよう」

ハイレイン『……………!!?交渉だと!!?』

達也「そう、ボクは今君たちがあああの国を攻めた目的の『黒トリガー』を使ってる」
ハイレイン『……………!!!』

ミラ「!？」

達也「キミならこの意味わかるだろ？だからこそ提案だ」

ハイレイイン『……………聞ここう』

達也『泥の王』と『窓の影』の2つと引き換えに、ミラの身柄をこちらで預からせてもらう!!』

ハイレイイン『なんだと!!？』

ミラ「!!」

ボーダー組「!!」

達也「ボクは恩義を感じてる人をキミの元へ置いておきたくないのさ。キミはいざとなったら部下をなんの躊躇いもなく見捨てる。現に今はエネドラをミラに殺させようとし、ヒュースは最悪置いていく気にいる」

ハイレイイン『……………』

達也「だからこそボクは恩人の身柄をコチラで保護したい。……………理由はわかっていただけたかな？」

ハイレイイン『……………いいだろう、だが「泥の王」はともかく、「窓の影」はどうやって渡す気だ？』

達也「簡単さ、今からそっちにミラと一緒に行く」

ハイレイン 『!!』

達也「帰りはどうしてもラッドで帰ってもらうことになりそうだけど、ボクはちゃんと約束を守る男だ」

ハイレイン 『……………交渉成立だ』

◆ WORLD TRIGGER ◆

ハイレイン 「……………交渉成立だ」

出水「……………達也さんとの話は終わった?」

ハイレイン 「律儀だな。待っていたのか」

出水「まあね、アンタが取り乱して攻撃が止んだらしばらく手を出さなって言われてたし」

ハイレイン「……………なるほど、ここまで読んでいたのか」

◇ 基地南西部（遊真VSヴィザ） ◇

遊真は現在、ヴィザの猛攻をなんとか切り傷程度で凌いでいた

遊真「爺さんはさ、自分より強いやつと戦ったことあんの？」

ヴィザ「はて……………有利な相手、不利な相手なら覚えはありますが、真に己より強い
か弱いかは、勝負決して後判ることでありましょう」

遊真「なるほど、強いやつとセリフだ」

遊真はバックステップで建物の瓦礫の中へと隠れる

ヴィザ「おや、撤退……………という訳でもなさそうですね。できれば向こうの決着が
着くまでおしやべりしていたかったが……………」

ヴィザは『星の杖』で遊真が姿を消した建物の瓦礫をさらに壊す

ヴィザ「向かって来るならば手は抜きますまい」

遊真は『偽』印ダミーレバーコンをばら撒きながら瓦礫の中を『星の杖』の斬撃をさわしながら走る

遊真「あの爺さんを倒すには不意を付くしかない」

レプリカ『だが私の事がバレている以上、かなり警戒される。まともにやり合つては分が悪い』

遊真「わかつてる。火力勝負には付き合わない。『響』^エ印^コ」

遊真は『響』印を使って相手の位置を正確に認識し、駆け出す

ヴィザ「む……………？また姿が消えた」

遊真「『強』^{ブリスト}印」

ヴィザ「下か」

ヴィザは遊真の攻撃を見抜き、手持ちの剣で反撃する

遊真「『射』^{アステロイド}印」

遊真は脇腹を少し削られるも追撃として走り回って仕掛けておいた『射』印で足元から放ち、追撃する

ヴィザ「……………ふむ、『星の杖』に対して足下の死角から攻めてきたのは、あなたで8人目ですな。追撃もしつかりしている、なかなか悪くない攻撃でした」

ヴィザは『星の杖』のブレードを集めてシールドとして使い、しつかりと防いでいた

遊真「この野郎……………」

ヴィザはブレードの回転軸を変え、ブレードの間合いを変化させることで遊真から距離を取っていた

遊真「どんどん近づけなくなるな」

レプリカ『こちらの動きに対応されている。もう一度策を練ろう、この相手は意識の外から攻めなければ勝てない』

遊真「……………いや、多分それでもダメだ」

レプリカ『……………!』

遊真「揺さぶり合いじゃ、勝負になんないのはわかった。けどこっちは戦闘体を削られる訳には行かない。達也さんのおかげでこっちにはアイツに見せてない印がまだ沢山ある。それをフルに使って勝負に出る。常に相手に頭を使わせながら仕掛けを作る」

レプリカ『勝算はあるのか?』

遊真「ないと思うか?」

レプリカ『……………いや、それを決めるのは私ではない。ユーマ自身だ』

ヴィザ（また姿を消した……………同じ事の繰り返しでは私には勝てませんよ……………?）

遊真は再び瓦礫に身を隠し、仕掛けを作る

遊真は『隠』印で姿を隠しながら『偽』印をばら撒き自身の位置を隠す

遊真とレプリカは印同士を掛け合わせた複合印をヴィザを囲うように仕掛けていく
 ヴィザは当然仕掛けを防ごうと『星の杖』で攻撃するが、遊真は姿を消したまま躲し、
 さらに印を仕掛ける

ヴィザ（……………来る!!）

ヴィザを囲うように6方向の足元から

『追』印^{ホー}ト^{ネッ}追^ト印、

『変』印^マト^{ホー}爆^ク印、

『追』印^サラ^マ爆^ン印、

『変』印^コト^ブ射^ラ印、

『射』印^ギト^ム強^レ印、

『錨』印^ドト^バ射^レ印^トが飛んでくる

ヴィザの選択した行動はレッドバレットをマントで防ぎ他をなるべく躲しつつ『星の杖』のブレードで防ぐ事だった

だが、ヴィザが躲して移動した先には『壁』印^エト^{スク}壁^ド印が仕込まれており、地面から迫り出した『壁』印を腕で防ぐが浮かされ、『弾』印^バト^ウ七^ド重^セで空中へ飛ばされる

ヴィザよりもさらに上で待っていた遊真は姿を現し、両手にブレードをだす

ヴィザは『星の杖』で対抗するが遊真に当たる前に『糸』印^スト^バ糸^イ印^ダを斬らされ、それを斬った

ことで『錨』印をつけられてしまう

遊真は遅くなつた『星の杖』を『跳』グラスホッパー印で回避する

ヴィザは飛ばされていて遊真へと近付いていくので手持ちの剣で斬り捨てようと考えるが飛ばされていた影響で腕に『錨』印が付いていることに気付けなかった

それでも遊真との距離はヴィザ程の達人でも遊真自身のリーチでは届くはずのない距離だった

そのため遅いが近くにあるブレードで腕の重石を処理して持ち変えようとするだが、遊真のブレードは持ち変えようとした瞬間にヴィザの胸部を貫いていた

◆ WORLD TRIGGER ◆

遊真がしたことはまだ見せていない初見の印をふんだんに使つて相手の処理能力を削ることで隙を生み出し、あえて自身のブレードを見せることによりブレードでの攻撃はまだだと思わせた

遊真が届くはずのないリーチを届かせた理由はレプリカの解析と遊真の『黒トリガー』の複合印の応用で旋空弧月を使えるスコープピオンを作った事だった

スコープピオンにはマンティスという2本のスコープピオンを繋げてリーチを倍にするという技がある

それに旋空弧月を加えれば40メートルもの射程を持つ、かの『生駒旋空』にも匹敵するリーチを手に入れた

それにマンティス特有の見えづらさが加わることで、ヴィザに致命傷を負わせることに成功したのだ

ヴィザ「(馬鹿な、弾を撃つ素振りはなかったはずだ。死角からの攻撃でもない、そもそもこれはブレードだ。これはつまり彼の発想が私の処理能力を越えたということか……………!?) ……………やれやれ、これだから戦いはやめられない」

遊真はヴィザの戦闘体が崩壊し、爆発したのを見た瞬間『弾』印で飛び出し修たちの元へ向かう

ハイレイン「!」

ミラ「!!」

達也「お、ヴィザ翁が負けたか」

ヴィザ『申し訳あ…ません、突破され……した。ご安……を……『星の杖』……………は

無事です……、……しかしお気をつけください。『黒トリガー』の使い手がそちらへ向かっています』

◆ WORLD TRIGGER ◆

達也は現在、忍田本部長に対策会議での条件のことを伝えてミラを連れ、ハイレインのいる戦場に来ていた

達也「やあ、ハイレイン。こうして会うのは久しぶりだね」

ハイレイン「来たか……」

達也「じゃあほいコレ、『泥の王』ネ」

ミラ「トリガー解除……『窓の影』です」

ハイレイン「……確かに受け取った。だが悪いな達也、キミをここで逃がす訳には行

かない!!」

ハイレインはそう言うのと『卵の冠』で魚の弾丸を飛ばしてくる

しかし、達也はトリオン体からエスクードの様に物質化した盾を飛ばしてで弾を防ぐとハイレインの足元の死角から攻撃した

ハイレインは達也の挙動を全て見ていたにも関わらず自身の死角から攻撃されたことに戸惑いを隠せない

達也「わかっててもボクの有利が変わらないからネタバレしてあげるよ。このトリガーの名称は王の切り札^{レプリスコラ}。キミを攻撃したものの正体はキミが出水くんの攻撃を防いだ時にできたキューブをブレードに変化させてキミに飛ばしたんだ」

ハイレイン「……なんだ?!」

達也「キミたちはこのトリガーの一部しかわかってない。このトリガーの能力は自身と自身の半径100メートルに渡って存在する、占有者の居ないトリオンを支配し、半径500メートルに渡って操ることができる」

ハイレイン「……!?だが、キューブは俺が占有者のハズだ」

達也「わかってないなら、キミの弾はトリオンキューブに変えると一旦キミとの接続は消えるんだ。吸収するときはそれに再接続してるだけ、だからキミではボクには勝てない」

ハイレイン「……………くっ……………!!」

達也「キミたちはもう負けだ、大人しくしてもらおうか。先に不意打ちしたのはキミだからね。恨まないでくれよ」

達也はそう言つてハイレインを捕らえようとするが突如門ゲイトが開き、まだ生き残つていたラービットがラッドを通して送り込まれる

達也「今更こんなので止められると思つてんの？」

達也は腕から大量の砲台を作り出して飛ばし、ラービットをオールレンジ攻撃で翻弄し隙を作つて『眼』を撃ち抜き瞬殺する

が、その一瞬で別の改造ラッドを使つてハイレインは遠征艇へと逃れた

達也「……………チツ……………逃げられたか……………」

その後、ヴィザもイレギュラー門ゲイトで逃げられる

迅が足止めしていたヒュースは『金の雛鳥』が手に入らなかつたため予定通り置いていかれ

民間人

死者：0名

重傷：18名

軽傷：72名

ボーダー

死者：0名

重傷：0名

軽傷：10名

行方不明：21名（全てC級隊員）

近界民

死者：1名（最上達也の手による）

捕虜：1名

保護：1名

対近界民大規模侵攻

三門市防衛戦

終結

B級ランク戦編

最上達也④

◇2日後ボーダー本部・会議室◇

現在ボーダー本部会議室には城戸派上層部、忍田本部長、林藤支部長、迅悠一、最上達也が揃っていた

城戸「……………揃ったな。では始めよう」

忍田「今回の議題は捕えた捕虜の扱いと今後のボーダーの動きについてだ」

達也「捕虜の扱いについてはボクから……………、まず本部に侵入した『黒トリガー』使

いは角が脳にまで根を張っているためそれをラッドにでも移し変えれば情報源になるでしょう。迅が捕えた捕虜に関しては今回の敵のトップの直属では無いため恐らく自分のご主人様の為に口は割らないだろう。今回置いていかれたのは彼の恩人を次のアフトクラトルの神にされるため彼はそれに反抗するだろうという懸念がある為です。最後にボクが保護した人については対策会議で言った通り、尋問はしていいですが扱いはこちらに一任してもらいます」

城戸「……………では、その『ワープ使い』の今後の扱いをどうするつもりか聞こう」

達也「彼女には唐沢さんの力を借りて玄界に帰化させたいと考えています」

城戸「……………だが、彼女の角はどうするつもりだ？」

達也「人前では戦闘能力皆無のトリオン体になって角を外せば問題ないハズです。ただし何もなんの枷も付けない訳には行かないと思うのでボクが部隊を作つてそこで監視、経過を見てボーダーに入隊させ、ボクの部隊へ引き込むつもりです」

城戸「……………オペレーターはどうするのかね」

達也「姫様をお願いします。と言つても交渉はこれからですが」

城戸「なるほど、他になにかあるかね」

達也「根付さんに彼女の素性に関する情報操作してもらいたいのと、例のボクが持ち帰つた『黒トリガー』についてですが、あれは起動者が多く使い手次第で性能が大きく変化する物だ、よつて普段は『風刃』と共に本部に置いておき、戦況によつて使い手を選んで使用するのが良いと思います」

城戸「なるほど、キミは誰を推すかね？」

達也「使用者は、ボク、二宮隊長、加古隊長、那須隊長、東隊長、影浦隊長、小南隊長、出水隊員の8名が候補です」

城戸「……………では鬼怒田開発室長、そちらの8名を後日研究室へ集めてデータ収集

と慣熟訓練を頼む」

鬼怒田「はい」

忍田「では、続いて今後のボーダーの動きについてだ……………」

一通り会議が終了し退室した達也は本部のとある部屋へと赴いた
達也「姫様、ルシフェルです。失礼します」

達也はノックをして本名を伝え部屋に入る

瑠花「久しぶりね、ルシフェル」

達也「はっ、姫様もお元氣そうで何よりです」

瑠花「今は姫ではありません。国がないのに王族を名乗っては虚しいでしょう」

達也「はっ、失言をお許しください」

瑠花「失言を許します。ですが今後は姫ではなく別の呼び名を使いなさい」

達也「では、お嬢様と………」

瑠花「様を抜きなさい」

達也「かしこまりました、お嬢」

瑠花「それでは要件を聴きましょう」

達也「はい、実はオペレーターとして私と部隊チームを結成して欲しいのです」

瑠花「わたしがオペレーターですか？」

達也「はい、その通りです」

瑠花「あなたとわたしの2人だけで？」

達也「そうですね、B級ランク戦round6くらいからはもう1人増えると思いま

すが」

瑠花「そうですか、いいでしょう。実はわたしもあなたの為に響子からオペレーター

の技術を学んでいました」

達也「!?……………お嬢が!?」

瑠花「だってあなたは部隊に入っていないから戦闘の時決まったオペレーターがいないのでしょう?故にです」

達也「なるほど、お嬢の英断に感謝します」

瑠花「では忍田に言って申請を出しましょう。思い立ったがきちびです」

達也「お嬢、きちびではなくきちじつですよ」

瑠花「ま、まだこちらの言葉には慣れないのです……………!」

達也「大丈夫ですよ、これから慣れましょう」

こうして達也の部隊結成は順調に進み、B級21位最上隊が結成された

◆ W O R L D T R I G G E R ◆

達也はミラが居る本部の一室へと赴いた

達也「ミラ、ボクだ。入るよ」

達也はノックをしてミラが居る部屋へと入る

達也「やあミラ、気分はどうだい」

ミラ「達也………いえ、ルシフェルだったわね」

達也「どちらでも構わないさ、人前ではさすがに達也じゃなきゃまずいけど。なぜか
玄界ではルシフェルと言うのは有名な墮天使の名前だから妄想癖が酷いやつだと思わ
れるんだ」

ミラ「ふふっ」

達也「酷いなあ、せっかくキミをハイレインから引き離してあげたのに………」

ミラ「ええ、とても感謝しているわ。約束を守ってくれてありがとう、ルシフェル」

達也「どういたしまして、ミラ。ではキミの今後について話をしよう」

そう言つて達也は先程の会議で城戸に許可を取ったことを一つずつ伝えていく

ミラ「そう。思つていたより自由なのね」

達也「もちろんさ、キミは玄界に帰化して国籍日本人になつてもらうんだから」

ミラ「ごくせきというものはよくわからないけれどにつぼんじんと言うのは玄界に数

ある国の中のものにつぼんに住む人と言う解釈でいいのよね？」

達也「だいたいそんな感じ、国籍つてのはキミが日本人だと言う証明証なのさ」

ミラ「そうなのね、本当にありがとうルシフェル。私を救ってくれて」

達也「そんなご大層なものじゃないさ、ボクは恩をちゃんと返したまでさ」

ミラ「ふふっ、私の前では『オレ』でいいのよ？ 貴方が『ボク』と言っているのは昔教えてくれたあの人の為なのでしょう？ だから私の前では本来の貴方でいて欲しいの」

達也「やれやれ、キミには敵わないな………ありがと、ミラ」

ミラ「いいのよ、私がそれを望んでいるんだから」

達也「じゃ、そろそろオレたちの隊室へ行こう。キミの新たな家になるからね」

達也はミラを角無いトリオン体に換装させ、最上隊の隊室に連れていく

尚、隊室では達也と2人きりだと思っていた瑠花が大荒れに荒れたが達也がシヨツピング等に連れていき3日かけて機嫌を直したのはまた別のお話

溜花の機嫌が直った後、達也はB級ランク戦に向けて隊室に備えられた訓練室でオペレーターとの連携を慣らしながら開発室や研究室で『レ・ブリスコラ』の慣熟訓練を行い、日々を過ごしていた

そんな達也だが修が叩かれ、遠征が公開された記者会見が終わってB級ランク戦が近くなった事で二宮隊の隊室を訪れていた

達也「やあマーくん、遊びに来たよ」

二宮「なんでも言っているがその呼び方はやめろ」

達也「いいじゃないかつれないな」

二宮「それよりも要件はなんだ？ただ遊びに来たわけではあるまい」

達也「あく実は一つお願いがございまして……」

二宮「はあ………言ってみろ」

達也「じゃ、遠慮なく。今度のB級ランク戦の初戦か第2戦で香取隊と当たったら1点も取らせず中位に叩き落として欲しいんだよね」

二宮「………香取隊だ?!」

達也「ボクって今ボーダーでの立場を磐石にしたいんだけどその為に後進を育てるって言う実績が欲しいわけ。で、今センスあつてそこそこ強いやつを探していると香取って言うちょうどいいのがいたから忍田さんをお願いして中位で序盤のうちにぶつかれるようにしたいわけ」

二宮「なるほど、テコ入れか」

達也「そゆこと、だから香取隊を中位に落として欲しい」

二宮「まあ他ならないお前の頼みだ。いいだろう」

達也「またまたそうやって弄れたこと言っちゃって、前読んだラノベによるとソレ、捻^{ひね}デレって言うらしいぜ？」

二宮「……………受けなくてもいいんだぞ」

達也「ごめんて、頼むよ」

二宮「ふん、最初から余計な事を言わなければいいものを」

達也「まあよろしく頼むよ」

二宮「わかつている」

達也「ありがと、成功したら焼肉奢るよ」

達也は二宮と話をつけると開発室へと赴き、『レ・ブリスコラ』の慣熟訓練に勤しんだ
そして時は流れて……………

2月1日 三雲隊（玉狛第二）及び最上隊
ボーダーB級ランク戦 開始

◆ WORLD TRIGGER ◆

三上『B級ランク戦第1戦、昼の部がまもなく始まります。実況担当は風間隊の三上、解説は太刀川隊の出水くんと二宮隊隊長二宮さんです』

出水『どうぞよろしく』

二宮『……………ふん』

三上『本日は初日ですので簡単にB級ランク戦の説明をお願いします』

出水『OK、B級は上位、中位、下位と3つにグループ分けされて今22部隊^{チーム}だから上位7、中位7、下位8でグループ内での三つ巴または四つ巴でチーム戦やって点を

取り合う。点を取る方法は敵チームの隊員を倒せば1点、最後まで生き残った1部隊チームにはボーナスで2点が付く。それでランク戦の終わりにB級の1位と2位だったところはA級に挑戦できる。前シーズンの上位の部隊チームには順位に応じて初期ボーナスがある分有利だな』

三上『ありがとうございます。今回戦うのはB級15位松代隊、18位海老名隊、20位常盤隊、今シーズンから参戦の21位最上隊ですが、二宮隊長はどんな戦いになると思いますか?』

二宮『ふん、最上が全員仕留めて終わりだ。勝負にならん』

出水『まあ、元々最上さんは個人戦あんまやつてなくてポイント自体はあまり高くないけど、俺や二宮さんとも正面から撃ち合えるからまともにやったところで勝負にならないってのが俺と二宮さんの見解ですね』

三上『では、他のチームがどのように対策するか、という事ですか?』

出水『まあ最初から勝負になんないんでそれをどうするかは見どころかもしれないですね』

三上『さ、さあ全部隊転送完了。B級ランク戦第1戦昼の部、開幕です』

B級下位は基本的に部隊事の戦術がしっかりしておらず、各隊合流しての総力戦になることが多い

達也「お嬢、敵の狙撃手が居そうな場所をピックアップして貰えますか？」

瑠花『もうやってるわ』

そういう意味では一人の達也は合流の必要が無いため、開始と同時にバググワームを使わず、位置を晒しながら狙撃位置にっこうとしていた常磐隊狙撃手の斎藤の頭をイーグレットで撃ち抜き瞬殺する

三上『これは!? 事前の情報では銃手という事になっている最上隊長が狙撃で常磐隊狙撃手を撃ち抜いた!』

出水『おーでたなー最上さんはポイント足りてないから銃手だけで技量だけで言えば玉狛のレイジさんとかに匹敵するんじゃないかな? ポイントさえ貯まればソッコークパレフェクトオールワンダーで完璧万能手になれる技量を持つてるよ』

二宮『ふん』

三上『では、ブレードも使えるんですか?』

出水『たまに太刀川さんとやってるよ。戦い方は那須隊の熊谷ちゃんに似てるかな。けど完全に受けに回ったら太刀川さんでもなかなか崩せない受けの達人だしブレードだけなら太刀川さんとかには勝てないけどあの人には弾があるからねー』

三上『なるほど、あくまで本職は銃手であると』

出水『あの人の武器は全部あの人の技量ありきのピーキーにチューニングしてあるから今のボーダーでもかなり強い方じゃない?』

そうこうしている間にモニターの奥では達也が松代隊の工作員を倒して残った2人と対峙していた

達也は右手に改造したイーグレットを、左手に改造した弧月を握り、土崎の攻撃を弧月で防いで松代を撃ち抜き緊急脱出させる

味方が居なくなつたことで焦つた土崎をゼロ距離で撃ち抜き緊急脱出させた達也は近くで戦闘している海老名隊と1人減つた常磐隊の戦いに乱入し、左手の弧月で常磐隊長常磐を仕留め右手のイーグレットで海老名隊攻撃手茂手木を撃ち抜き緊急脱出させた

海老名と常磐隊銃手だけで宇都宮は弾を集中させて達也の動きを止めようとするが、達也の堅いシールドの前では意味をなさず、接近されて2人とも首を落とされる

と、そこで海老名隊狙撃手の乙川が好きを晒したと思つたのかイーグレットで狙撃するも達也は的確にシールドを集中させて防ぎ、カウンタースナイプで点にする

これで海老名隊は全滅し残つた常磐隊攻撃手計良を弧月で止めてゼロ距離射撃で吹き飛ばし、試合は終了する

三上『……………せ、戦闘終了！生存点を含めて合計12得点!!』

出水『予想通りとはいえ圧巻ツスねー。今回銃手トリガーも使ってないし、余裕あるなー達也さん』

二宮『ふん、ただ対策を怠っただけだ。元々個人でA級に居たのは周知の事実だ。ならA級などの最上を知っている者たちから情報を集めていればここまで点差はつかなかっただろう』

三上『……………あ、ありがとうございます。こ、この一戦で最上隊の暫定順位は9位まで上昇！早くも中位グループに食い込んだ！次の第2戦の相手は本日夜の部で行われる上位戦、二宮隊、香取隊、王子隊の結果次第となります。おつかれさまでした』

その日の夜、約束通り香取隊を集中的に狙った二宮隊によって中位へと降格し、最上隊の次の対戦相手は香取隊と鈴鳴第一と那須隊の四つ巴になった

ちなみに上位戦と同時に行われた玉狛第二のデビュー戦は、茶野隊が増え修も参戦し

ていたものの、遊真と千佳の前に太刀打ちできずに敗北、玉狛第二は原作よりも高い1位に上がり、次の対戦相手は荒船隊と諏訪隊に決まった

最上達也⑤

◇ポーター鈴鳴支部◇

来馬「お疲れ様みんな。早速だけど今度の第2戦のミーティングを始めよう」

村上・別役・今「はい!!」

来馬「次の対戦相手は香取隊、那須隊、それと今期から参戦の最上隊だ」

村上「香取隊とやるのは久しぶりですね」

今「でも香取隊は鋼くんが香取さんを抑えればなんとかなるわね」

別役「てか、最上隊がやばくないですか？」

来馬「そうだね、最上さんは銃手つて話だけど前の試合は改造した弧月とイーグレッツトだけ完封してたし、太一はヘタに手を出すとカウンターで抜かれるかもしれないから不用意に撃ってはダメだよ」

別役「はい!!」

村上「最上さんは太刀川さんとも互角にやり合えるし、1人でウチの隊全員を揃えた

感じですね」

来馬「でも銃手も狙撃手も恐らく向こうに負けてるだろうから数で押すしかできないね」

村上「そうですね、最上さんはオレが止めますよ。その間に来馬さんは太一にガード任せてフルアタックの形が多分一番いいと思う」

来馬「そうだね、じゃあその為の連携を練習しよう」

村上・別役・今「はい!!」

こうして達也の参戦によりかなり早い段階で鈴鳴が新戦術を獲得した

◇ 那須邸 ◇

那須隊はオペレーター志岐以外が那須邸に集合し、引きこもりの志岐はリモートで音声のみでミーティングに参加している

熊谷「これ、この前の最上隊のランク戦なんだけど銃手なのに弧月とイーグレットだけで勝ってる」

志岐『ウチとしては本職の戦闘データが取れなかったのはかなり痛いですね』

茜「奈良坂先輩に聞いた話だと当真先輩でも単独じゃカウンターで抜かれかねないって言ってたのでわたしじゃ最上先輩は多分落とせないです」

那須「鈴鳴第一ももうずつと勝ててないし、香取隊は初めてやるね」

志岐『それなんですけど、今回四つ巴なんでウチと相性の良さそうな香取隊だけ狙って東隊みたいに生存優先で点差をつけさせないってのはどうでしょう?』

熊谷「じゃああたしが最上先輩か村上先輩を足止めして来馬隊と戦わせる」

那須「その間に香取隊を茜ちゃんと2人で落とす」

茜「はい!」

那須「じゃあMAPはいつも通り市街地Cでいい?」

熊谷「うん」

茜「はい!」

志岐『OKです』

………そして2月5日(水)

B級ランク戦ROUND2

◆ WORLD TRIGGER ◆

◇ 鈴鳴第一作戦室 ◇

別役「あ！鋼さん起きた！」

今「おさらいはバツチリ？」

村上「……………ああ、準備万端だ」

◇ 那須隊隊室 ◇

熊谷「最終確認するよ。ステージは『市街地C』、茜と玲が上を取ってあたしは最上隊と鈴鳴第一を足止めする」

那須「援護よろしくね、茜ちゃん」

日浦「まかせてください！」

那須「私が必ず香取隊を取るわ」

◇◆最上隊隊室◇◆

達也「今回は解説つかずかあ。上位の試合に取られたなあ」

ミラ「そんなに楽しみだったの？」

達也「まあネ。…………お嬢、今回の相手はカメレオン使ってくるのでリーダーのタグ付けよろしくお願いします」

瑠花「わかりました。…………ところで、何故彼女がまだここに居るんです？」

達也「え？ああ、今監視に割ける人員が居ないみたいなのでこのままここにいてもらおうかなと思います…………」

瑠花「……………わかりました」

達也（あれ……………？姫様ちよつと機嫌悪い？）

瑠花「今回の作戦はどうするつもりですか？」

達也「基本的に香取隊狙って潰す予定です」

瑠花「ああ、香取さん美人ですものね」

ミラ「あら、そうなの？達也」

達也「別にそれは特に関係ないですけど……」

瑠花「取り繕う必要はありませんよ。男はそういうものだ和林藤に教わりました」

達也「……………林藤さん、姫様になんてことを吹き込むんだ!!全く」

瑠花「まあいいです。今回の敵の情報は頭に入っていますね？」

達也「……………もちろんです」

ミラ「そろそろ時間よ。いってらっしゃい、達也」

達也「……………いってきます」

瑠花「……………（私が言おうと思ったのに!!）」

◇ 同時刻・香取隊隊室 ◇

若村「今回の相手に警戒するべきは村上先輩と那須さん、そして最上先輩の3人だ。犬飼先輩に最上先輩は二宮さんだと思えって言われた。……………つまりは正面から当

たつても勝てないってことだ」

三浦「そうなんだ……………！……………！……………！データを見た感じだとトリオン量はA級1位の出水くんレベルだし、太刀川さんとも互角にやりあえるって聞いたよ」

若村「……………！……………！……………！葉子もなんか言ったらどうだ!? さつきからケータイばつかいじつて、前の試合でオレら完封されてんだぞ!!」

香取「そりゃそれが今のうちの実力ってことでしょ」

三浦（この前の試合が相当こたえてるな……………）

若村「……………！いい加減にしろよ葉子。ちよつと負けたくらいで毎度毎度……………」

香取「……………！は？『毎度』ってなによ」

若村「今までだつてそうだろうが！最初は攻撃手ランク上げてると思ったら、飽きたとか言つて銃手転向……………！銃手ランクで伸び悩んだら、つまらないとか言つて今度は万能手。ちよつと躓くたびにコロコロとやること変えやがって!」

香取「……………！アタシより銃手ランク下の人に説教されたくないんだけど」

若村「あんだと……………！?!」

香取『『上級者の壁』つてのがあんのよ。マスターになったこともない人間には理解できないだろうけど』

若村「……………！?!」

三浦「葉子ちゃん、それはちよつと……………」

若村「……………」、ああそうだよ……………おまえがたつた半年で上がったマスター級に2年かけて腕磨いて、犬飼先輩に射撃習つてもとどかねえのがオレの実力だよ!!けど、おまえは違うだろう!!訓練もせずにそんだけやれるくせに、なんでもつと本気でやらねーんだ!?!毎回毎回全力出さねえ理由ばつか探しやがって!!『上級者の壁』だど?!いつペンでもまともに壁にぶち当たつてから言いやがれ!!」

香取「……………」

若村「!!」

香取は何も言い返さず言いたいことを言い切つて一息ついた若村の顔面にスマホを投げつける

香取「なに熱くなつてんの、……………だっさ」

若村「てめえ……………」

三浦「……………ろつくん!（チームの雰囲気は最悪だ……………どうにかしてよ）華……………!!」

染井「……………3人とも」

香取・若村「……………」

染井「時間よ」

アナウンス『B級ランク戦、転送開始』

達也はMAPの南西、それもかなり下の方に転送されたがスグ近くで香取を見つける
達也（ラツキーだな。序盤で落としてあとは隊室でボクの実力を見せればいい）

達也は建物をパルクルの要領で飛び回って上を目指すも狙撃手が居るためグラス
ホッパーを使えない香取に追いつく

達也「やあやあ、はじめまして」

香取「……………チツ」

達也「……………態度悪いなあ。そんなんだと烏丸くんにもテないぞ」

香取「……………!？」

達也「まあそれはどうでもいいけど、一つ提案がある」

香取「……………なに？」

達也「キミを鍛えてA級でも余裕でやってけるレベルにしてあげようかって」

香取「は？……………なにそれ、ナメてんの？」

達也「あたりまえじゃん、弱いんだからいつでも落とせる」

香取「ふざけんな!!」

達也が煽ると香取はまんまと乗せられて達也に突撃する

達也「コツチのプレゼンまだ終わってないんだけど」

香取「!?!」

突撃してくる香取に対して達也はエスクードを家の壁から出して香取をエスクードで殴り飛ばす

達也「キミってさ、マスター級だけど実際のところエースじゃなくてサポーターの辻ちゃんとかポイント同レベル程度じゃん。まあエース張るには全く足りてないわけ。対戦相手がバリバリエース居るとこじゃなかったら勝てる程度でしょ? だからボクみたいな1人でも勝てるようにしてあげようと思って」

香取「ふざけたこと言ってんじゃないわよ!!」

香取はグラスホッパーを使いエスクードを警戒してか少し距離をとってハウンドを撃ってくる

達也「まあなんでこれをキミに打診してるかってとこなんだけど、ボクのボーダーでの立場をそれなりにいいとこで固めたいから後進育成の実績が欲しいわけ。で、普段だらけまくって才能だけで勝って当たり前前のやつに勝って調子乗ってるやつ探してたら

丁度いいのがキミってわけ」

達也はシールドで全部完璧に防ぎながら呑気に話す

香取「言いたい放題いいやがって……………!!」

達也「まあキミがその程度でいいって言うならボクは構わないけど、覚悟はあるんだろ？」

香取「!?覚悟……………!?」

達也「そう、覚悟。キミが本気にならないとキミがじやない。キミの大切な人が死ぬんだ。……………なに驚いてんの、あたりまえだろ？弱いやつが他人を守るわけないんだから」

香取「アタシが……………弱い……………守れない……………!?」

達也「キミの、いやキミたちの過去は知ってる。ボクのサイドエフェクトが見せてくれた。2人ならなんでもできるんだろ？ならなんで他に2人もチームに入れたんだ？」

香取「そ、それは……………」

達也「キミの大切な人を本気で死なせたくないなら、この試合の後ボクのとこに来るかボーダーをやめて大切な人を連れて遠くへ引っ越すといい」

香取「……………ムカつく」

香取はハウンドで弾幕を張りながらグラスホッパーで近づき、スコープオンでシールド

ドを割ろうとする

対する達也はシールドを張りつつ右手でトンプソン・コンテNDERをゆつくり構え、香取に照準を合わせる

それを見た香取はシールドを張ってフルガードしようとする

だが、達也が放ったギムレットはチューニングにより威力が大幅に上がっているため香取のフルガードでは防げずシールドごと胸を撃ち抜かれる

『トリオン体活動限界緊急脱出』
ベイルアウット

B級ランク戦ROUND2昼の部は香取が最初に脱落した

香取が下で達也と対峙していた頃、那須と日浦は日浦が1番上に近かったこともあってやや下に転送された那須と香取隊の2人を挟むことに成功していた

若村「ぐっ………葉子の援護に行きてーが下に居る那須さんが邪魔だな」

三浦「どうする、ろつくん」

若村「……………」

若村と三浦は狙撃の射線を切るために壁に沿って隠れるが那須の変幻自在のバイパーが襲うため釘付けにされ動くことができず徐々にシールドが割られていた

若村「那須さんはオレ一人で足止めするから雄太は狙撃手を取ってきてくれ」

三浦「えっ、だ、大丈夫なの？ろつくん」

若村「……………このままじゃROUND1と同じ結果になる……………。なら変わるよ
うに行動しないとイケねーだろ」

三浦「わ、わかったよ!!」

香取が達也に落とされたことを知ったのは2人が別れてスグのことだった

一方、MAPの東側では3人合流した鈴鳴第一を熊谷が1人で足止めしていた

本来攻撃手の熊谷では3人揃った鈴鳴第一を抑えることはできない

しかし熊谷は那須と特訓して本職とまでは到底いかないが足止めできる程度にハウンドとメテオラを使いこなせるようになっていた

射手が本職ではないため姿を見せ、弧月を構えた熊谷による置き弾と両手でのハウンドのフルアタックは鈴鳴第一の意表を突き、来馬の片腕と村上の片足を少しばかり削ることに成功する

これにより警戒した鈴鳴第一を元々射程と弾速重視にチューニングすることで設定の隙を減らした熊谷の本職並の早さで放たれ、尚且つ弾数をかなり多くしている

更には、大きく弧を描くハウンドと直線のメテオラによる片手での時間差を利用した擬似サラマンダーなど数多くのパターンを用いることにより鈴鳴第一の動きを封じることに成功していた

そしてなにより転送位置が悪く高台を那須隊に抑えられてしまっていたため鈴鳴第一の狙撃手も合流していたことが大きかった

熊谷(ここまでは上出来、あとは玲たちがどれだけ早く香取隊を落とせるか……!!)そして運はさらに那須隊に味方する

香取を倒した達也が鈴鳴第一の後ろから迫ってきていたのだ

メテオラの着弾時の音から那須隊の思惑を理解した達也は少々遠回りをして鈴鳴第

一の南からバググワームを着ることなく近づいて行った

数多くのメテオラにより射線を切る建物がなくなくなってきた鈴鳴第一はここへ来て後ろから迫る達也にも警戒しなくてはならなくなりガードが緩む

トリオンを使い切る気である熊谷は攻撃の手を緩めることなく弾幕を張る

鈴鳴第一は銃手の来馬が必至に撃ち返していたものの高低差と建物、隙のない弾幕で熊谷になかなか当てられないでいた

鈴鳴第一は弾幕が届かず残っている南側の住宅を盾にすることで達也の狙撃の射線を切っているつもりだった

達也のイーグレットは達也のトリオン量が多いため人より射程にボーナスがある

そこに目をつけた達也はボーナスで伸びた分の射程を切り詰めて威力に回すことで、アイビス程ではないにしろコンクリートでは無い普通の住宅の壁ならばなんなく壁抜きでできる威力を持っていた

そして達也は壁抜きスナイプで来馬の右腕を吹き飛ばす

達也は右手のイーグレットをそのままに左手にキャリコム950を出し、住宅を挟んだ曲射で鈴鳴第一にホーネットの雨を降らせる

達也が銃のモデルをキャリコム950にした理由はその大きさと連射性の高さである

ボーダーの技術でモデル化されたキャリコム950は二宮隊の犬飼などが使うP90タイプよりも小型でありながらそれに匹敵する連射性の高さを誇る

威力はもちろんP90の方が上でシールドを使われればたとえ二宮であつてもやるぶことはできないであろう威力しかない

しかし達也の技術とホーネットの性能と合わせることでそれは敵を倒せる武器となる

達也が銃手として二宮を相手に互角に立ち回れる理由は1発撃つ事に隙が生まれる代わりに二宮であつても一撃必殺となるトンブソン・コンテナダーの1発を正確に当てる技術とキャリコム950のホーネットによる射手トップレベルの出水や二宮と同じレベルの追尾設定を銃手で、しかも連射性の高いキャリコム950でできることにある

ハウンドやホーネットの追尾性能の強弱の設定は威力や弾速などを細かく設定できる

銃手の方が細かく追尾設定をいじることができる

銃手は連射をする分どうしても多くの弾を一齐に撃つ射手に比べると設定が曖昧になつてしまう

しかし銃手は射手と違い銃口の向きによる射角設定が細かくできるといふ強みも存

在する

達也はそれらを利用することでトンプソン・コンテNDERの射程から逃れる敵をキャリコM950で倒し、ホーネットを防ごうとしてシールドをだしたり足を止めると防衛不可のギムレットで撃ち抜くという必勝パターンを確立した

そしてその高い技術を誇るホーネットが鈴鳴第一のシールドをすり抜けるようにして来馬を襲い、それを庇った別役と村上の防衛を崩した

熊谷は前述の通りここでトリオンを使い切る気でいたためホーネットって崩れた鈴鳴第一を熊谷のフルアタックが襲う

この攻撃で別役が落とされ、来馬も両腕を失ってしまった

唯一レイガストとシールドで凌ぎきった村上は来馬が両腕を失ったのを見るとスグにレイガストのスラストで来馬の元を離れる

ここで村上が上手かったのは逃げた先の弾幕が薄く、メテオラの爆煙で熊谷からは離脱したことすら見えていない場所だということだ

村上は判断力に優れる隊員だ

足を削られ少しばかりバランスが取りずらく踏み込みが甘くなってしまふ現在の足の状態では太刀川たちと互角に渡り合える達也の相手は無理だと判断した

判断してからの村上の行動は早く、熊谷から回避が見えていなかったのか熊谷はずつ

と来馬の方へ弾を放っている

なので村上は熊谷の後ろをとって奇襲することにした

那須隊が香取隊の若村と三浦を追い込んでいたため来馬が那須隊に落とされれば鈴鳴第一の順位を越えられるかもしれないため来馬は村上の為の時間稼ぎの意味も込めて固定シールドと普通のシールドでの局所防御に残りの全トリオンを回して耐えていた

そして鈴鳴第一と偶然にも思惑が重なった達也がギムレットで来馬が背を預ける家の中から来馬を撃ち抜き、那須隊の点を横取りする

そしてそれと同時に村上が熊谷を倒し離脱する

だが達也は目敏く村上を目視で捉え、シールドをいくつにも分割して地面と平行に張りその上を走ること達也は最短距離で村上にをホーネットの有効射程内に入れる

ホーネットの有効射程内に入った村上をホーネットの追尾設定による時間差攻撃でのオールレンジ攻撃が襲う

レイガストとシールドで必至に防ぐ村上だがレイガストでホーネットを防いでいる間にイーグレットでシールドごと撃ち抜かれて緊急脱出した

達也「これでようやく3点目か……予想してたより那須隊が強いな」

そう呟いた達也はMAPの北西へと走った

那須・日浦VS若村・三浦の戦いは若村が那須の気を引いて三浦が離脱したあとカメレオンで姿を消して那須の視界外まで逃げてからバツグワームに切り替え、建物の中に隠れたことで那須が見失い見事に時間を稼いでいた

ここで三浦は1ついい判断をし、日浦は失策した

日浦の失策は那須の気を引いた若村に自分も気を引かれ、三浦を見失ったことだ

三浦のいい判断は位置が割れている日浦をスグに取りに行くのではなく、那須が戻ってこないようにと日浦に気が付かれないように気をつけながら日浦の位置を捉えつつ自身が身を隠すことだった

実際のところは三浦が自身の実力があまり高くないという自覚から来る待ちだったがこれが今回は那須隊に対する効果的な策となった

三浦を見失った日浦は慌てて三浦を探す

那須は姿を隠した若村を探しつつも三浦のことも警戒しなくてはならない

そして熊谷と鈴鳴第一が落とされそつちに気が行った一瞬の隙を突いて三浦が日浦を倒し、若村も那須のトリオンを細かい傷で削って落とされた

続いて位置がバレていた那須が達也に狙撃される

那須はなんとか反応し急所は避けるがトリオンの漏出により緊急脱出ベイルアウト

だが那須はタダでは落ちず最後の意地と言わんばかりに落ちる寸前でパイパーを三浦の方向へ放ちながら落ちていったため自身の位置がバレるとふんだ三浦が自発的に緊急脱出ベイルアウトしたことで戦闘が終わった

隊	得点	生存点	合計	最上隊	4	2	6	那須隊	2	2	香取
1		1	鈴鳴第一	1							
					1						

玉狛第二

◇ 那須隊作戦室 ◇

日浦 「那須先輩！」

志岐 「おつかれさまです」

熊谷 「大丈夫？」

那須隊作戦室では先に落ちた2人とオペレーターの志岐が最後に落ちた那須をベツ
ドルームから迎える

那須 「ごめん……………1点しか取れなかった」

熊谷 「何言ってるの」

日浦 「いつも点を取ってもらってるんですから……………わたしの方こそ三浦先輩
見失っちゃって……………！どうわあぁ〜！」

志岐 「はいはい、泣くな泣くな」

◇◇ 鈴鳴第一作戦室 ◇◇

別役「うう……何も出来なかったっす……」

来馬「今回は完璧に那須隊にしてやられたね」

村上「今回の那須隊は完全に俺対策でしたね」

来馬「うん、今回はダメだったけど新しい陣フォーマーション形は鋼が居ない時や戦えない距離の時に絶対活けると今回でわかっただけでも収穫だ。また特訓して煮詰めよう！」

別役・村上・今「二はい!!」

◇◇ 香取隊作戦室 ◇◇

香取隊の作戦室では試合が終わってから香取が不貞腐れてベッドルームで突っ伏ししていた

香取「もうやめる。ボーダーやめる」

三浦「葉子ちゃん……そんなこと言わないでよ」

香取「最上……さん、に言われた。アタシ程度じゃ大したことないって。実際スグに落とされたし。落とされて言い返せなくなった自分が嫌いだ。だからやめる」

染井「今やめても余計に惨めだと思っけど？」

香取「そういう言葉がほしいんじゃない！ムカつくんだよ最上隊！元A級かなんか知らないけど急に出てきたポツと出のクセに！ムカつく！ムカつく！」

染井「やめたいならやめれば」

若村「華さん……………」

染井「葉子はやりたいことをやったほうがいい。そういう性格だから」

三浦「……………葉子^{ヨイコ}ちゃん、もうちよつとだけががんばってみようよ。葉子^{ヨイコ}ちゃんが最上さんにムカつくのは、きつと最上さんがうらやましいからだよ」

若村「……………」

三浦「最上さんみたいにはなれなくても工夫して、作戦立てて、勝てるようになろうよ。ランク戦は始まったばかりだ、まだ全然遅くないよ」

香取「……………だつてアタシ、工夫とか勉強とか苦手だもん……………」

染井「大丈夫、最上さんに弟子入りを打診されたんでしよう？悔しいって思えるなら苦手でもできるハズだから」

香取「……………うん……………最上隊の作戦室行ってくる」

香取は強くなる覚悟決め、強さを求めて達也の元へ向かった

◇ 最上隊作戦室 ◇

達也「やあ、来ると思ってたよ。香取さん」

香取「……………ムカつくけど、アタシは悔しかったから強くなりたい。……………弟子に……………して、ください」

達也「フフ、満点だ!!キミが悔しいから強くなりたいってところが気に入った!!じゃあ早速トリガー構成から弄ろっか」

達也は他人にはあまり見せられないような笑顔で香取を弟子に迎え入れた

◇ WORLD TRIGGER ◇

達也「弟子入りするにあたってまずはチームメイトと居候を紹介しておくよ」

香取「……………はあ……………?」

達也「我がオペレーターの忍田溜花。通称お嬢、16歳」

溜花「……………よろしくね、香取さん」

達也「それでウチに入るために特訓中の居候、ミラ、カナダ人の23歳」

ミラ「紹介とはいえ女性の年齢を堂々と言うものじゃないわ」

達也「ま、まあ紹介が終わったところで、まず先に言っておく、ボクは自称ではあるが効率厨だ」

香取「効率厨……………」

達也「そ、つまり効率いいのが大好きだからボーダーの万能手達にはちよつとイライラすんのネ」

香取「……………なんで？」

達也「そりゃあ銃の枠が1つなのに合成弾を使ってないから」

香取「そもそも銃手で合成弾って使えるの？」

達也「結論から言えば使えるよ。ただしアステロイドとハウンドといった1つの銃で2種類の弾丸を使うことはできなくなるけどネ」

香取「じゃあなんでそれが万能手だけの非効率になるわけ？」

達也「万能手は攻撃手トリガーで枠が1つまたは2つ埋まるだろう？だから片方1種類ずつしか入れない人がいる。例えばキミとかA級なら木虎とか佐伯くんとかかなく、銃手の例外として里見くんも」

香取「……………まあまあいるのね」

達也「そもそも銃トリガーの1番の長所は2種類の弾丸を1つの銃で撃ち分けることで生まれる切り替えの速さだとボクは思ってる。なら1種類しか弾を使わないなら1番の長所を潰していることになる」

香取「……………言われてみれば……………そうかも」

達也「だからこそそのロスを取り返すための合成弾だ。キミのアステロイドをギムレットに変えるだけで攻撃力がアップする」

香取「確かにギムレットならシールドも割れる……………」

達也「あとは機動力の強化だ。今年から参戦した玉狛第二のエース、空閑遊真くんはキミとよく似たタイプの攻撃手だ。そんな彼の機動力を強化するトリガーが2つある。まあキミのことだからどーせ玉狛第二のログ見てないだろうから今回はサービスで答えを教えたい。グラスホッパーとスパイダーだ」

香取「スパイダー？糸ってこと？」

達也「そ、糸を足場により立体的に変則的な動きで敵を翻弄している。彼にとって糸は足場であり盾だ」

香取「……………盾……………」

達也「気がついたかい？盾ってことはつまりシールドを張ることが減る……………つまりは攻撃の手数を増やせることに繋がる」

香取「……………!!」

達也「だからキミのトリガー構成はメインにスコープオン、ギムレット、シールド、グラスホッパー。サブにスコープオン、スパイダー、シールド、バググワームだ。これでキミは攻撃力だけに關して言えば風間くんすら越えられると思ってる」

香取「……………?!?……………攻撃手2位の……………」

達也「風間くんの強さは攻撃力よりも技術力だからネ」

香取「……………」

ミラ「あら、上げて落とすなんて性格悪いわね、達也」

達也「……………ミラ、やけに黙ってると思つたら急に毒吐くネ」

ミラ「だって貴方が師匠なんて見ててすごく面白いじゃない?」

達也「そうかなあ、まあいいや。コレからキミにはあるメニューを毎日やつてもら
う」

香取「……………メニュー?」

達也「そ、詳しい内容はこの紙に書いてあるけど大まかに言えばスパイダーとグラスホッパーを使って機動力強化、そしてスパイダーによる高機動でも正確に攻撃を当てられるようになってもらうこと、それからボードーのトップランカー達を倒すこと。この3
つだ」

香取「……………反復練習苦手なだけで……………」

達也「心配はいらないさ、キミの隊の3人に手伝わせて状況のパターンを複数作って毎日違うパターンをこなせばスグには飽きないさ」

香取「……………全部アンタの掌の上ってわけ」

達也「まあキミのことは性格と想い人位はわかるからネ」

香取「なっ……………!!」

瑠花「あら、そうなの？」

達也「おや、お嬢は恋愛に興味が御ありますか？」

瑠花「!?……………あ、いや……………その」

達也「まあお嬢もお歳頃ですから同然かもしれませんネ」

瑠花「……………」

ミラ「達也はそのうち生身を刺されるかもね」

達也「!?」

達也は香取にメニュー表を渡し、トリガー構成を変更して初日を終えた

そして達也はその日から風呂と食事の時以外は常にトリオン体で過ごすようになった

◆
W
O
R
L
D

T
R
I
G
G
E
R

◆∩
◆
幕
間
◆
∩
玉
狛
第
二
回
戰

◇◇ランク戦観戦室◇◇

武富『B級ランク戦新シーズン！二日目・夜の部がまもなく始まります！実況はスケジュールがうまいこと空いたわたくし、武富桜子！解説席には先日の大規模侵攻で一級戦功をあげられた……東隊の東隊長と草壁隊、緑川くんにお越し頂いています！』

東『どうぞよろしく』

緑川『どもつす』

茶野「あつ、解説東さんだ」

藤沢「見とこうぜ」

武富『今回の注目はなんとと言っても前回完全試合で10点をあげた玉狛第二！注目度の高さからか会場にもちらほらと非番のA級の姿が見られます！』

達也（ボクの試合も前回パーフェクトだったのに解説すらつかなくったんだけどなあ）

武富『さて東さん、一試合で10点というのはあまりお目にかかれませんが……』
東『いや、すごいですね。それだけ玉狛第二が新人離れしてるってことでしょう』

緑川『遊真先輩は強いよ、あつという間にB級上がってたし』

武富『緑川くんは玉狛の空閑隊員と個人で戦ったというウワサが……』

緑川『うわ、その話ここでする？8—2で負けました！ボツコボコでした！でも今度また10本勝負する約束したから次は勝つよ！』

緑川が武富に話を振られ、苦い思い出である遊真との10本勝負の話をする

そしてそれに1人のA級隊員が興味を示した

黒江「駿が負けたんですか？8—2で？」

米屋「いい勝負だったぜ」

武富『玉狛第二の今日の相手は接近戦の諏訪隊に長距離戦の荒船隊、戦法が明確な部隊です！』

東『順位が低い玉狛第二はステージ選択権があるので、まずは地形で有利を取りたいところですね。……それに前回もそうでしたが玉狛の三雲隊長のポジションが以前の射手から工作兵に変わっているので今回は三雲隊長の活躍が見れそうですね』

武富『確かに……さあステージが決定されました！玉狛第二がえらんだステージは……。「市街地C」！坂道と高低差のある住宅地ですね！』

東『……………!?!』

武富『しかしこれは狙撃手有利なステージに見えますが？』

東『狙撃手有利……………ですね。道路を間に挟んで階段状の宅地が斜面に沿って続く地形です。登るにはどこか道路を横切る必要があるので狙撃手が高い位置を取るとかな

り有利です。逆に下からは建物が邪魔で身を隠しながら相手を狙うのが難しい。射程がなければなおさらです」

武富『玉狛にも超強力な狙撃手があります。高台を取ればあるいは………という作戦でしょうか？』

東『うーん、どうだろう………狙撃手の熟練度が違いますから普通にやれば分は悪いと思いますね』

武富『と、なると狙撃手のいない諏訪隊は………』

緑川『いやー超きついでしょ。上取られたら動けないよ。今頃諏訪さん切れてるだらーなー』

◇ 諏訪隊作戦室 ◇

諏訪「はあ!?市街地『C』!?ぎっけんなクソMAPじゃねーか!大人しくAかBにしとけよ!」

諏訪隊の作戦室では緑川の予想通り諏訪が切れていた

堤「こりやなかなかきつい………」

笹森「玉狛は狙撃が怖くないんですかね?」

小佐野「スタートはバラバラだからまだチャンスあるよ」

諏訪「取られる前に全力で高台取るしかねーな！ここで勝ちや上位入りだ！やるぞ！」

堤・笹森・小佐野「「おう!!」」

◇◇荒船隊作戦室◇◇

荒船「市街地『C』……………!?!」

加賀美「狙撃手有利MAPじゃん、なんでここ選んだんだろ?」

半崎「狙撃手とやるの初めてなんじゃないすか?」

穂刈「助かるな。オレたちにとっては」

荒船「一応玉狛第二の狙撃手には注意しろよ。あとはいつも通りだ」
半崎・穂刈・加賀美「「了解!」」

◇◇玉狛第二作戦室◇◇

修「今回の相手は荒船隊と諏訪隊だ。荒船隊は全員狙撃手だけど、隊長の荒船先輩だけマスタールランクの一流攻撃手でもある」

遊真「荒船先輩だけは対狙撃手のセオリーが効きにくいってことだな」

修「その通りだ、他の2人もレベルが高い。今の千佳に太刀打ちしろって言っても無理なのは見えきってる」

遊真「じゃあどうするんだ？」

修「今回は狙撃手の位置の方角を誘導しやすいMAPを選んで千佳で徹底的に狙撃ポイントを潰して乱戦に持ち込む」

千佳「まかせて」

遊真「乱戦になったらおれの出番って訳だな」

修「そうだ。狙撃ポイントを潰す間は空閑と千佳は合流して空閑は千佳のガードについててくれ」

遊真「了解だ、隊長」

修「宇佐美先輩はぼくのサポートと一緒に敵の方角の特定をお願いします」

宇佐美「りよーかい！まっかせて〜」

修「よし………行こう！」

アナウンス『B級ランク戦転送開始』

◇ランク戦観戦室◇

武富『さあ転送完了！各隊員は一定以上の距離を置いてランダムな地形からスタートになります！そして荒船隊の3人と三雲隊長がバググワームを起動！リーダー上から姿を消した！しかし玉狛の狙撃手がバググワームを起動していない！狙撃手3人の荒船隊、やはり戻らず高台を目指します！半崎隊員がいい位置に転送されたか！諏訪隊もそれを追う！玉狛第二も……………おつと追わない！空閑隊員と雨取隊員が合流を目指す動きをしている！』

東『転送直後は一番無防備な時間帯ですからね、合流するのはあります（たが……………）』

狙撃手3人の荒船隊と相性が悪い諏訪隊の笹森は荒船隊に高台を先越されて抑えられそうな状況に焦り駆ける

笹森（このままじゃ荒船隊に上を抑えられる……………！転送位置が悪かった、逃げ……………！）

だがそんな笹森の上着を掴んで諏訪が路地に引っ張り込む

笹森「!?」

いきなり引つ張られて動揺する笹森の眼前を狙撃手の弾丸が通過する

笹森「諏訪さん！」

諏訪「飛び出すな、壁に張り付いてねーと死ぬぞ」

武富『笹森隊員間一髪！』

東『穂刈の牽制ですな、躲されましたが諏訪隊は進みづらくなつた。いい仕事です』
武富『この隙に荒船隊長も脇をすり抜けて登っていく！荒船隊が完全に上を取つた！』

諏訪「クソツタレ、めんどくせー展開だぜ」

荒船「ここまでは100点だな」

だがここで南のMAP下から千佳のアイビスによる砲撃が荒船を襲う

荒船「！」

半崎「撃ってきた!？」

荒船「素人が……位置がバレバレだぜ」

荒船隊の3人は玉狛第二の千佳と一緒にいる遊真に狙いを絞り3人でそれぞれイーグレットによる狙撃を行う

が、二宮隊隊長二宮匡貴の2倍を越えるトリオン量を誇る千佳のシールドを破ることができない

遊真「千佳、今光ったところにもう一発だ」

千佳「うん！」

千佳は遊真の指示通り荒船のマズルフラッシュを狙いにアイビスで砲撃を放つ

荒船は余裕を持つて躲すが自分がいた家はタダの瓦礫と化した

武富『この威力！もはや砲撃！玉狛第二、意外にも撃ち合いを挑んだ！東隊長、この展開はどう思われますか！』

東『なるほど……………玉狛第二の分が悪い……………と言いたいです。雨が雨取隊員のトリオン量を甘く見てましたね。通常よりも少々広げているシールドで荒船隊3人のイーグレットをもものともしない硬さとは……………しかし砲撃に関しては下からでは荒船隊の動きが見えないため五分と言ったところでしょう』

武富『東隊長の解説通り撃ち合いはお互い決定打にならない』

東『……………いや、端から勝つ気は無いようです』

武富『……………え!?!』

その時荒船隊のオペレーターから警告が入る

加賀美『荒船くん!!』

荒船「!」

玉狛第二を狙撃しようと構えた荒船の横から諏訪のショットガンが火を吹き荒船の

右脚を削る

諏訪「はっはあ！よオ荒船!!」

荒船「チツ……………!!『2対1』か……………!!」

武富『あーつと!!砲撃の陰で諏訪隊が登って来ていた!!』

東『さっきの砲撃は諏訪隊の援護ですね。長距離戦で荒船隊に勝てないのは織り込み済み、エースの空閑隊員を一緒に居させたことで奇襲が無いと思わせたんですね。ステージ選択から敢えて状況を荒船隊有利に偏らせることで諏訪隊と玉狛第二の利害を一致させた。玉狛第二は地形戦をよく練ってますね』

修「荒船隊を捕まえた!こっから乱戦に持ち込むぞ!」

遊真「OK、こっからはおれの仕事だな」

修「千佳はここから予定通り常にシールドで全身を守れるようにしながら敵の目を引いてくれ」

千佳「……………うん、わかった!」

修「空閑!点を取りに行くぞ!」

遊真「おう!」

一方、MAP北側では諏訪が散弾銃特有の攻撃密度で中距離を持たない荒船を一方的に攻撃する

武富『荒船隊有利から一転！玉狛の砲撃を隠れ蓑にして諏訪隊が獲物に食らいついた！』

加賀美（玉狛に気を取られて諏訪隊が消えたのを見逃してた………！）ごめん、私のミス！

東（砲撃の圧力もさることながら、いかにも狙撃手が撃ちたくなりそうな動きを玉狛第二がしていたのが大きい）

中距離での攻撃手段を持たない荒船は車を盾に諏訪の攻撃を凌ぐ

武富『これは完全に銃手の距離だ！荒船隊長、さすがに苦しいか！』

東『いや、これは釣りですね』

諏訪が車を撃ち抜いた瞬間に荒船隊の半崎がイーグレットで諏訪の頭部を狙撃する

武富『あーつと!』

荒船『……………!』

諏訪は頭部のみ小さく集中的に展開したシールドで狙撃を防いだ

諏訪「大当たりだぜ」

半崎「げっ、マジ？」

堤「半崎の位置確認！」

武富『ヘッドショットをピンポイントで防御!』

東『半崎の狙撃の正確さが仇になりましたね』

武富『なるほど!』

東『通常余程のトリオン差がない限り盾^{シールド}単品で狙撃は防げませんが狙いを読んで盾^{シールド}を集中すれば防御が可能です!』

武富『……………しかし一点読みが外れば死んでいた!諏訪隊長、なんとという胆力!』
だが、狙撃を防いだ隙に逃げた荒船を追う諏訪をさらに狙撃が襲う

諏訪は再び集中シールドで頭部を守るが左足の膝から下を吹き飛ばされてしまった

武富『さらに1発!今度は防げなかった!目の前の荒船隊長に追いつけない!』

東『しかしこれで荒船隊は全員の居場所が割れた。この距離でこれはでかいですよ。

諏訪も脚の1本は必要経費と思ってるでしょう』

笹森「諏訪さん、退がりますか?」

諏訪「アホ言え、こっからだぜ!」

笹森「ですよね」

諏訪「見失うなよ堤!」

堤「もう追いつきます」

加賀美「下から来る!気をつけて!」

半崎「見えてますよ、堤さんでしょ?」

加賀美「違う！玉狛よ!!」

遊真がバツグワームをつけて半崎を奇襲する

遊真の鋭い一閃を半崎は仰け反ることで急所を外す

半崎「うお、速っえ！」

遊真（急所を外された、もう一発……………!）

遊真がバツグワームを解除し、今いる建物の屋上にある入口の壁を足場に切り返して
もう一度半崎に攻撃を仕掛ける

しかし下から登ってきた堤の散弾銃によるフルアタック両攻撃が遊真より先に半崎を襲う

遊真は空中で体を捻って巻き添えを躲したが半崎は堤に落とされてしまった

半崎「こりやダルいわ、すみません」

武富『半崎隊員緊急脱出!』
ベイルアウト

東『狙撃手は寄られるところになります、寄らせちゃだめですな』

武富『先制点は諏訪隊!そして依然堤隊員の間合い!ここで2点目が動くか!』

遊真はサイドステップで堤の射撃を躲しつつ距離を詰める

堤（速い……………でもそのくらい動けるってことはもう知ってるんだよ）

堤は遊真の動きを読んで飛び上がった所を狙うが遊真はグラスホッパーを使って即座に地面に戻ると反応しきれていない堤を腹から上下真つ二つにする

武富『おおお!?今の動きはグラスホッパー……………!?空中機動を可能にするジャンプ台トリガー!前回は使ってなかった気がしますが……………!?』

緑川『オレが教えました、昨日』

武富『昨日!?なんと、普通に覚えただった!』

緑川『いや、なんか元から入れてたけど実際に使つてるとこ見たいって言うからお手本を昨日見せたただけだから覚えただけではないよ』

黒江「あのバカ……………ライバル強くしてどうするの……………」

米屋「オレはああいうの好きだぜ」

緊急脱出した堤は作戦室にあるベッドに落ちた

堤（しまった……………!攻撃手の片手が空いてたら仕掛けを警戒してしかるべきなのに……………!）

堤はすぐさま起き上がってオペレーターの小佐野の元へ向かう

堤「……………もうしわけない!」

小佐野「OK、OK。つつみんは1点獲ったから悪くない」

武富『さあ玉狛第二も1点取り返して次の相手へ!狙うは穂刈隊員!徹底して荒船隊狙いだ!』

緑川『狙撃手が残つてるとめんどくさいからね』

狙われた穂刈が遊真を狙撃するが遊真は姿勢を低く走ることでの的を小さくし、集中シールドで確実に狙撃を防ぐ

武富『弾の出処がわかっていればトリオン体の反応速度次第で防衛も可能！位置を知られては苦しいぞ狙撃手！』

東『まあ、普通はそうですね』

穂刈を追う遊真にブレードによる斬撃が襲いかかる
遊真はしゃがむことで回避しすぐさま姿勢を整える

東『……………ただ荒船に限って言えば、あいつは元・攻撃手ですからね』
アクシヨン派狙撃手

荒船哲次

・個人ポイント

イーグレット：8349

弧月：8266

諏訪「荒船が抜きやがった！日佐人！おまえは穂刈をやれ！」

笹森「諏訪さんは？」

諏訪「俺は攻撃手2人をまとめて吹っ飛ばす！」

笹森「了解！」

諏訪隊はバググワームを起動し2方向に別れて点を取りに向かった

武富『荒船隊長が弧月抜刀！空閑隊員と剣比べか!?!』

東『荒船は本職の攻撃手じゃありませんが……ここで空閑を止めたことで穂刈の援護射撃が効くようになりますよ』

遊真「こつちで来たか………まあそれはそれで」

荒船「クソ生意気な新人だ、ぶった斬^{ルキ}つてやるぜ」

◆ WORLD TRIGGER ◆

武富『さあB級ランク戦二日目・夜の部！徐々に形勢が傾いてきました！ここまでのスコアは……玉狛第二1得点ノーアウト！諏訪隊1得点1アウト！そして荒船隊！得点なし1アウト！狙撃手有利のこのMAPで以外にも狙撃手が追い詰められる荒船隊

には苦しい展開！ここで反撃に転じたのは……………剣も狙撃もマスタークラス！武闘派狙撃手荒船隊長！攻撃手から狙撃手という異色の経歴の持ち主です！たしか私がB級に上がった頃には荒船隊は既に狙撃手3人部隊だったと記憶していますが……………」

緑川『荒船さんは8ヶ月前まではバリバリの攻撃手で順位もかなりよかつたよ。今でもたまに弧月でランク戦やつてるし。荒船さんが攻撃手やめたときはみんな「なんで？」って言ってたくらい』

荒船はバツグワームを纏ったまま左手で弧月を振るう

バツグワームを靡かせて遊真の視界から得物を隠しバツグワームを突き刺すようにして遊真を攻撃する

しかし遊真は少し左肩を削られつつも回避する

武富『バツグワームを目隠しに使うって攻撃!?!』

東『それっぽいことしてますね。ですが実際、荒船がバツグワームを解除しないのは諏訪に削られた足を隠すためでしょう。バレればそこを攻められます』

武富『なるほど……………!』

荒船の不意打ちを躲した遊真に立て続けに穂刈から狙撃が飛んでくる

遊真は間一髪ギリギリで回避するがその隙を見逃さず荒船が斬り掛かる

回避しきれない遊真は仕方なしにスコープオンで受け太刀する

しかし耐久値の低いスコープイオンは一撃で刃こぼれと刀身の罅を起こした

武富『空閑隊員が初めて太刀を受けた！穂刈隊員の援護狙撃が機能している！スコープイオンと弧月では耐久力に差があります！打ち合えば荒船隊長が有利！』

遊真（思ったよりやりにくいな、さっきのやつと同じおれの動きを知ってる動きだ）

加賀美「諏訪隊の2人がリーダーから消えてる、奇襲警戒！」

穂刈（登ってこれねーだろ、諏訪さんは。吹っ飛ばしたからな、片足。来るとしたら……）

笹森「穂刈先輩をマークしました！」

穂刈「この野郎。忙しいんだよ、オレは」

荒船（笹森……！じゃあ諏訪さんはこつちに来るか？）

武富『諏訪隊も2手に分かれそれぞれ得点を狙う！戦況が混沌としてきた！』

東『各隊ここが勝負所ですね。荒船隊は2人ともマークされていて諏訪隊もバラけた。これは玉狛が当初から狙っていた状況にかなり近いハズ。最大のチャンスをものできるか、逆にそれを跳ね返せるか、あるいは自分たちのチャンスに変えられるか、荒船と空閑のエース対決を中心にしておそらくここで決まります』

武富『両方の強さを知る緑川くんから見えてエース対決はどちらに分があると思いますか？』

緑川『そりや遊真先輩だね。荒船さんは今は狙撃手がメインだし、遊真先輩が勝つと思おう』

荒船（ちつ……さすがレイジさんや迅さんの後輩。曲者揃いじゃねーか、3人とも………！）

東『玉狛の雨取隊員が地味にいい動きをしますね。荒船隊の2人を狙えるいい距離にいつの間にか陣取ってます。バググワームを使わずレーダーに映っているので荒船隊は雨取隊員の攻撃にも意識を割かざるをえない。ただそこにいるだけで荒船と穂刈を心理的に挟み撃ちしている。いい射程の使い方ですね。そして何より、三雲隊長が特殊工作兵として登録している為、いつでも雨取隊員を逃がせると荒船隊はわかっているでしょうから雨取隊員を狙うこともできない。ただ隙を見せて無駄弾を撃つことになりませんか』

嵐山「これ多分三雲くんの指示だろう？やるなあ、三雲くん」

木虎「偶々じゃないですか？」

穂刈「(雨取の射線がジャマで制限されるな、逃げ道が。追いつかれるぜ)………おい笹森、いいのか？諏訪さんについてなくて………それとも外されたか？戦力的にお前じゃ勝てねーもんな、荒船には」

穂刈は笹森とプライベートでもそこそこ仲が良く、笹森の性格を知っているため挑発

するが大規模侵攻で『黒トリガー』使いと対峙する忍田を見て役割の大切さを深く理解していた為笹森は動じなかった

笹森「そうすね、でも今は穂刈先輩をおさえるのがオレの役目なんで」

穂刈「(……………やべえな。こんな落ち着いたやつだったか？こいつ……………撃つか？この距離で。当たんねーだろな、走りながらじゃ)……………こりや死んだな、オレ」

自身の死を悟った穂刈は最後の仕事として荒船を援護すべく空閑を狙撃した
 笹森が穂刈を追っていた為、あまり警戒していなかった遊真は左肩を撃ち抜かれ左腕が死ぬ

遊真を撃った穂刈はスグに笹森によって落とされた

武富『穂刈隊員捨て身で狙撃!?!』

東(空閑が崩れた)

緑川『まだだよ』

遊真は自身の後ろの足元にグラスホッパーを1枚展開しバックステップする

荒船「(グラスホッパー！上！)逃がすか!!」

しかし遊真は荒船の不意をつき、グラスホッパーを踏まずにその奥の壁を蹴る

荒船「!!」

東・緑川『上手い!』

荒船の不意を突いた攻撃は荒船の両脚を切り落とす

荒船「……………!!」

アナウンス『警告、トリオン漏出甚大』

荒船（この場面でフェイントのためだけにグラスホッパーを……………!?このチビ戦い慣れしすぎだろ……………!!）

と、ここで追いついた諏訪が住宅の屋根から攻撃手2人に向けて銃撃を浴びせる

両脚を失った荒船は少しづつ削られ、遊真はシールドで防ぎつつ躲すことでノーダメージで凌いだ

千佳「遊真くん、笹森先輩がそっちに向かったよ。今カメレオンを起動した!」

修「よし、宇佐美先輩サポート頼みます!」

宇佐美「OK!遊真くん、真後ろのちよびつと左!すぐ来るよ!」

遊真「了解（それさえわかってれば顔出した瞬間に殺せる）」

しかし遊真の思惑とは裏腹に笹森は姿を見せぬまま遊真に抱きついて拘束した

遊真「……………!!」

修「!?（空閑の動きが……………!?）」

遊真はすかさず背中にスコープオンを出して笹森を貫く

笹森「ぐっ!! 諏訪さん!! 止めました!!」

修（武器を使わずに……………!!）

諏訪「よくやった日佐人、吹っ飛ばす!!」

諏訪が両攻撃の体制に入る

宇佐美「千佳ちゃん!」

千佳「はい!」

しかしそこをすかさず千佳の砲撃で建物を壊して諏訪の体制を崩す

建物の崩壊に紛れて遊真は自身をおさえていた笹森の両腕を切り落としてぬけだし
トドメを刺す

アナウンス『戦闘体活動限界』

諏訪（ここで大砲かよ、くそつたれ! 射線も何もおかまいなしじゃねーか!）

荒船は撃ち終わって隙をさらした千佳を狙撃するが千佳が狙撃が終わると同時に
バググワームを解除して展開した固定シールドで防がれる

諏訪は遊真に攻撃を集中させ両攻撃で仕留めに掛る

諏訪（こつちにや追う足がねえ、よってきてくれて助かるぜ）

遊真は諏訪の攻撃をかいくぐって接近するとグラスホッパーを使って堤を仕留めた
時と同じ動きをする

しかしそれを読んだ諏訪が勝ちを確信する

武富『読み切った!』

東『勝負ありですね。玉狛の勝ちです』

遊真がグラスホッパーで飛んだ場所には最初に荒船隊が千佳を狙っていた時に仕掛けていたワープがあつた

遊真はワープで回避しグラスホッパーで諏訪の後ろを取ると諏訪の首を跳ねて緊急脱出させる

諏訪（最後の最後で……………ワープかよ……………!!）

アナウンス『戦闘体活動限界、緊急脱出』
ベイルアウト

武富『諏訪隊長、荒船隊長が緊急脱出!!ここで決着!最終スコア6対2対0!玉狛第二の勝利です!』

船隊	0	0	得点	生存点	合計	玉狛第二	4	2	6	諏訪隊	2	2	荒
----	---	---	----	-----	----	------	---	---	---	-----	---	---	---

武富『デビュー2戦目も6得点!玉狛第二の勢いは止まらない!』

時枝「強い」

武富『なお、荒船隊長はトリオン漏出による緊急脱出ですが、それに至るダメージを与えたのは空閑隊員なので空閑隊員の得点としてカウントされます!』

◇ 荒船隊作戦室 ◇

加賀美 「お疲れ様」

荒船 「悪い、誰も仕留められなかった」

穂刈 「いや固すぎたな、あれは」

◇ 諏訪隊作戦室 ◇

小佐野 「すわさん0点！ つつみんとひさとは1点ずつ獲ったのに！」

諏訪 「うるせー！ 俺が1番へこんでんだよ！」

◇ 玉狛第二作戦室 ◇

宇佐美 「みんなお疲れ様」

遊真 「サンキューチカ。助かった」

千佳「……………うん！」

◇ランク戦観戦室◇

武富『……………さて、振り返ってみてこの試合いかがだったでしょうか？』

東『そうですね、終始玉狛が作戦勝ちしていたという印象ですね。相手の得意な陣形を崩す、エースの空閑をうまく当てる。この2つを徹底して実行できたことが6点という結果に繋がったと思います。標的ターゲットにされた荒船隊には苦しい展開でしたがそれだけ玉狛が荒船隊を警戒していたということでしょう。最後弧月を捨てて狙撃したのはいい判断でした。ただ、相手が悪かったですね。雨取隊員のシールドは硬すぎる。諏訪隊は堤が落とされたのが痛かったですね。本来諏訪と組んでの集中砲火が強みなんですが、今回は荒船隊全員をマークするためにバラけざるをえなかった。これも玉狛の計算のうちだったと思います』

黒江「米屋先輩」

米屋「あん？どした？」

黒江「玉狛の作戦ってそんなに意味があつたんですか？単にクガって人が強かつただけに見えたんですけど」

米屋「どうなの？センパイ」

古寺「おれですか？……………黒江ちゃんの言う通り確かに空閑は強いけど普通のMAPで五分の条件だったら玉狛が荒船隊を崩すのは難しかったと思うよ。さつき東さんも解説で言つてた通り遠距離戦じゃ経験の差が歴然だからね。玉狛もそれをわかつてたから極端な地形を選んで勝ち筋を限定した。諏訪隊を巻き込んで『高台を取れるかどうかの勝負』に引き込んだんだよ」

黒江「……………荒船隊と諏訪隊を自分たちのルールに乗せたつてことですか？」

古寺「いい表現だね、その通り。『地形を使って相手を動かす』これは地形戦の基本であり真髓なんだ。『動かされた側』の2チームはずつと対応に追われて『動かした側』の玉狛は最後まで『次の一手』があつた。その余裕の差があつたから、結果的に点差が開いたんだと思うよ」

黒江「なるほど……………ありがとうございます」

古寺「どういたしまして？」

東「え……………古寺に全部言われたので話すことが無くなつちやいました」

古寺「あつすいません！」

東が話すことが無くなったため原因の古寺を使って会場を笑いに包んだ

武富『……………さて、本日の試合が全て終了！暫定順位が更新されます！玉狛第二が8位に上昇！早くもB級中位のトップに立った！諏訪隊は11位、荒船隊は12位にダウン！次回の対戦の組み合わせも出ました！注目の玉狛第二の次の相手は……………暫定14位那須隊と暫定9位鈴鳴第一』

荒船「……………！鈴鳴第一……………！」

東『これは……………面白い組み合わせですね。鈴鳴第一と那須隊は前衛、中衛、後衛がそれぞれ1人ずつ、そして中衛の隊員が隊長という似通った編成の部隊です。そして鈴鳴第一にはナンバー4攻撃手の村上がいる。玉狛は次はMAPを選べないし、順位的にもマークされる側……………玉狛第二の真価を問う一戦になりそうですね』

東はそう締めくくってB級ランク戦二日目・夜の部が終了した